

福岡広域都市計画道路3・3・1-78号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路3・4・1-159号  
原田箱崎線整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)

# 箱 崎 64

- 第92次・第102次・第108次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1457集

2 0 2 2

福岡市教育委員会



# 箱崎 64

- 第92次・第102次・第108次発掘調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1457集



遺跡略号	調査番号
HKZ-92	1830
HKZ-102	1940
HKZ-108	2011

2022

福岡市教育委員会



## 序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれており、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に伴う箱崎遺跡第92次・第102次・第108次発掘調査について報告するものです。この度の調査では中世の集落跡を検出しました。これらの調査は従来発掘調査例が少なく、長らく不明であった九州大学箱崎キャンパス内における中世の箱崎遺跡の様相を明らかにするという重要な成果をもたらしました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

## 例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡広域都市計画道路3・3・1-78号堅粕線整備事業及び福岡広域都市計画道路3・4・1-159号原田箱崎線整備事業に伴い、福岡市東区箱崎6丁目10-1番地において実施した箱崎遺跡第92次・第102次・第108次発掘調査の報告書である。
- 第92次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に板倉有大が行なった。
- 第102次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に藏富士寛が行なった。
- 第108次調査の遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に阿部泰之が行なった。
- 本書で用いた方位は特に断りなき限り世界測地系に基づく。
- 遺構の呼称は柵列をSA・掘立柱建物をSB・溝をSD・井戸をSE・土壌をSK・鍛冶炉をSL・柱穴およびピットをSP・木棺墓をSR・性格不明の遺構をSXと略称する。
- 本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 本書の編集は阿部が行なった。
- 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

箱崎遺跡第92次調査

遺跡調査番号	1830	遺跡略号	H K Z - 92
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1	分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000 m <sup>2</sup>	調査面積	1,514.1 m <sup>2</sup>
調査期間	平成30年11月1日～平成31年3月31日	事前審査番号	30-1-61

箱崎遺跡第102次調査

遺跡調査番号	1940	遺跡略号	H K Z - 102
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1	分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000 m <sup>2</sup>	調査面積	2,712.76 m <sup>2</sup>
調査期間	令和元年8月19日～令和2年2月28日	事前審査番号	30-1-61

箱崎遺跡第108次調査

遺跡調査番号	2011	遺跡略号	H K Z - 108
所在地	福岡市東区箱崎6丁目10-1	分布地図番号	34 箱崎
開発面積	25,000 m <sup>2</sup>	調査面積	541.63 m <sup>2</sup>
調査期間	令和2年5月1日～令和2年7月7日	事前審査番号	30-1-61

## 本文目次

はじめに .....	1
調査に至る経緯	
調査組織	
第1章 位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 第92次調査の記録 .....	9
第1節 調査の概要 .....	9
第2節 第Ⅰ区第1面の調査 .....	11
第3節 第Ⅰ区第2面の調査 .....	33
第4節 第Ⅱ区の調査 .....	49
第5節 自然科学分析 .....	71
第6節 総括 .....	90
第3章 第102次調査の記録（1） .....	115
第1節 調査の概要 .....	115
第2節 2区の調査 .....	115
1. 調査の概要 .....	115
2. 遺構と遺物 .....	115
第3節 4区の調査 .....	126
1. 調査の概要 .....	126
2. 遺構と遺物 .....	129
第4節 6区の調査 .....	137
1. 調査の概要 .....	137
2. 遺構と遺物 .....	137
第4章 第108次調査の記録 .....	145
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	

# 挿 図 目 次

## 【第1章】

第1図 箱崎遺跡と周辺の主な遺跡(1/50,000) .....	6	第54図 植物珪酸体分析結果 .....	81
第2図 箱崎遺跡と既往の調査位置図 .....	7	第55図 主要珪藻ダイアグラム .....	83
第3図 本書にて報告する調査区位置図 .....	8	第56図 器物の基礎構造(左)と釘の木質バターン(右) .....	88

## 【第2章】

第4図 第I区第1面遺構全体図(1/150) .....	10	(1/1, 1/3) <表一覧>	67
第5図 第I区壁面土層実測図(1/80) .....	11	第54図 植物珪酸体分析結果 .....	81
第6図 SP出土土器実測図(1/3) .....	12	第55図 主要珪藻ダイアグラム .....	83
第7図 SL051・147, SK008, SP154 実測図(1/20) .....	13	第56図 器物の基礎構造(左)と釘の木質バターン(右) .....	88
第8図 SK031・106・135・094・023・144・098 実測図(1/40) .....	14	第57図 鉄釘の木材バターン(左)と木棺の想定図(右) .....	89
第9図 SK063・014・153・131・027・006・005 実測図(1/40) .....	15		
第10図 SK151・049・073 実測図(1/40) .....	16		
第11図 SK019・026・018・138・022・001 実測図(1/40) .....	17		
第12図 SK出土土器実測図(1/3, 1/4) .....	18		
第13図 SK出土土器・土製品実測図(1/2, 1/3, 1/4) .....	19		
第14図 SE035・155, SX036, SE056・047 実測図(1/40) .....	20		
第15図 SE出土土器・土製品実測図(1/2, 1/3, 1/4) .....	21		
第16図 SX・包含層出土土器実測図(1/3, 1/4, 1/6) .....	22		
第17図 SP・SK出土石製品・土鍾実測図(1/2) .....	23		
第18図 SK153・063出土石製品三次元モデル画像および実測図(1/6) .....	24		
第19図 SE・SK・SX・包含層出土石製品・土鍾・木製品実測図(1/2) .....	25		
	26	【第3章】	

第20図 第I区第1面金属製品実測図およびX線画像(1/1) .....	28	第58図 第102次調査区(1/600, 1/400) .....	115
第21図 第I区第2面遺構全体図(1/150) .....	34	第59図 2区土層(1/1,000, 1/60) .....	116
第22図 SR155 実測図(1/20) .....	35	第60図 2区遺構配置(1/100) .....	117
第23図 SR152 鉄釘出土位置模式図 .....	35	第61図 2区SK(1)(1/40) .....	119
第24図 SR152出土土器実測図(1/3, 1/4) .....	36	第62図 2区SK(2)(1/40) .....	121
第25図 SX168 実測図(1/20) .....	37	第63図 2区SK出土遺物(1/4, 1/3) .....	122
第26図 SX168出土土器実測図(1/3) .....	37	第64図 2区SE2095(1/40, 1/3) .....	123
第27図 SE158・190・191・192・193・195・196 実測図(1/40) .....	38	2区鍼・礎石を有するSK・SP(1/40) .....	124
第28図 SE出土土器実測図(1/3) .....	39	2区鍼・礎石を有するSK・SP出土遺物(1/4, 1/3) .....	125
第29図 SD 平面実測図(1/100) .....	40	第65図 4区土層(1/1,000, 1/60) .....	126
第30図 SD 断面実測図(1/50) .....	41	4区遺構配置(1/100) .....	127
第31図 SK176・160 実測図(1/40) .....	41	4区SD4035(1/60, 1/40, 1/8) .....	128
第32図 SD・SK・SX出土土器実測図(1/3) .....	42	4区SD4035出土遺物(1)(1/3) .....	128
第33図 SK・SE・SX出土石製品・土鍾実測図(1/2) .....	44	4区SD4035出土遺物(2)(1/4) .....	129
第34図 第I区第2面金属製品実測図およびX線画像(1/1, 1/3) .....	46	4区SD(2)・SK・SE(1/40) .....	131
第35図 第II区遺構全体図(1/200) .....	50	4区SE出土遺物(1/4, 1/3) .....	132
第36図 第II区壁面土層実測図(1/80) .....	51	4区ST4005～4009(1/40) .....	135
第37図 SX044 実測図(1/10) .....	52	4区ST4005・4006・4008出土遺物(1/4, 1/3) .....	136
第38図 SX044出土土器実測図(1/3) .....	52	4区その他の遺物(1/3) .....	137
第39図 SP出土土器実測図(1/3) .....	53	6区遺構配置(1/100) .....	138
第40図 SK034・033・030・042・035・032・037 実測図(1/40) .....	54	6区SE6010(1/40) .....	139
第41図 SK038・036・040・022・023 実測図(1/40) .....	54	6区SE6010(1/3) .....	140
第42図 SK061・068・054・056・057・060・049 実測図(1/40) .....	55	6区その他の遺物(1/3) .....	140

	56	【第4章】	
第43図 SK046・020・014 実測図(1/40) .....	57	第81図 第108次調査2区南壁土層断面実測図(1/100) .....	145
第44図 SK出土土器実測図1(1/3, 1/4) .....	58	第82図 第108次調査1区全体図(1/150) .....	146
第45図 SK出土土器実測図2(1/3, 1/4) .....	59	第83図 第108次調査2区全体図(1/100) .....	147
第46図 SE039 実測図(1/40) .....	60	第84図 第108次調査井戸1号実測図(1/60) .....	148
第47図 SE063・064 実測図(1/40) .....	61	第85図 第108次調査SE01出土遺物実測図(1/3) .....	149
第48図 SE出土土器実測図(1/3) .....	62	第86図 第108次調査SE02・03出土遺物実測図(1/3) .....	149
第49図 SK・包含層・擾乱出土土器実測図(1/3) .....	63	第87図 第108次調査SE01・02, 05・06出土遺物実測図(1/3) .....	149
第50図 SK出土石製品・土鍾実測図(1/2) .....	64	第88図 第108次調査SK13出土遺物実測図(1/60) .....	150
第51図 SK・SE出土石製品・土鍾実測図(1/2, 1/3) .....	65	第89図 第108次調査SK13出土遺物実測図(1/3) .....	150
第52図 SK020, SE063出土石製品実測図および三次元モデル画像(1/6) .....	66	第90図 第108次調査SE03出土遺物実測図(1/3) .....	150
第53図 第II区出土金属関係遺物実測図およびX線画像	93	第91図 第108次調査SK03出土遺物実測図(1/3) .....	151
		第92図 第108次調査出土石鍾・土鍾・土製品実測図(1/3) .....	151
		第93図 第108次調査出土金属器実測図(1/3) .....	152

# はじめに

## 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、国立大学法人九州大学（以下、九大）施設部施設企画課から、同市東区箱崎6丁目10番1号（敷地面積457.385m<sup>2</sup>）における土地売却に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年11月22日付で受理した（事前審査番号：24-2-809ほか）。

これを受け市内の埋蔵文化財関係事務を補助執行する経済観光文化局埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が広大なうえ、周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡・元寇防塁を含むことから、平成24年12月から試掘調査を開始した。その結果、現地表面下80～130cmで地山である砂丘砂上に遺構が確認された。

その後、申請地における土地利用計画が立案され、計画案のうち都市計画道路原田箱崎線および堅粕箱崎線については独立行政法人都市再生機構九州支社（以下、UR）が整備することとなったため、遺構の保全等に関して九大・UR・埋蔵文化財課の3者で情報共有のうえ協議・調整を行った。

その結果、確認調査により遺構が確認された都市計画道路原田箱崎線とそれに隣接する部分については、埋蔵文化財への影響が回避できないことから記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成30年9月25日付で「九州大学箱崎キャンパス跡地における都市計画道路整備事業に係る埋蔵文化財の取扱いに関する基本協定書」（以下、協定書）が締結された。

協定書に従い、発掘調査および調査後の資料整理・報告書作成に要する費用については、都市計画道路部分はURが、それ以外の部分は九大が負担することとしている。

その後、平成30年10月15日付で福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査および埋蔵文化財整理・報告書作成作業に関する業務委託契約（以下、委託契約）を締結し、同年11月1日から発掘調査を、翌平成31年度から資料整理・報告書作成を順次おこなうこととなった。

なお、発掘調査と整理・報告書作成事業は別個の委託契約とし、UR・九大各々と2者で契約を締結している。

## 2. 調査組織

調査委託：独立行政法人都市再生機構九州支社

　　国立大学法人九州大学

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課長 大庭康時 （平成30年度）

菅波正人 （令和元～3年度）

調査第1係長 吉武 学 （平成30～令和2年度）

本田浩二郎 （令和3年度）

調査庶務：文化財活用課管理係 係長 藤 克己 （平成30～令和元年度）

大森秋子 （令和2年度）

石川あゆ子 （令和3年度）

係員 松原加奈枝 （平成30～令和2年度）

		内藤 愛	(令和3年度)
事前審査：埋蔵文化財審査課	事前審査係長	本田浩二郎	(平成30～令和2年度)
		田上勇一郎	(令和3年度)
事前審査係	主任文化財主事	田上勇一郎	(平成30～令和2年度)
		森本幹彦	(令和3年度)
文化財主事	吉田大輔	吉田大輔	(平成30年9月まで)
		中尾祐太	(令和元年9月まで)
		松崎友理	(令和2年8月まで)
		神 啓崇	(令和2年9月～令和3年度)
調査担当：埋蔵文化財課			
調査第1係	文化財主事	板倉有大	(第92次調査)
調査第2係	主任文化財主事	藏富士寛	(第102次調査)
		阿部泰之	(第108次調査)

※調査担当者の所属は調査当時のもの。

# 第1章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

現在の行政区画上の福岡市は、東は三郡山地、西と南を脊振山地に囲まれ、博多湾を包み込むようにして玄界灘に面している。博多湾を囲む山地からは多くの河川が博多湾に注いでおり、それぞれが扇状地を形成し平野を構成しているが、これらの平野と博多湾が接する沿岸部には砂州と砂丘が発達している。箱崎砂層と呼ばれるこの砂州と砂丘は東区箱崎付近から室見川河口付近まで分布しており、多くの遺跡が確認されている。なお、砂丘の形成時期は考古学および地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。

箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の南北に延びる標高35mから40mの砂丘上に位置する。箱崎遺跡は概ね南北10km、東西500mの範囲に広がり、西側は博多湾に臨み、東側は宇美川の氾濫により浸食を受けている。箱崎遺跡が位置する砂丘は南に標高を下げながら更に伸び吉塚本町遺跡へと続き、南西1.5kmの古砂丘には博多遺跡群が位置する。

現在、砂丘の海岸側は埋め立てが進み、高層建築物が立ち並んでいるため往年の状況は窺い難いが、高層建物等の階上からは博多湾の海面を指呼の間に臨むことができる。

## 第2節 歴史的環境

箱崎遺跡では、1983（昭和58）年の地下鉄建設に伴う第1次調査以来、2021（令和3）年10月時点まで120次にわたる調査が行われており、縄文時代晩期から近世に至る各時期の遺構・遺物が確認されている。箱崎遺跡ではその地割による狭小な面積の発掘調査が多いが、とりわけ中世では石清水八幡宮をはじめとする中央権門とのつながりからくる特異性が明らかになりつつある。本節では遺構・遺物が安定的にみられる古墳時代と、平安時代以降中世の箱崎遺跡に焦点を当て、これまでの調査成果をもとに概観したい。

### 1. 古墳時代

古墳時代の遺構・遺物は、遺跡が乗る砂丘の東斜面、宇美川に面した範囲に集中している。箱崎遺跡では筥崎宮区画整理事業として、JR鹿児島本線箱崎駅周辺において再開発が実施されており、それに伴う発掘調査で古墳時代の大規模な集落跡と墳墓群の存在が確認された。

集落跡は筥崎宮の北東側、砂丘の最高所付近で検出された。第8次調査・20次調査1区・30次調査16区で古墳時代前期の堅穴住居跡が検出され、前期初頭頃に集落が形成されたことがわかっている。この集落は前期を通じて存続するが、中期に入ると衰退し、6世紀には廃絶することが発掘調査の結果から見て取れる。遺物は土器類のほか、第8次調査では滑石製石錘やイイダコ壺・陶質土器、第30次調査16区では5世紀後半頃の堅穴住居跡から滑石製白玉・勾玉・劍型模造品が、第40次調査18区、第52次調査では小片ながら東海系S字状口縁壺が出土している。

集落跡からは滑石製石錘やイイダコ壺など漁労に関係する遺物が多く出土しており、漁撈に深くかかわった住民の生活を窺うことができる。石錘は博多湾西岸の遺跡から同型のものが出土しているほか、東海系土器や陶質土器が出土していることから、博多湾沿岸のみならず海を介した遠方との交流も想定される。

一方、墓域は集落から深い谷を挟んだ南西側の高所で検出されている。第22次調査4区、第26次調査6区では土器棺墓が、第40次調査19区では方形周溝墓が検出された。これらの墳墓は集落が形

成された古墳時代初頭に遡ると推測されている。第40次調査19区では方形周溝墓のほかに円墳2基、石室状遺構が検出されており、円墳のうち1号墳は集落が衰退を始める5世紀中頃、2号墳は集落廃絶に近い6世紀後半に位置付けられている。2号墳は石室の床面が遺存しており、直刀・鉄鎌・鐵鎌・刀子が出土した。

## 2. 平安時代前期

平安時代前期の遺構・遺物は、菖崎宮の南東、東西100m、南北300mの範囲に集中している。遺構は戸戸戸や土壙で、特異なものとして梵鐘鋲造遺構が挙げられる。官衙の特徴を示す掘立柱建物や方形の区画は検出されていないが、官衙あるいは官人の存在をうかがわせる以下のような遺物が出土している。

第26次調査では石帶巡方が、第47次調査では權が出土した。越州窯系青磁は第26次調査で多く出土しているが、粗製品の部類に入るものが多いようである。

瓦は第47次調査で10世紀後半～11世紀前半頃のものが大量に出土した。建物廃絶後、井筒の構築材に転用されたものと推測され、大宰府・鴻臚館出土瓦と同型式のものが含まれる。

菖崎宮が遷座した平安時代前期の箱崎遺跡は、その出土遺物から官人の存在が窺えるものである。大宰府・鴻臚館出土瓦と同型の瓦が出土するなど大宰府とのつながりや、対外交易の拠点としての発展の萌芽をみることができる。

## 3. 式内社菖崎宮

箱崎遺跡が乗る砂丘の中央部、標高3.5mほどの高所に菖崎宮が位置する。箱崎遺跡の中心となる区域であり、「菖崎宮縁起」によると延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとあるが、この時期は鴻臚館の最末期にあたる。遷座にあたっては大宰府官人の対外交易に関する思惑が背景にあったとされ、それに従うならば菖崎宮それ自体が対外交易の拠点としての性格を有していたことになる。

延長5（937）年に成立した『延喜式』神名帳には、「八幡大菩薩菖崎宮一座 名神大」との記述がみえ、このころには菖崎宮が成立しており、名神大社の社格が与えられていたことがわかる。

平安時代末頃の成立とされる『今昔物語集』二六には、菖崎宮神官と大宰府府官を兼任した秦貞重と宋商人の交渉が描かれる。秦貞重は日宋貿易に従事することで得た富によって中央権門とも密接なつながりを持っていたと考えられ、菖崎宮は対外交易に深くかかわっていた大宰府とその成立から密接な関係を有していたことが箱崎遺跡における平安前期の出土遺物からも窺える。

菖崎宮は治承4（1024）年に石清水八幡宮の傘下に入る。その前年には石清水八幡宮別当に宇佐弥勒寺講師元命が就任しており、平安時代後期になると脚台付きの土師器壺のような神饌用と考えられる特殊な土器や、畿内とあわせて豊前地域とのつながりを示す遺物がみられるようになる。菖崎宮は治承・寿永の内乱（1180～1189）後石清水八幡宮別宮となり、楠葉型瓦器といった畿内産土器がひきつづき多く出土している。

## 4. 平安時代後期

平安時代後期には、遺構・遺物が確認できる範囲はそれまでのほぼ倍の範囲に拡大し、砂丘の西斜面でもみられるようになる。

この時期に属する遺物の特徴は、特定の地域から搬入されたものが目立つ点である。第26次調査7区からは在地の土師器に交じて少数ながら豊前型土師器壺が、第26次調査8区では楠葉型瓦器壺をはじめとする畿内産土器が多く出土している。菖崎宮が石清水八幡宮の傘下に入った時の別当元

命は宇佐弥勒寺講師を務めており、豊前型土師器壺は宇佐地域からの人の動きを示すもの可能性がある。また、楠葉型瓦器椀は主として畿内から下向する官人や水運関係者の携行品とされ、治安4（1024）年に筥崎宮が石清水八幡宮の傘下となった結果、他の遺跡と比し多く出土するものと考えられる。

平安時代後期の箱崎遺跡では、博多遺跡群同様中国陶磁器が多量に出土するようになる一方、残りの良い高麗青磁の優品が出土している。また、祖型を高麗にもつ單弁八葉軒丸瓦と花菱半截文軒平瓦が遺跡の南東で径200mの範囲、現在の筥崎宮境内裏手の東南部から出土しており、筥崎宮の堂宇のいずれかに用いられたものと考えられ、高麗との経済的なつながりをもつ人物がその造営にかかわった可能性を示している。

## 5. 平安時代末から鎌倉時代

12世紀後半になると、遺構・遺物は砂丘のほぼ全域に分布するようになる。井戸や土塼といった深い遺構のほか、建物にまとめられるものは少ないが柱穴等も多数検出されている。建物にまとめられた柱穴の軸線は砂丘の地形に合う現況の街区に沿っており、これまでの発掘調査において顕著な道路遺構が検出されていないことから、筥崎宮を中心とする街区の成立が中世以前にさかのばる可能性を示すものである。

遺物は中国陶磁器の出土量が増加し、陶磁器片を廃棄した井戸や土塼、陶磁器の完品を複数供献した木棺墓や土塼墓が多数検出されている。また、博多と異なる点として宗教用具とみられる遺物も目立ち、ミニチュア銅付三足羽釜が第56次調査をはじめ複数の調査区から出土している。

## 6. 鎌倉時代後期から南北朝時代

箱崎遺跡では、13世紀後半に受けた2度にわたる蒙古襲来を物語る遺構として、元寇防壁の一部とみられる石垣遺構が九大箱崎キャンパス跡地で複数個所検出されている。また、砂丘の北西側、東西100m・南北300mの範囲を中心に13世紀後半頃、文永の役に伴う兵火の痕跡のある焼土層が検出されている。

この時期の箱崎遺跡では、龍泉窯系青磁の優品が高い頻度で出土している。第26次調査7区では鼎形、第32次調査では鬲形の小形青磁三足香炉が出土している。とくに第32次調査出土個体は焼成・発色ともに良好で、鎌倉期の箱崎が、石清水八幡宮別宮であった筥崎宮の力を背景とし、同時期の博多に劣らない対外交易の拠点に発展していたことが窺える。

## 7. 室町・戦国時代

15世紀にはいると、それまで箱崎遺跡が乗る砂丘全体に広がりを見せていた遺構・遺物が、砂丘の南北端部に集中するようになるが、遺跡の中心部分での発掘調査例は少なく、分布については不明なところがある。文明12（1480）年には飯尾宗祇が筥崎宮に参詣し、「筑紫道記」に兵火による焼失後、再建途中であった堂宇の様子が述べられている。

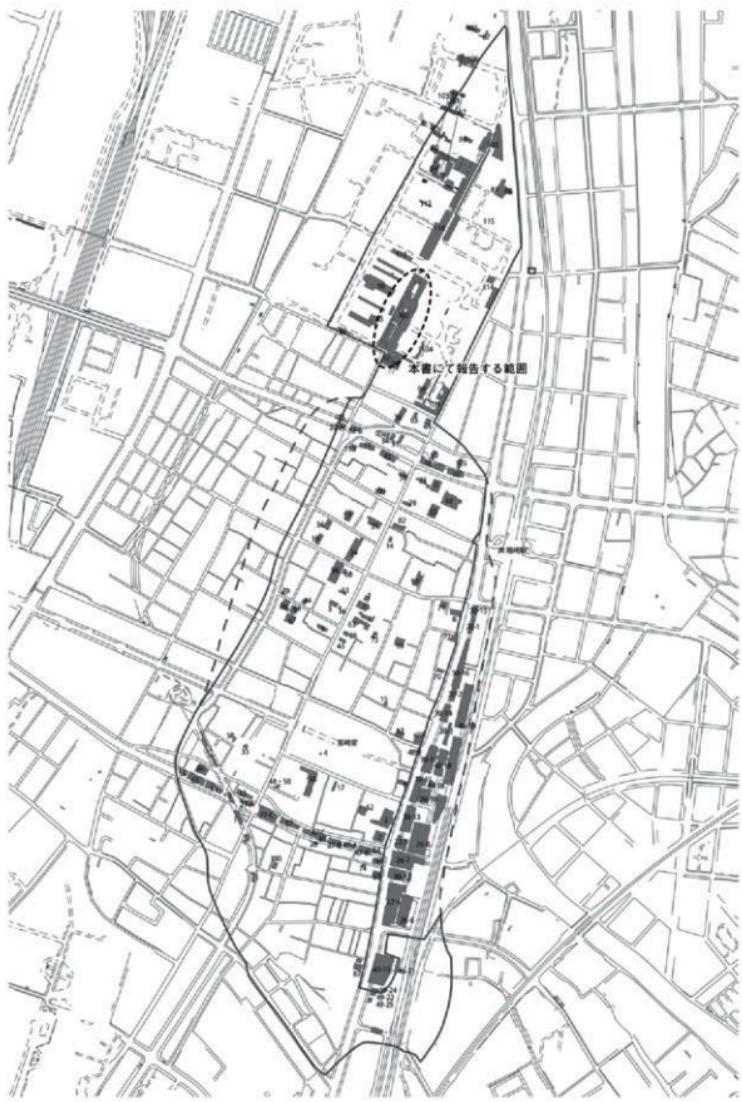
現在みられる筥崎宮本殿と拝殿は天文15（1546）年に大内義隆によって、楼門は文禄3（1594）年に小早川隆景によって建立され、いずれも国の重要文化財に指定されている。16世紀代になると遺構・遺物とも減少するが、今まで続く町場での発掘調査例が少なく箱崎遺跡の衰退を示すものと概にいふことはできない。現存する町屋の地下に当該期の遺構が眠っている可能性は高いといえる。

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は令和3年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。本文の内容に直接関わらない遺跡は一部省略しています。

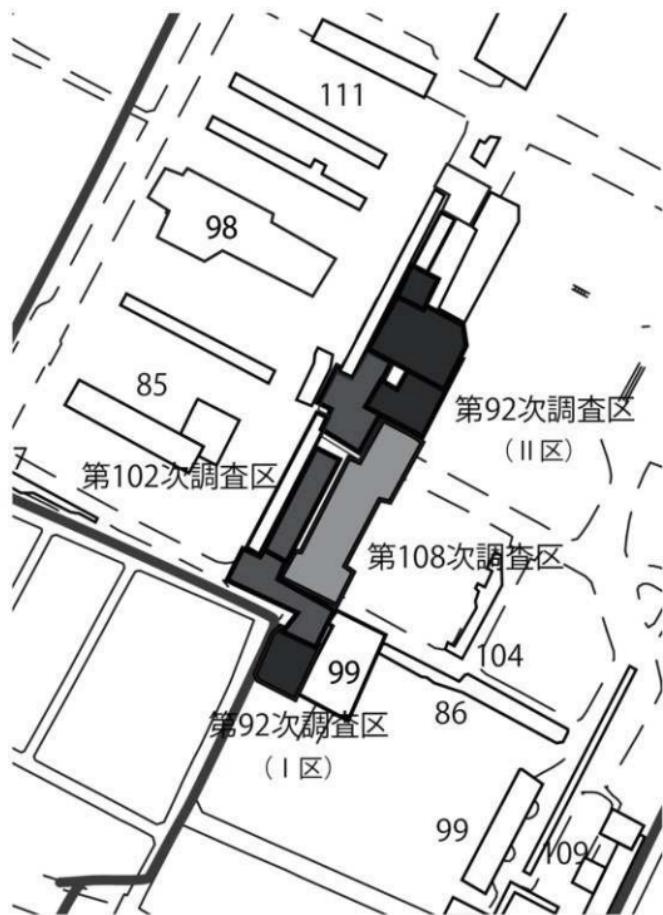


第1図 箱崎遺跡と周辺の主な遺跡 (1/50,000)

- 1 箱崎遺跡 2 元寇防壁 3 吉塚本町遺跡 4 吉塚祝町遺跡 5 墓柏遺跡 6 吉塚遺跡 7 博多遺跡群 8 上牟田遺跡 9 席田平尾遺跡 10 雀居遺跡 11 久保園遺跡 12 下月隈D遺跡 13 山王遺跡 14 比恵遺跡群 15 那珂遺跡群 16 五十川遺跡 17 諸岡A遺跡 18 諸岡B遺跡 19 那珂君体遺跡 20 板付遺跡 21 高烟遺跡 22 住吉神社遺跡 23 元寇防壁(国史跡) 24 福岡城・鴻臚館(国史跡)



第2図 箱崎遺跡と既往の調査地位置図



第3図 本書にて報告する調査区位置図

## 第2章 第92次調査の記録

### 第1節 調査の概要

#### (発掘作業)

平成30年度の第92次調査は、調査対象地のうち、南端（第Ⅰ区）と旧工学部本館の西側南半（第Ⅱ区）の2地点に調査区を設定した。第Ⅰ区の北側は、当初予定調査区から既設支線柱を避けた形状となつた。第Ⅱ区は、既存構造物・埋設物や植栽樹木、土壤汚染範囲、解体工事の仮設道等を避けた形態となつた。第Ⅱ区の北西部については、平成30年度調査は一部に止め、残りは平成31年度以降の調査対象とすることになった。調査区上端の面積は第Ⅰ区が433.6m<sup>2</sup>、第Ⅱ区が1,080.5m<sup>2</sup>である。両区の出土物はすべて場内に仮置きし、調査終了後に調査区内に戻した。

調査区には九州大学が構内に設置していた10mグリッドに合わせて、区画を設定した（第Ⅰ区は5区画、第Ⅱ区は19区画）。国土座標（世界測地系）と標高値は九州大学が平成28年に敷地内に設置した3級基準点をもとに与えた（基準点・共用グリッドの詳細は九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集（2018）を参照）。調査写真は、35mm判と6×7cm判のモノクロおよびリバーサルフィルム、デジタルカメラ（Nikon D5500、他コンパクトデジタルカメラ）で撮影した。全景写真は、高所作業車を使用して撮影した。遺構平面図は、手実測の他、電子平板（株式会社CUBIC「遺構くん」）をリースして使用した。実測図の縮尺は、1/5・1/10・1/20遺構実測図、1/20土層実測図とした。土層注記は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）をもとに調査担当者の肉眼観察で行った。

掘削作業は発掘作業員約24名が行なった。遺構実測は、板倉と中園将祥が行なった。遺構写真撮影は板倉が行なった。遺構番号は、記録をとった順に通し番号と仮の遺構略号を付け、整理・報告の過程で、遺構略号を決定した。遺構埋土の一部は調査担当者が現場で採取し、洗浄・乾燥させて微細遺物を抽出した。

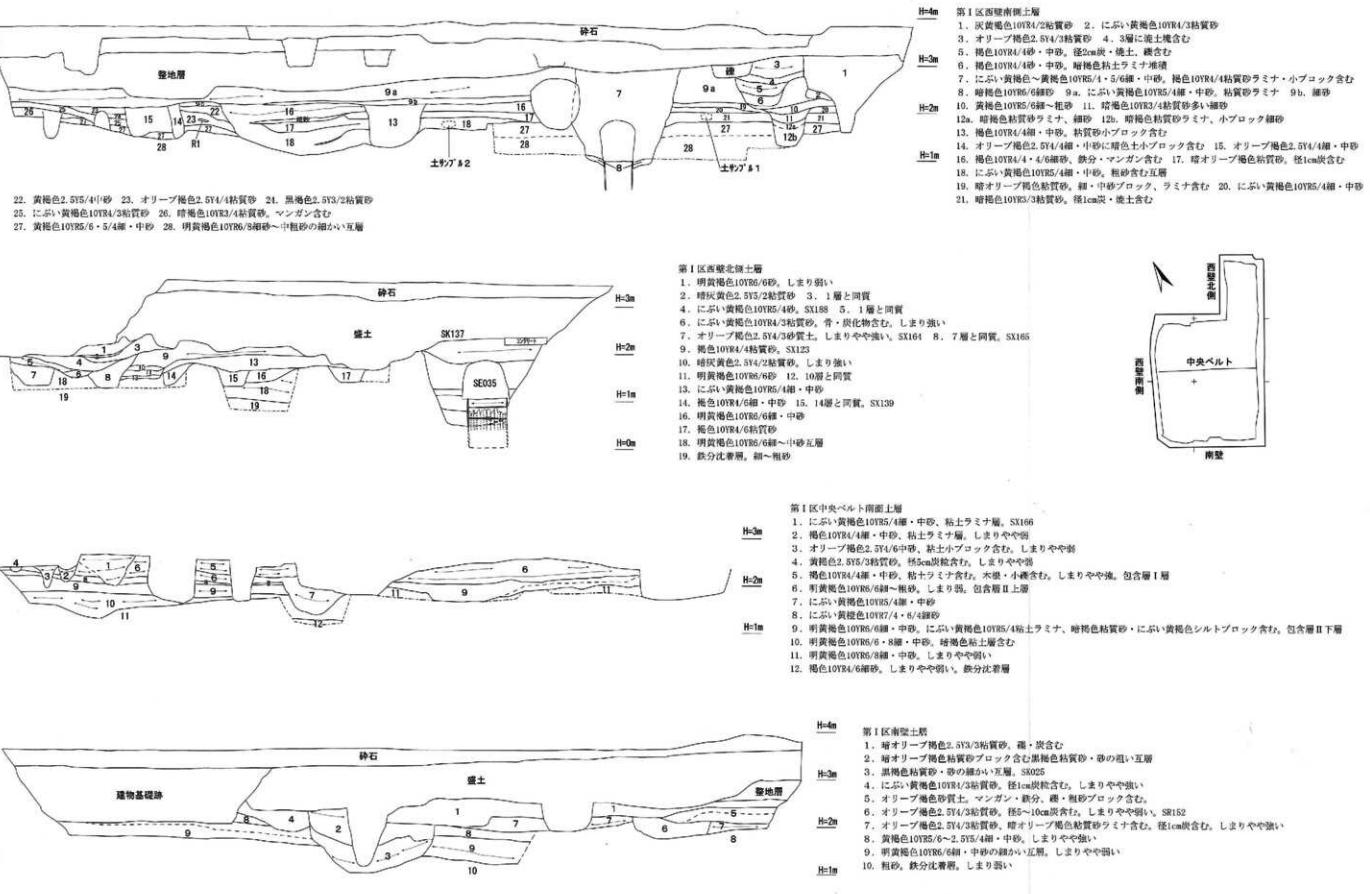
#### (整理作業)

平成30年度から令和3年度の整理作業は、三宅恵子（平成30～令和3年度）、立山睦彦（平成30～令和2年度）が主に行なった。遺物は、土器・土製品、石器・石製品、金属器・金属製品、木質遺物、自然遺物に分類して整理作業を進めた。土器・土製品は最も多く出土し、報告資料の抽出は最低限のものとした（図化遺物約15箱、未図化遺物約72箱）。石器・石製品は全資料の一覧を作成し（第2・5・8表）、一部を図化報告した。石材判定はネオジム磁石による磁性確認などを参考に担当者の肉眼観察を行なった。石造品の一部は3次元計測スキャナ（Artec Space Spider）を行い、メッシュモデルを作成した。金属器・金属製品、金属生産関係遺物は、遺構ごとの一覧表を作成し（第3・6・9表）、一部を図化報告した。金属器・金属製品のうち、銅錢は全点のX線写真撮影を行なった。薬莢については蛍光X線分析による材質調査を行なった。3次元計測、X線写真撮影、蛍光X線分析は福岡市埋蔵文化財センターの機器を利用した。遺物実測は、土器・土製品を野口聰子、山本麻里子、大庭友子、板倉が、石器・石製品、金属器・金属製品を板倉が行なった。遺物写真撮影は板倉が行なった。トレースは土器・土製品を野口が、その他を板倉が行なった。本章の執筆は、第5節第1項を株式会社古環境研究所が、第5節第2項を小林 啓（九州歴史資料館）が行ない、その他を板倉が行なつた。また、遺物整理において加藤良彦、佐藤浩司、比佐陽一郎、藤崎彩乃の助言と協力を得た。

出土遺物の内容を記述するにあたっては、下記文献（五十音順）を参考とした。



第4図 第I区第1面遺構全体図 (1/150)

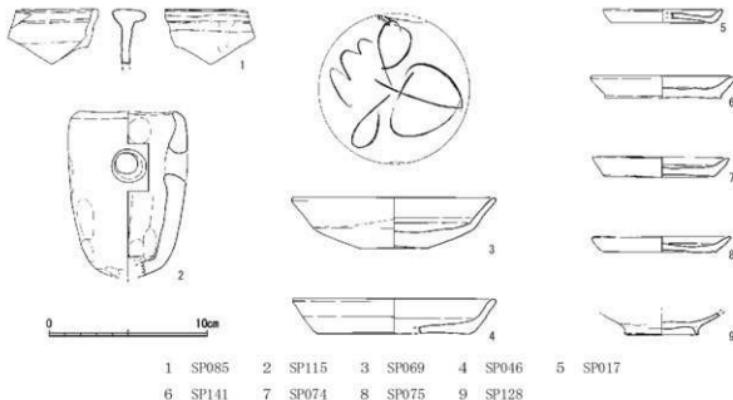


第5図 第Ⅰ区壁面土層実測図 (1/80)

- 井澤洋一（1995・1996）「筑前における中近世瓦の分類試案」『福岡市博物館研究紀要』5・6、pp.85-108、pp.60-91
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀（1995）「瓦器碗」中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』、pp.315-337、真陽社
- 笠間良彦編（1992）『資料日本歴史図録』柏書房
- 楠瀬慶太（2007）「土器食膳具から見た中世博多の土器様相」『九州考古学』82、pp.21-43
- 佐賀県立九州陶磁文化館編（2006）『近現代肥前陶磁銘款集』
- 坂詰秀一編（1986）『出土渡来鏡—中世—』ニュー・サイエンス社
- 太宰府市教育委員会編（2000）『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』（太宰府市の文化財第49集）
- 田中克子（2011）「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌・20周年記念特別号』、pp.57-77
- 田中克子・佐藤一郎（2008）「貿易陶磁器の推移」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』、pp.112-131、海鳥社、福岡
- 山本信夫（1990）「統計上の土器—歴史時代土器の編年研究によせて—」乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会編『九州上代文化論集』、pp.349-386、熊本
- 山本信夫・山村信榮（1997）「中世食器の地域性：九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集、pp.237-310

## 第2節 第1区第1面の調査

表土・盛土をバックホウで除去後、標高2.4～2mの面を遺構検出面とした。調査区の東半は建物基礎（旧アドミッションセンター）による影響が大きく、遺構の残りは良くなかった。ピット・鍛冶炉・土坑・井戸・堆積層などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀～17世紀代を中心とする。



第6図 SP出土土器実測図（1/3）

### 1. ピット（第4図）

調査区内からは柱穴が複数確認されたが、建物としての明確な並びは認識できなかった。出土遺物の時期は、概ね12世紀後半、13世紀前半、17世紀後半の3時期に分かれる。

出土遺物（第6・20図）

1はSP085（1区）出土の陶器盤。II類：13世紀前半か。

2はSP115（4区）出土の土師器鉢。枝紐の通し孔は径1.6cmを測る。

3（図版18-1）はSP069（5区）出土の龍泉窯系青磁皿 I類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は露胎。

4はSP046（5区）出土の土師器坏で、糸切り底で小型化している。13世紀中頃。

5はSP017（2区）出土の土師器小皿で、復元口径が7.5cmと小さく、器高も0.85cmと低い。17世紀後半か。

6はSP141（2区）出土の土師器小皿。13世紀前半。

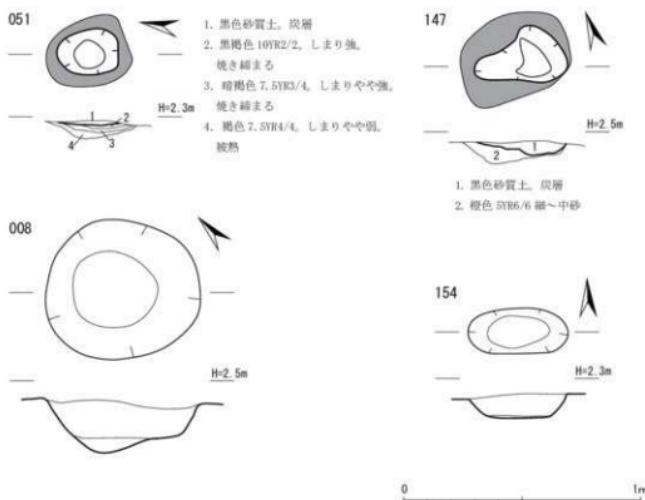
7はSP074（5区）出土の土師器小皿で、内面にヘラナデ痕を残す。13世紀前半。

8はSP075（2・5区）出土の土師器小皿。13世紀前半。

9はSP128（5区）出土の土師器の小椀。

118はSP119（4区）出土の銅錢「至道元寶」（初鑄995年）。

他にSP074（5区）からイヌ大腿骨が出土した。



第7図 SL051・147、SK008、SP154 実測図（1/20）

## 2. 鋳冶炉・焼土土坑

赤色化面もしくは炭化物の集中として認識された。炭層を洗浄・乾燥して微細な遺物を採集した。

**SL147** (第7図、図版5-2) 1区。小型楕円形ピット。長さ39cm、幅25cm、深さ5cmを測る。トレンチT6の、第1面から約15cm掘り下げる面で検出した。炭層から鋳造剥片と流動滓が出土した。

**SP055・032** (第4図) 1区。鉄滓が出土した。

**SL051** (第7図、図版5-1) 2区。小型楕円形ピット。長さ26cm、幅19cm、深さ2cmを測る。炭層から鋳造剥片と粒状滓が出土した。

**SK008** (第7図、図版5-3) 2区。円形土坑。長さ65cm、幅59cm、深さ18cmを測る。炭を含む埋土から鋳造剥片と粒状滓、炭化した不明植物遺体約30点が出土した。不明植物遺体は、突起と孔を持つ形状で、動物骨類として種別同定委託を出したが、不明植物遺体と同定された。

**SP154** (第7図) 2区。楕円形ピット。長さ42cm、幅19cm、深さ10cmを測る。

出土遺物 (第17図) 68は上面出土の小型砥石。使用痕は不明瞭だが、長軸面に平滑な砥面が形成される。他に多量の鋳造剥片と粒状滓が出土した。

**SP108** (第4図) 5区。不定形ピット。長さ42cm、幅36cm、深さ30cmを測る。鉄滓が出土した。

出土遺物 (第17図) 69は滑石加工品。石鍋転用の温石か。再加工面もやや被熱・黒色化する。

## 3. 土坑

不定形土坑・方形土坑・礫敷土坑・円形・楕円形土坑に分けて記述する。出土遺物の時期は、概ね12世紀後半、13世紀前半、13世紀後半～14世紀代、17世紀代に分かれ。不定形土坑が古く、円形土坑が新しいという傾向がある。

### (不定形土坑)

**SK031** (第8図) 1区。長さ128cm、深さ84cmを測る。SK023に切られる。埋土は粘土・砂のラミナ堆積。

出土遺物 (第12図) 10は龍泉窯系青磁碗I類 (D期:12世紀中頃～後半)。

**SK106** (第8図) 4区。深さ63cmを測る。

出土遺物 (第12図) 11は白磁皿Ⅱ類 (D期:12世紀中頃～後半)。体部下位は釉削り取り。

**SK094** (第8図) 5区。幅132cm、深さ39cmを測る。埋土は炭・焼土の混じる暗オリーブ褐色粘質砂。

出土遺物 (第12図) 12は土器師坏。ヘラ切り底。底内面からの破碎打撃痕跡が残る。12世紀中頃。13は同安窯系青磁碗Ⅲ類 (D期:12世紀中頃～後半)。体部下位は露胎。14は陶器小盤I類。口唇内側は釉拭き取りで赤褐色に発色する。体部下位は露胎。12世紀中頃か。他に羽口片、鉄滓が出土した。

**SK135** (第8図) 1区。深さ30cmを測る。埋土に礫を含む。

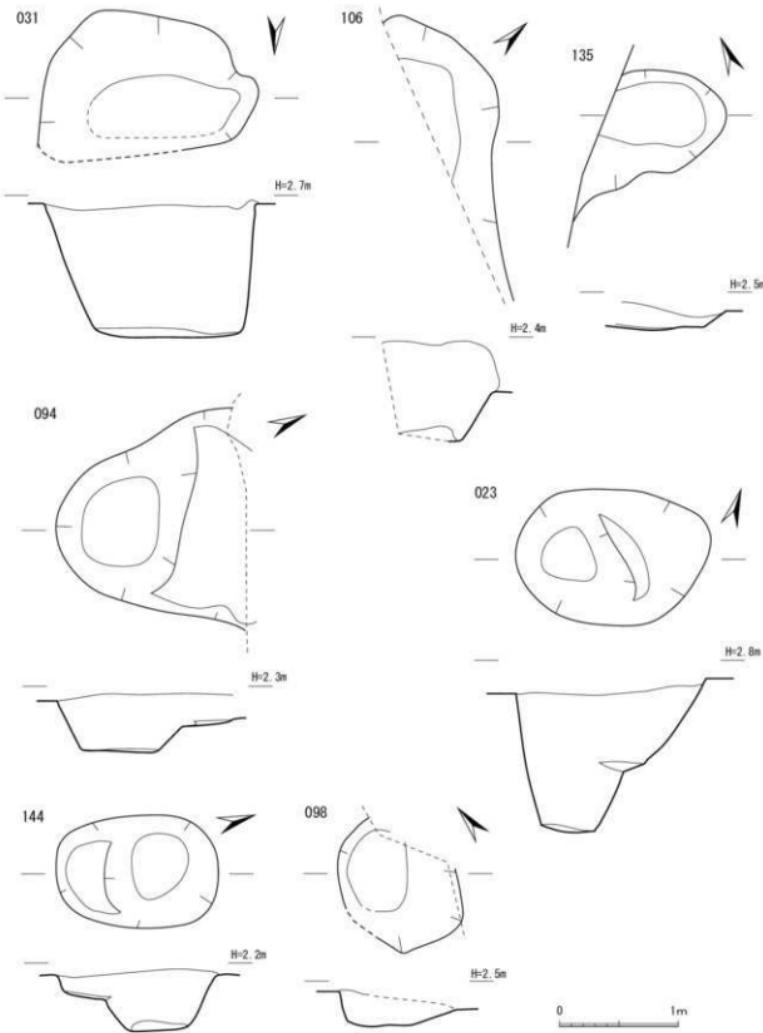
出土遺物 (第12・17図) 18は龍泉窯系青磁碗IIc類 (F期:13世紀中頃～14世紀初頭前後)。底外側は露胎、豈付けは釉拭き取りで赤褐色に発色。70は滑石製石錘。長軸と側面に溝を持つ。

**SK023** (第8図、図版5-4) 1区。長さ124cm、幅87cm、深さ97cmを測る。SK031を切る。埋土に礫を多く含む。

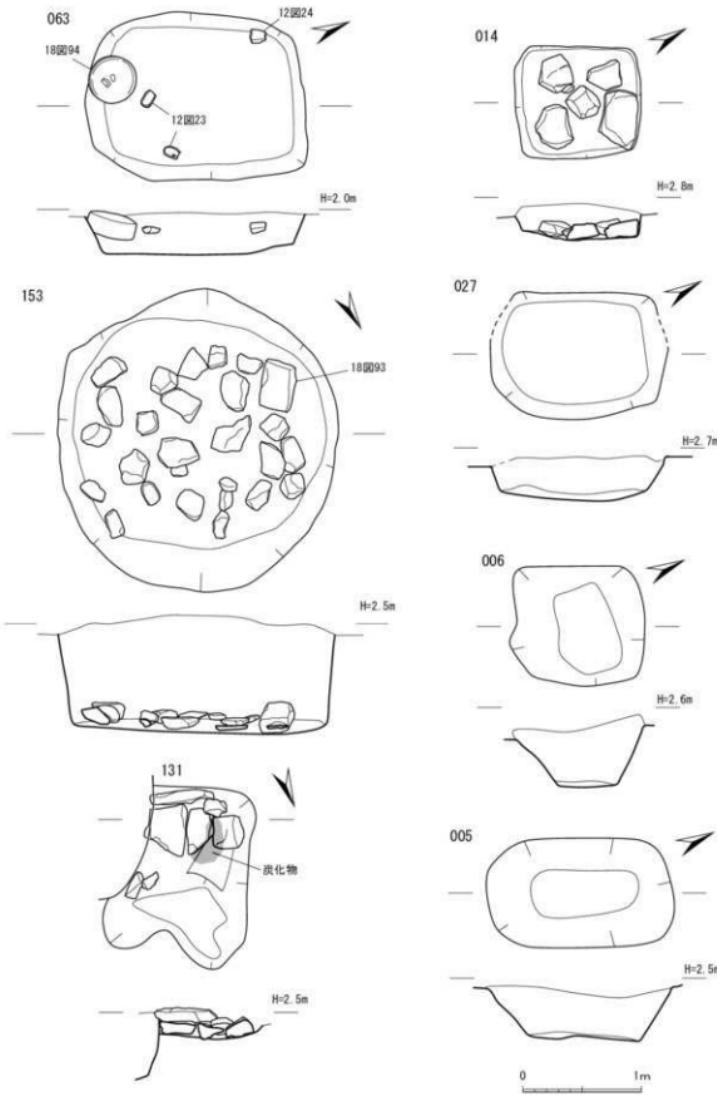
出土遺物 (第12・17図) 22は土器師小皿。14世紀代。71は滑石製石錘。72～74は土錘。

**SK144** (第8図) 2区。第1面を掘り下げて検出した。長さ101cm、幅71cm、深さ42cmを測る。SK006に切られる。

**SK098** (第8図) 5区。深さ24cmを測る。



第8図 SK031・106・135・094・023・144・098 実測図 (1/40)

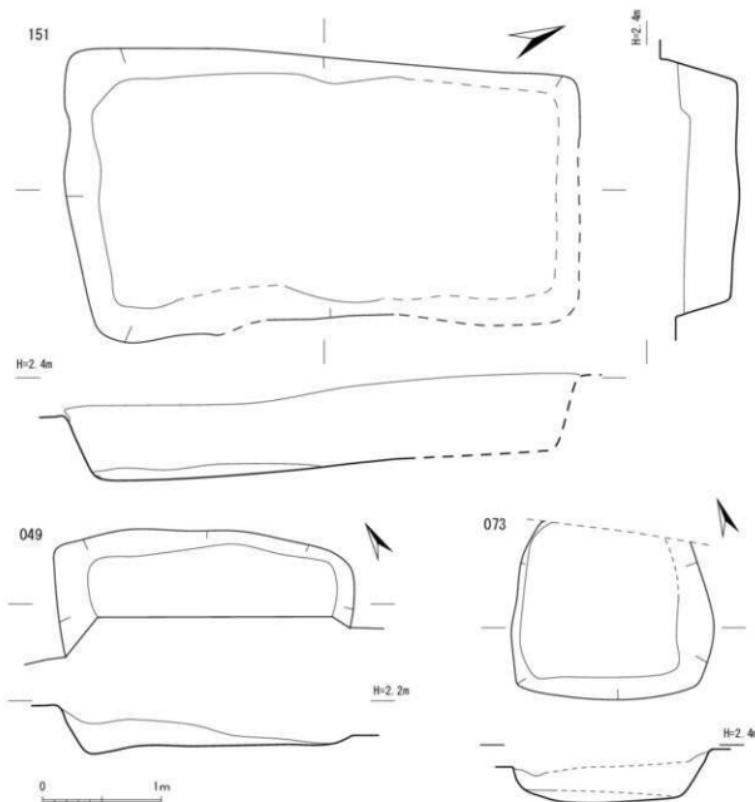


第9図 SK063・014・153・131・027・006・005 実測図 (1/40)

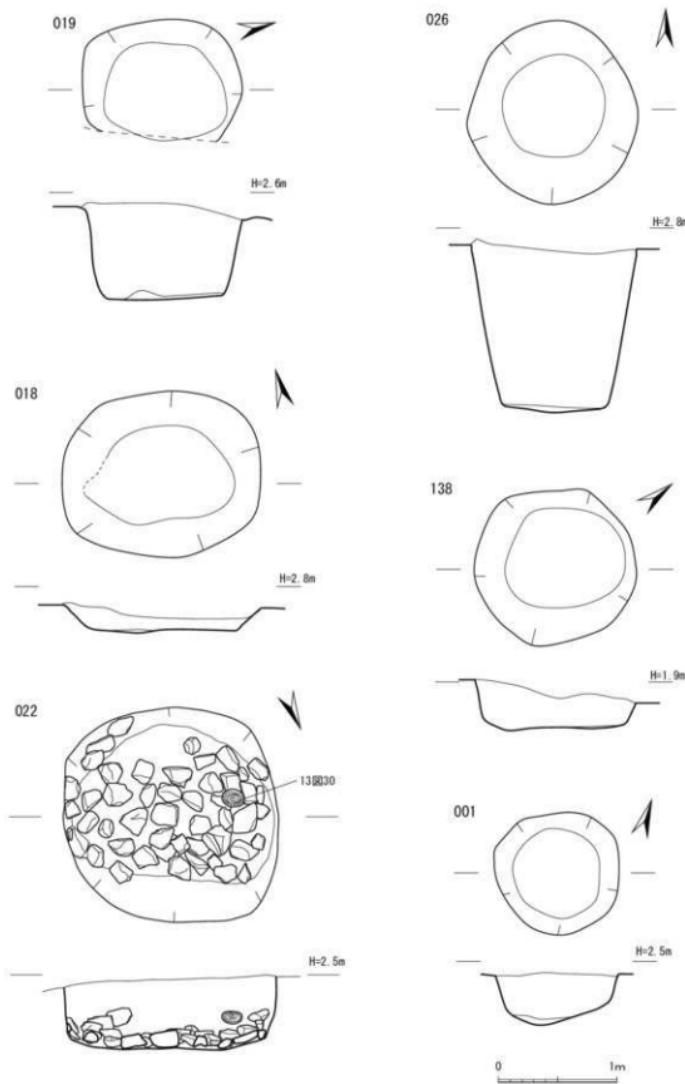
(方形土坑、礫敷土坑)

**SK153** (第9図、図版5-8) 1区。長さ192cm、幅176cm、深さ80cmを測る。SK018に切られる。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂と黄褐色細・中砂の細かい互層。底に礫を敷く。

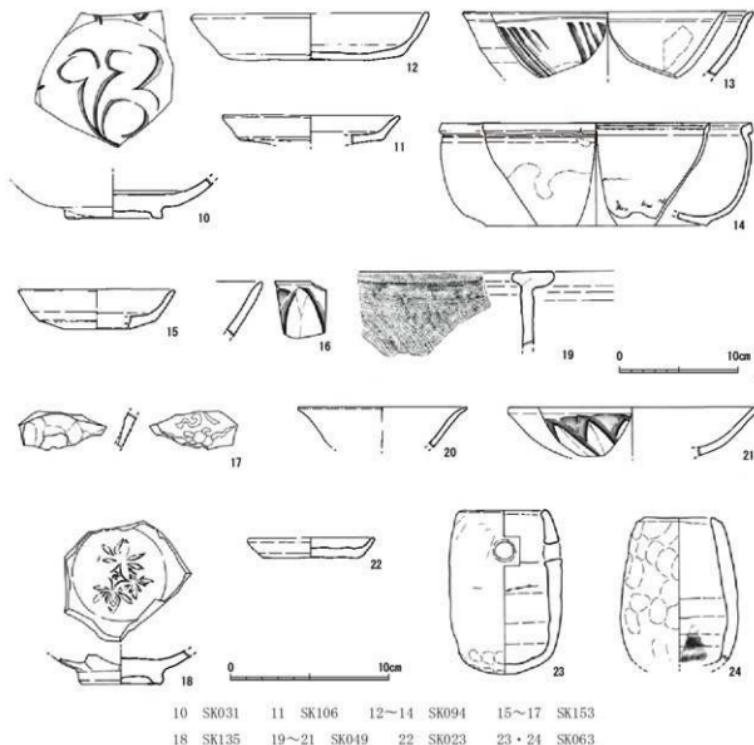
出土遺物（第12・17・18図）15は白磁皿Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）。体部下位は釉削り取り。16は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（E期：13世紀前後～前半）。17（図版18-2）は珊瑚釉磁器の破片。75～77は滑石製石錘。75は長軸の溝と、側面に一部溝と打ち欠きを施す。76は板状の製品を転用している。78・79は土錘。93は砂岩の板碑片で、前面に人物像を彫る（大日如来か。顔と手の部分は剥落する）。表面はわずかに壓痕を残しつつ平滑に仕上げるが、後面には粗い壓痕を残す。土坑底部の南西隅に前面を伏せた状態で置かれていた。



第10図 SK151・049・073 実測図 (1/40)



第11図 SK019・026・018・138・022・001 実測図 (1/40)



第12図 SK出土土器実測図 (14・19は1/4、他は1/3)

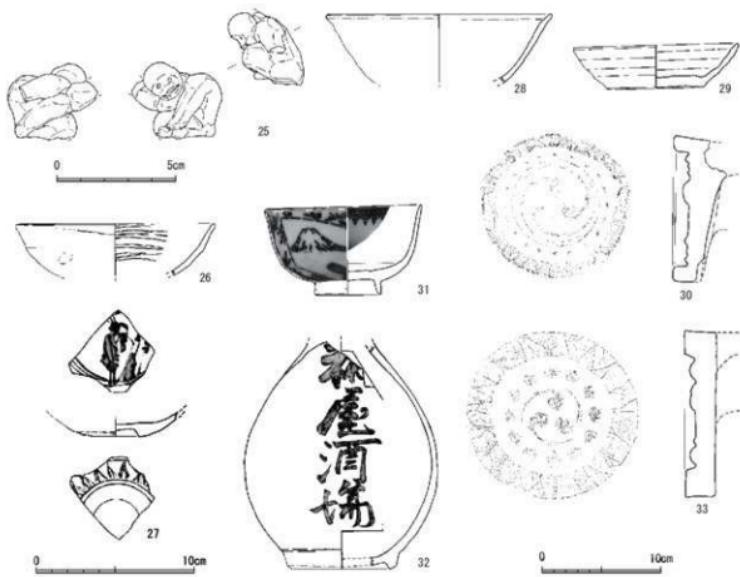
**SK063** (第9図、図版5-6) 1区。長さ138cm、幅104cm、深さ36cmを測る。埋土は、径1mm焼土・炭を少なく含む暗オリーブ褐色粘質砂と黄灰色砂のラミナ堆積。

出土遺物 (第12・18図) 23・24は土器師の蛸壺。23は内面ヨコナデ、外面タテナデで丁寧に仕上げられ、径1.1cmの焼成前穿孔を外面から内面に向かって施す。真二つに割れた状態で出土した。24は内面ヨコナデ、外面タテナデで仕上げられ、穿孔部分は残っていない。94は石臼上石。もの入れ孔は長方形で4×3cm、挽き手孔は長方形で3×2.5cm、軸受け孔は円形で径1.5~1.7cmを測る。白面(凹み)以外は全体に被熱・黒化する。石臼や蛸壺は埋没の途中で投棄されている。

**SK014** (第9図、図版5-7) 1区。長さ79cm、幅71cm、深さ20cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂でつまりやや弱い。底に礫が配置される。

**SK027** (第9図、図版6-1) 1区。長さ112cm、幅80cm、深さ26cmを測る。SP012・020に切られる。SP054を切る。埋土は暗オリーブ褐色砂質土と粘質土のラミナ堆積。

**SK006** (第9図、図版6-2) 2区。長さ81cm、幅75cm、深さ45cmを測る。SP125を切る。SK144



第13図 SK出土土器・土製品実測図 (25は1/2、30・32・33は1/4、他は1/3)

を切る。埋土は、暗オリーブ褐色粘質砂で径1cm炭、黄灰色粘土小ブロック含む。

**SK151** (第10図) 1区。長さ322cm、幅167cm、深さ70cmを測る。北側が明瞭に検出できなかった。

**SK131** (第9図、図版6-3) 2区。長さ113cm、深さ25cmを測る。SK022に切られる。碟が敷かれ、その上に炭化物が残る。碟は被熱している。

**SK005** (第9図、図版6-4) 2区。長さ116cm、幅69cm、深さ36cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径2cm焼土・炭や多い。

出土遺物 (第17図) 80は滑石製石鍋の転用・加工品。石鍋破片を端部・側面を細かく面取りして柱状に再加工する。弧状に彫られた溝。温石か。

**SK049** (第10図) 2・5区。長さ188cm、深さ32cmを測る。

出土遺物 (第12図) 19は陶器盤II類 (13世紀前半)。20は白磁皿IX類 (F期: 13世紀中頃~14世紀初頭前後)。口縁端部が口禿げ。21は龍泉窯系青磁杯III-5b類 (F期)。

**SK073** (第10図、図版6-5) 5区。長さ63cm、深さ40cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径2cm大の焼土・炭を含み、間に黄褐色砂を挟む。

#### (円形・橢円形土坑)

**SK019** (第11図、図版6-6) 1区。長さ101cm、深さ63cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂と黄灰色砂の互層。

出土遺物 (第13図) 25 (図版18-3) は猿の土人形。組猿か。26は和泉型の瓦器碗。口唇部は素直に

丸く收まり、胴部はやや張って丸みを帯びており、12世紀後半と考る。他に銅錢「寛永通寶」(初鑄1636年)が出土している。

**SK026** (第11図、図版6-7) 1区。長さ116cm、幅105cm、深さ107cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘土と黄灰色砂の互層。

出土遺物 (第13・17図) 27は青花皿。疊付は釉を搔き取る。16世紀中頃か。81は滑石製石錘。82は土錘。他に銅錢「寛永通寶」(初鑄1636年)が出土している。

**SK018** (第11図、図版6-8) 1区。長さ125cm、幅105cm、深さ19cmを測る。SP061・062に切られる。SK153を切る。埋土は黄褐色2.5Y5/3砂質粘土で、上層に暗オリーブ褐色粘質砂が厚さ3cmほど堆積する。

**SK138** (第11図、図版7-1) 4区。長さ101cm、幅96cm、深さ33cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色粘質砂で、径1cm炭・黄褐色砂ブロック含む。

**SK022** (第11図、図版7-2・3) 2区。長さ136cm、幅136cm、深さ60cmを測る。埋土はオリーブ暗褐色粘質砂。底に礫を敷く。

出土遺物 (第13・17図) 28は口禿げの白磁碗Ⅸ類 (F期:13世紀中頃~14世紀初頭前後)。29は土師器坏で、内面に黒色付着物が残る。近世期。30は巴文軒丸瓦。内区と外区の境に圈線が引かれ、珠文が比較的多い。16世紀前半で、床敷きの礫よりも10cmほど上位で出土しており、埋没の途中で投棄されたと考えられる。83は滑石製石錘。84~87は土錘。88は滑石製円盤状石器。89は砂岩製の石球。

**SK001** (第11図) 2区。長さ78cm、幅77cm、深さ30cmを測る。埋土は、少量の径1cm炭・焼土と黄灰色粘土小ブロックを含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂でしまりやや弱い。

出土遺物 (第17図) 90は滑石製石錘。91・92は土錘。92は他の土錘に比べて紡錘形を呈さない。

**SK002** (第4図) 2区。平面形は長梢円形。モルタルや瓦、ガラスなどを含む攪乱。

出土遺物 (第13図) 31は印版小碗。疊付は釉搔取り。32(図版18-5)は染付瓶。「□屋酒場」「□三百廿七号」「□前本町」の文字が入る。33は巴文軒丸瓦。燒し瓦で雲母が付着する。珠文は大きく、数が少ない。近代

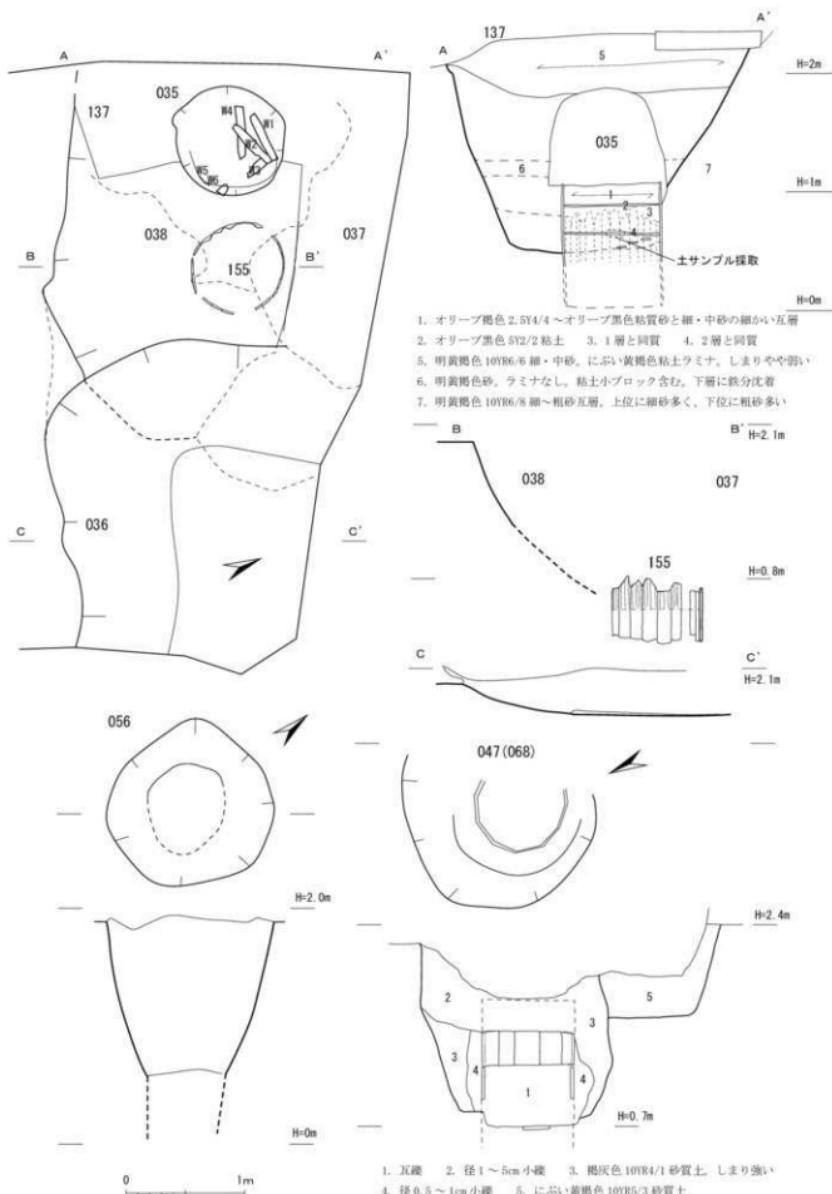
**SK025** (第4図、図版5-5) 5区。深さ101cmを測る。

#### 4. 井戸

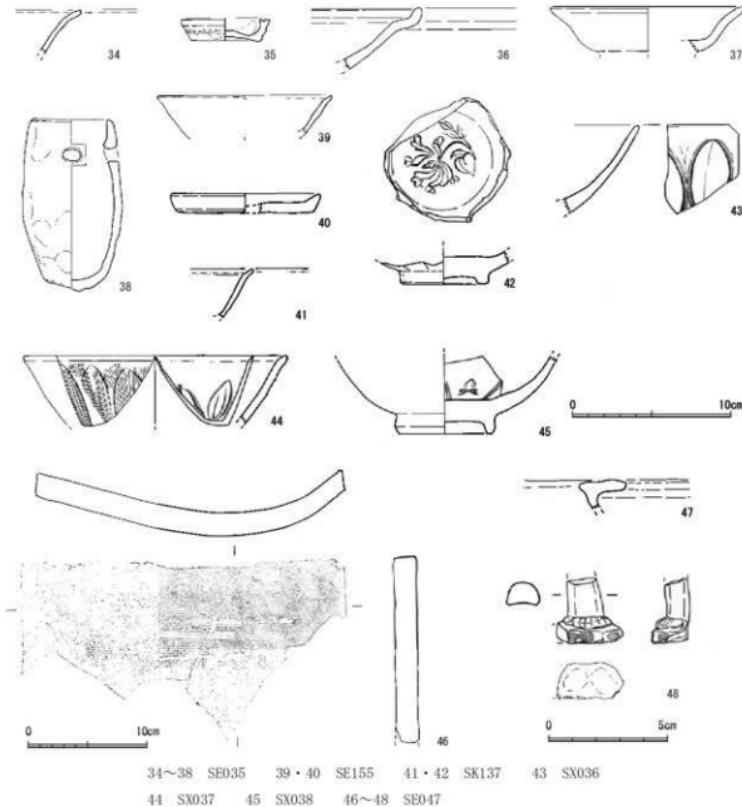
遺構の残りが比較的良好な西半(1・2区)では検出されず、東半の3・4区で検出された。時期は、SE035・155の結桶井戸が13~15世紀初頭、SE047の瓦井戸が近代となる。第2面1区で検出された井戸群(12世紀~14世紀初頭)よりも新しい。

**SE035** (第14図、図版7-4) 3区。井戸枠はスギ板目材を用いた結桶で径84cm、標高80~0cmに据えられる。

出土遺物 (第15・19図) 34は口禿げの白磁碗Ⅸ類 (F期:13世紀中頃~14世紀初頭前後)。35(図版18-4)は白磁合子身で、体部外面に陽刻連点文が施される。漆雜ざされている。36は龍泉窯系青磁浅型碗(碗Ⅲ類同様式。F期)。37は青磁皿。38は土師器の蛸壺。永楽通寶(初鑄1408年)が出土している。95は蛇紋岩質の石錘。96~98は土錘。99は礫岩の石球。100は井筒内最下層から出土したイスノキ削り出しの横棒。歯の数は25本で、長さ4.2cm、幅9.2cm、厚さ1cmを測る。他に硬骨魚綱の椎骨、ネズミ科下顎・上腕骨片などが出土した。



第14図 SE035・155、SX036、SE056・047実測図 (1/40)



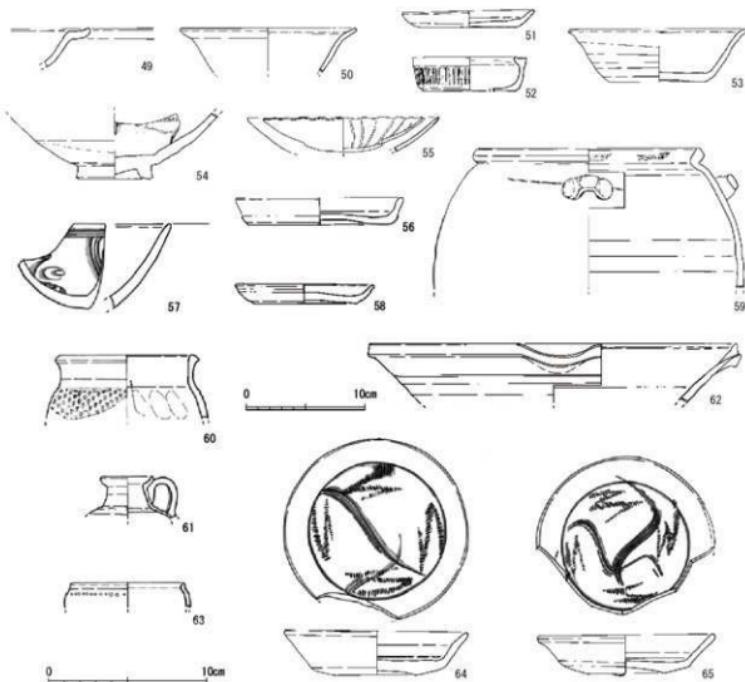
第15図 SE出土土器・土製品実測図 (46は1/4、48は1/2、他は1/3)

**SE155** (第14図、図版7-5) 3区。井戸枠はスギ板目材を用いた結構で、径86cm、標高80~20cmに据えられる。

出土遺物 (第15・19図) 39は白磁皿Ⅱ類 (F期)。40は糸切り底の土器皿で小型扁平化している。13世紀中頃。101は粘板岩製の硯。平滑面の研磨は細かく、研ぎ痕等は見えない。後面が遺存する。102は砂岩の石球。面取りは粗く不十分で、球状を志向した多面体をなす。103・104は滑石製石錘。105・106は土錘。

**SK137** (第14図) 3区。SE035とSE155の掘方と思われる土坑。

出土遺物 (第15・19・20図) 41は口禿げの白磁碗Ⅱc類 (F期: 13世紀中頃~14世紀初頭前後)。42 (図版18-6) は龍泉窯系青磁碗Ⅱc類 (F期: 13世紀中頃~14世紀初頭前後)。底外面は露胎、疊付けは軸拭き取りで赤褐色に発色。107~110は土錘。119は銅錢「慶元通寶」(初鑄1201年)、120は銅錢「紹



49~51 SX015 52・53 SX086 54~56 SX123 57・58 SX124 59 SX166 60 T5 2区  
61 T6 2区 62 5区西ほか 63 2面検出 64 4区 65 T8 66 西壁 67 T6 1区

第16図 SX・包含層出土土器実測図 (59・62は1/4、66・67は1/6、他は1/3)

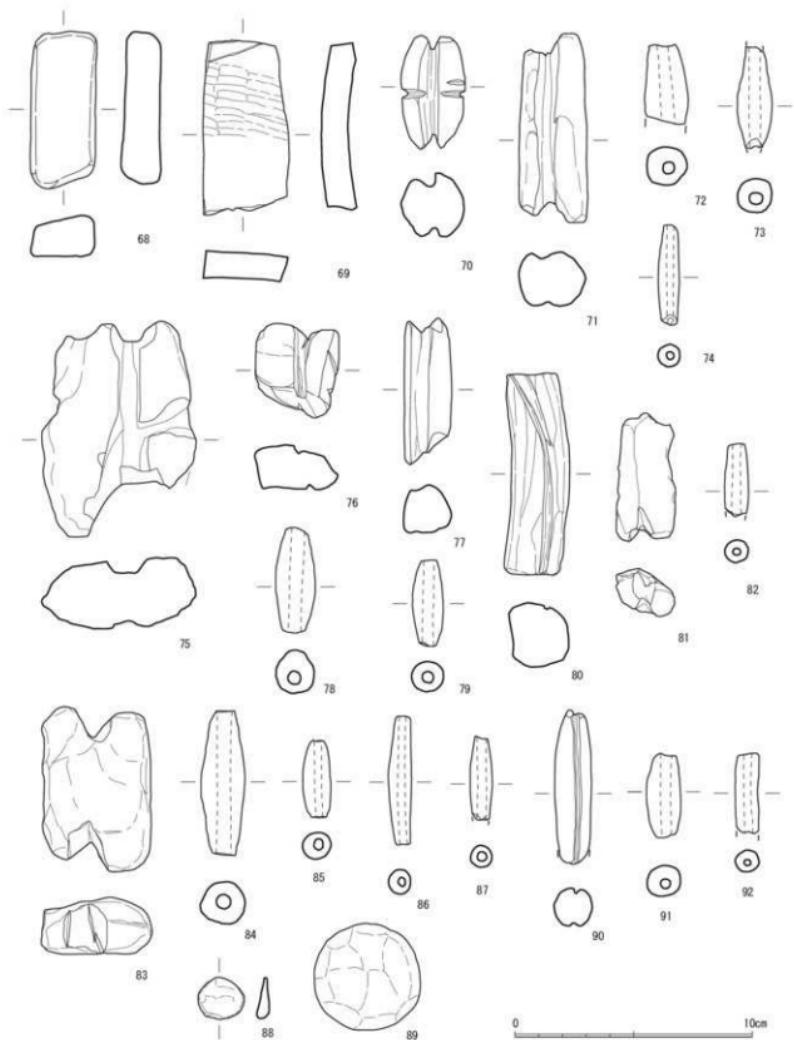
定通寶（初鑄1228年）。

**SX036**（第14図）3区。SK137を切る堆積層。

出土遺物（第15・20図）43は龍泉窯系青磁碗II b類（E期：13世紀前半）もしくはII c類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。121は銅錢「嘉泰通寶」（初鑄1205年）。他にイルカ類椎骨片が出土した。

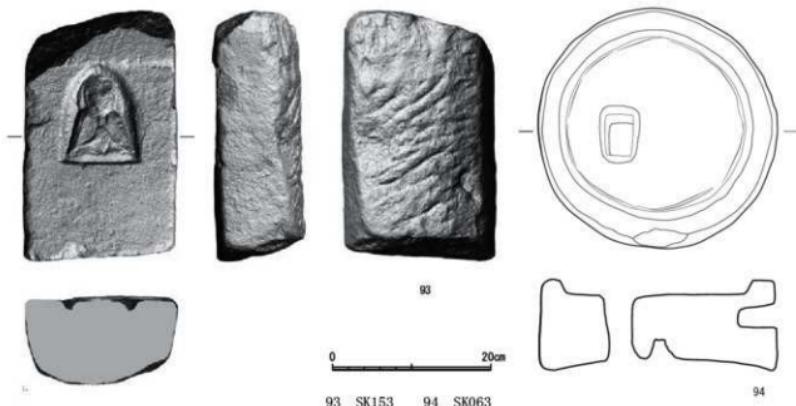
**SX037**（第14図）3区。SK137上のブロック土堆積。

出土遺物（第15・19図）44は龍泉窯系青磁碗I -6a類（D期：12世紀中頃～後半）。111は砂岩の石球。



68 SP154 69 SP108 70 SK135 71 ~ 74 SK023 75 ~ 79 SK153  
80 SK005 81 ~ 82 SK026 83 ~ 89 SK022 90 ~ 92 SK001

第17図 SP・SK出土石製品・土錐実測図(1/2)



第18図 SK153・063出土石製品三次元モデル画像および実測図（1/6）

112は滑石製の円盤状製品。打ち欠き石錘か。113～115は土錘。

**SX038**（第14図）3区。SK137上のブロック土堆積。

出土遺物（第15図）45は龍泉窯系青磁碗I-4類（D期：12世紀中頃～後半）。高台内は露胎。

**SE056**（第14図、図版7-6）3区。土坑埋土を掘り下げる途中で平面的に井戸枠の痕跡らしき輪状の腐植土を確認した。井筒の径は65cm。下層の埋土は粗砂を含む褐色10YR4/4細・中砂。

**SE047**（第14図、図版7-7）4区。井戸枠は瓦で、径は78cm。井筒内からは鉄釘、レンガ、瓦が出土した。

出土遺物（第15図）46は焼しの平瓦。47は須玖II式の短頸壺。48（図版18-7）は陶器人形の足部分で、背面は露胎で平坦。その他ニホンジカ鹿角、スギの柾目材が出土した。

## 5. 包含層

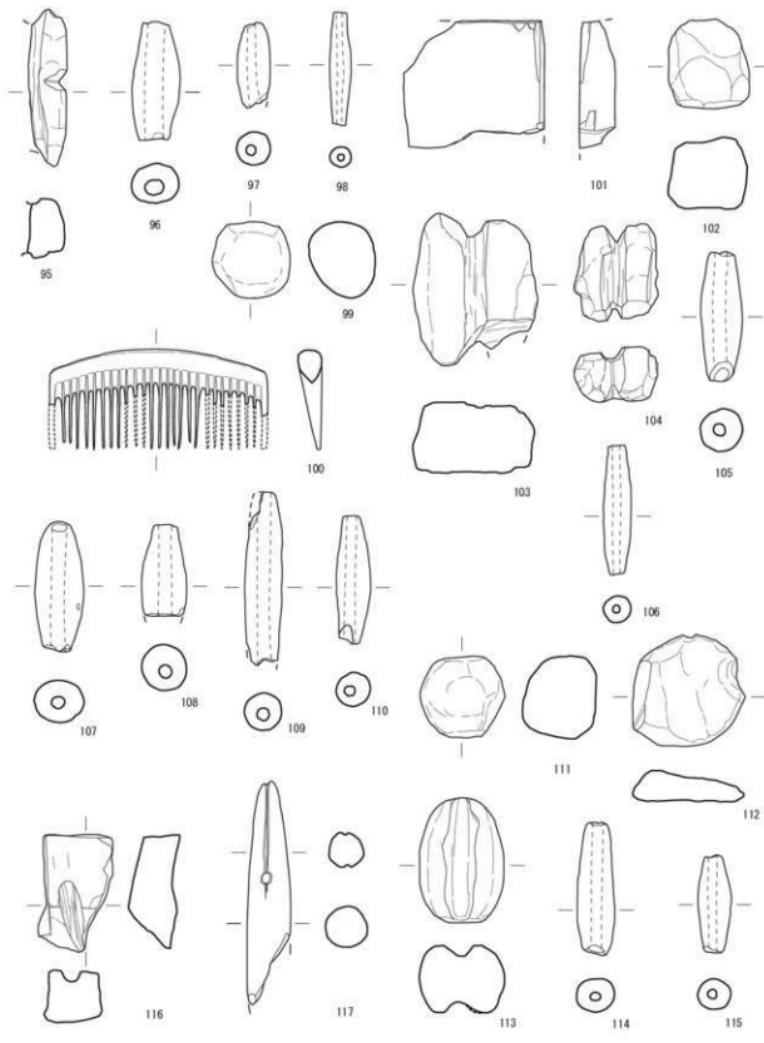
第1面の下層は遺物を包含する堆積層となっている。第1面掘り下げの過程で、平面範囲を把握した堆積層については、略号SXと造構番号を付している。出土遺物の時期は、概ね12～14世紀である。

**SX015**（1区）出土遺物（第16図）49は龍泉窯系青磁壺III-2類（F期：13世紀後半～14世紀前半）。50は白磁皿IX類（F期）。口縁端部が口禿げとなる。51は糸切り底の土師器小皿で灯明皿利用される。13世紀後半か。

**SX086**（2区）出土遺物（第16・20図）52は掲軸の合子身。体部外面下半は露胎。53は白磁皿IX-1c類（F期：13世紀後半～14世紀前半）。122～125は銅錢で、122は「景祐元寶」、123は「元祐通寶」、124は「宣和通寶」、125は「淳熙元寶」。

**SX123**（3・4区）出土遺物（第16・19図）54は同安窯系青磁碗I-1a類（D期：12世紀中頃～後半）。体部外面下半は露胎。55は景德鎮窯系青磁小皿。56は糸切り底の土師器皿。12世紀後半頃。116はシルト質の砥石。

**SX124**（4区攪乱下）出土遺物（第16図）57は青磁碗I-4類（D期：12世紀中頃～後半）。58は



第19図 SE・SK・SX・包含層出土石製品・土錘・木製品実測図 (1/2)

糸切り底の土師器小皿。13世紀代。

**SX166**（1区中央ベルト）出土遺物（第16図） 59（図版18-8）は褐釉陶器の耳壺。口縁部内面に目跡がある。

**第1面下層出土遺物**（第16・19・20図） 60（図版18-9）は素焼きの小型壺。61（図版18-10）は褐釉陶器の水滴茶入。62は瓦質土器の捏鉢。63は景德鎮窯白磁小型壺。64は同安窯系青磁皿。胎土に砂粒を多く含む。65は同安窯系青磁皿。底部に目跡がある。66は褐釉陶器盤。口縁部内面に目跡がある。67は土師質土器の鍋で、外面にスス、内面にコゲが付着する。117は蛇紋岩質の石錘。126は銅鏡「明道元寶」（初鑄1032年）。127は薬莢。径1.45cm、厚さ1~0.2mm、リム径1.6cmを測る。X線画像では、リム内部に3つ又のアンビル（発火金）が確認できる。リム外面の上・下・右の3カ所に1字ずつ刻印を確認できるが劣化のため判読不明である（数字や英字ではなく、漢字と思われる）。蛍光X線分析装置による材質分析では銅と亜鉛が検出され、真鍮製と推定された。他にウマ上腕骨（4区R1）、ウマ基節骨（T 6 南II下層）が出土した。

## 6. 小結

方形土坑の軸や遺構の並びから、中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていた想定される。

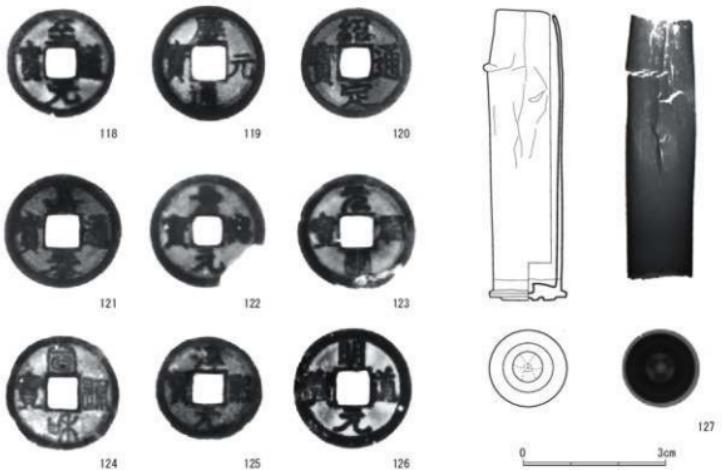
調査区南壁土層（第5図）を見ると、地山の砂層が東から西へ傾斜しており、調査区の東側は砂丘列の高い方で、削平の影響が著しいが、西側は低く、削平の影響が小さかったと考えられる。

鍛冶炉は、鍛冶炉SL147と廃棄ピットSP055・032、鍛冶炉SL051と廃棄土坑・ピットSK008・SP154という組み合わせが、南北の2カ所で確認された。小規模な鍛冶作業の場があったと想定できる。

礫敷土坑の性格は不明であるが、SK153では如来らしき像を彫った板碑片（第18図93）が礫敷きの1つに転用されていた。SK022は同じような礫敷土坑だが、SK153に比べて平面形が小さく、敷く礫の密度が高い。遺構の切り合いや出土遺物からSK022よりも新しいと判断される。

結構井戸SE035の井筒下層からは、漆巻きをした白磁合子身（第15図35、図版18-4）やイスノキ製横櫛（第19図100）が出土した。やや特殊な遺物であるため、井戸封じの儀礼に用いられた可能性がある。

第1区出土の石錘・土錘は、大小各種が出土している。側面に1対の溝を持つ有溝石錘70（SK135）、長型有溝石錘90（SK001）、長型有孔石錘117（包含層）、有溝土錘113（SX037）は形状が他と異なる。有溝土錘113の同型は箱崎遺跡20次2区（767集）・SK228出土203、26次8区（853集）・SK226出土45、SK227出土46・47（12世紀前半）、73次（1316集）・SK133出土22（12世紀前半頃）、包含層出土15・16、SK472出土13、77次（1345集）・SE2085出土106（11世紀後半～12世紀前半）、SK1018出土112（12世紀半ば～13世紀前半）、SK2057出土231（13世紀前半）などが確認できる。有溝土錘113が出土したSX037は12世紀中頃～後半の青磁碗を含み、埋没時期は、SE035・155の掘方SK137の埋没時期である14世紀代に近いと考えられる。蛸壺も複数点出土しており、沿岸での漁業活動が活発であったことがうかがわれる。



118 SP119 119・120 SK137 121 SX036 122～125 SX086 126 包含層2区 127 第1面除去土

第20図 第I区第1面金属製品実測図およびX線画像(1/1)

第1表(1) 第I区第1面出土土器・土製品

種別	番号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量(cm)	胎土	焼成	色調	仮番
6	1	SP085	陶器	瓶	破片	-	径1mm以下黒・白色粒や多い	良好	胎土: 淡黄灰～灰、釉: 黄	39
6	2	SP115	土師器	箱蓋	1/3	口径7.15, 器高10.35 径2mm以下石英・長石・赤色粒含む	良好	胎土: 粘～淡黄・内面: 瓦～淡黄橙	40	
6	3	SP069	青磁	皿	7/10	口径12.8, 深さ3.2 砂粒はとんど含まれない	精良	良好	胎土: 淡灰、釉: 灰綠、透明	36
6	4	SP046	土師器	壺	1/8	復元口径12.8、器高2.2 径5mm以下赤色粒・繊細な雲母付く少なし	良好	にぶい黄橙～にぶい緑	35	
6	5	SP017	土師器	小皿	1/2	復元口径7.5, 器高0.85 径1mm以下赤・白色粒含む	良好	にぶい黄橙～にぶい緑	34	
6	6	SP141	土師器	小皿	1/2	口径9.1, 器高1.4 径1mm以下石英・長石やや多い	良好	淡黄橙～緑	42	
6	7	SP074	土師器	小皿	完形	口径8.6, 器高1.3 径2mm以下赤・黒・白色粒含む	良好	浅灰～にぶい黄橙	37	
6	8	SP075	土師器	小皿	1/2	口径8.7, 器高1 径1mm以下石英・長石少ない	良好	穂～にぶい黄橙	38	
6	9	SP128	土師器	小椀	底部	復元底径4.7 径1mm以下石英・長石・赤色粒含む	良好	外面: 淡黄灰～にぶい黄橙、内面: 乳白	41	
12	10	SK031	青磁	碗	底面のみ	高台径6.1 砂粒はとんど含まれない	精良	胎土: 淡灰、釉: 淡灰、光沢無い	18	
12	11	SK106	白磁	皿	1/8	復元口径11.1 径1mm以下砂粒多く少ない	良好	胎土: 灰白、釉: 空色味、透明	26	
12	12	SK094	土師器	壺	3/5	口径15.05, 器高3 径2mm以下石英・長石含む	良好	にぶい黄橙	23	
12	13	SK094	青磁	碗	1/7	復元口径18.3 径1mm以下砂粒含む	良好	胎土: 灰、釉: 灰、半透明	22	
12	14	SK094	陶器	小瓶	1/8	復元口径26.4, 器高8.6 径1mm以下砂粒やや多い	良好	胎土: 淡黄～灰、釉: 黄	24	
12	15	SK153	白磁	皿	1/5	復元口径9.8, 器高2.5 径1mm以下砂粒多く少ない	良好	胎土: 乳白、釉: 灰綠、不透明	30	
12	16	SK153	青磁	碗	破片	砂粒はとんど含まれない	精良	胎土: 灰、釉: オリーブ、透明	31	
12	17	SK153	白磁	水注か	破片	径1mm以下砂粒多く少ない	良好	胎土: 灰、釉: 霧濛	32	
12	18	SK135	青磁	碗	底部	高台径5.3 砂粒はとんど含まれない	精良	胎土: 淡灰、釉: 緑、透明	27	
12	19	SK049	陶器	盤	破片	-	良好	胎土: 灰褐色、釉: オリーブ灰	76	
12	20	SK049	白磁	皿	1/8	復元口径10.6 砂粒の黒色粒含む	良好	胎土: 灰白、釉: 灰	74	
12	21	SK049	青磁	壺	1/8	復元口径15.6 砂粒少なし	精良	胎土: 灰、釉: 緑、透明	75	
12	22	SK023	土師器	小皿	4/5	口径8.1, 器高1.3 砂粒少なし	良好	にぶい黄橙	16	
12	23	SK063 R2+R3	土師器	箱蓋	完形	口径5.9, 器高10.3 径1mm以下石英・長石含む	良好	胎土: 灰、表面: 黑	20	
12	24	SK063 R4	土師器	箱蓋	1/2	復元口径5.3 砂粒の角質殻少なし	良好	外側: にぶい黄橙、内面: 灰	21	
13	25	SK019	土製品	埴形	4/5	復元幅3.4 径1mm以下赤・白色粒少なし	良好	にぶい緑	12	
13	26	SK019	瓦器	壺	1/7	復元口径12.6 砂粒少なし	良好	胎土: 灰白、表面: 黑	11	
13	27	SK026	青花	皿	1/4	復元底径3.0 砂粒はとんど含まれない	精良	良好	胎土: 灰褐色、釉: 黄色灰、光沢無い	17
13	28	SK022	白磁	碗	1/7	復元口径14.2 砂粒はとんど含まれない	精良	良好	胎土: 灰白、釉: 灰、光沢無い	14
13	29	SK022	土師器	壺	2/3	復元口径10.4, 器高2.7 径1mm以下白色粒少なし	良好	明麗、内面に墨色着物	13	
13	30	SK022 RII	瓦	軒丸の瓦	真当径12.2, 厚さ2.4 径1mm以下石英・長石含む	良好	胎土: 灰～灰黄、表面: 暗灰～灰黄	15		
13	31	SK002	印判	小鏡	4/5	口径9.9, 融曲5.6 砂粒はとんど含まれない	精良	胎土: 白、釉: 透明	10	

第1表(2) 第I区第1面出土土器・土製品

種類	構成・層位	種類	器種	残存	法量(cm)	胎土	焼成	色調	仮番
13	32 SK002	染付	瓶	2/3	胴径16.2	径1mm以下砂粒はほとんど含まない。精良	良好 胎土:白、釉:青色味	9	
13	33 SK002	瓦	軒丸	瓦の内	瓦当径14.1、瓦当厚2.5	径3mm以下赤、白色ごく少ないと。精良	良好 胎土:灰、表面:黒・雲母	8	
15	34 SE035	白磁	碗	破片	-	砂粒はほとんど含まない。精良	良好 胎土:白、釉:透明、光沢純い	19	
15	35 SE035	下層	白磁	合子身	厚さ2.5	受け部径5.6、器高1.4	径1mm白色粒少ないと	良好 胎土:白、釉:白色、光沢純い	44
15	36 SE035	下層	青磁	洗型瓶	破片	-	精良	良好 胎土:にぶい緑、釉:にぶい黄緑、光沢	45
15	37 SE035	下層	青磁	皿	1/5	復元口径12.2	精良	良好 胎土:灰白、釉:淡緑、光沢	46
15	38 SE035 R1	土師器	銷壺	完全	口径5.2、器高10.8	径3mm以下石英・長石含む	良好 にぶい緑	43	
15	39 SE155	白磁	皿	1/8	復元口径11	精良	良好 胎土:灰白、釉:灰味、光沢純	51	
15	40 SE155	土師器	皿	1/2	復元口径9.4、器高1.2	径1mm以下白・赤色粒少ないと	良好 胎土:乳白、釉:灰緑味、透明	28	
15	41 SK137	白磁	碗	破片	-	砂粒はほとんど含まない。精良	良好 胎土:灰白、釉:緑味、透明	29	
15	42 SK137	青磁	碗	底部	高台径5.55	径1mm以下砂粒少ないと	良好 胎土:灰、釉:青磁のある緑	71	
15	43 SX035	青磁	碗	破片	-	微細な白色粒含む	良好 胎土:灰、釉:緑味、半透明	72	
15	44 SX035	青磁	碗	1/7	復元口径16.6	精良	良好 胎土:灰~淡灰、釉:緑、透明	73	
15	45 SX038	青磁	底部	高台径6.3	-	径1mm以下白・黑色粒含む	良好 胎土:灰~赤緑、釉:緑	73	
15	46 SE047	瓦	平	1/3	幅26、厚さ2	径2mm以下石英・長石少ないと	良好 黒色、副化	47	
15	47 SE047	陶器	秀才土器	瓶壺	破片	径2mm以下石英・長石や多い	良好 にぶい緑	49	
15	48 SE047	陶器	土製品	人形	破片	径1mm白色粒少ないと	良好 胎土:淡黄、釉:一部緑色	48	
16	49 SX015	青磁	坪	破片	-	精良	良好 胎土:灰白、釉:青緑、透明	70	
16	50 SX015	白磁	皿	1/5	復元口径11.1	精良	良好 胎土:灰白、釉:灰緑、透明	69	
16	51 SX015 R1	土師器	小皿	9/10	口径8.3、器高1.15	径3mm以下石英・長石含む	良好 外面:浅黄緑~黄緑、内面:にぶい黄緑~灰	68	
16	52 SX086	陶器	合子身	1/3	復元口径7.2、器高2.1	精良	良好 胎土:淡黄、釉:茶緑	77	
16	53 SX086	白磁	皿	1/4	復元口径11.3、器高3.35	微細な白・黑色粒含む	良好 胎土:乳白、釉:灰緑、不透明	78	
16	54 SX123	青磁	碗	底部	高台径4.8	径1mm以下砂粒や多い	良好 胎土:灰白、釉:空色、透明	80	
16	55 SX123	青磁	皿	1/2	復元口径12	精良	良好 胎土:灰白、釉:灰緑、透明	81	
16	56 SX123	土師器	皿	1/2	復元口径10.5、器高1.7	径1mm以下黑色粒やや多い	良好 線文	79	
16	57 SX124	青磁	碗	破片	-	微細な白色粒少ないと	良好 胎土:淡灰、釉:オリーブ、透明	83	
16	58 SX124	土師器	小皿	2/3	口径8.75、器高1.2	径1mm以下白色粒を含む	良好 外面:橙~にぶい黄緑~褐灰、内面:にぶい黄緑~褐灰	82	
16	59 SX166	陶器	耳壺	1/6	復元口径19.4	径4mm以下白色粒やや多い	良好 胎土:灰黄~灰黄、釉:灰~オリーブ	98	
16	60 I号(1面下) TS.2区	無釉陶器	小皿	1/7	復元口径9	微細な赤色粒含む	良好 黄緑	106	
16	61 I号(1面下) TS.2区	鰐形陶器	茶入	1/4	口径3.3	精良	良好 胎土:褐灰~にぶい赤褐色、釉:褐	107	
16	62 I号(区西+H下層) 5区+5区上) SD107	瓦質土器	呪印	1/5	復元口径31	径3mm以下石英・長石、黑色粒含む	良好 灰	108	
16	63 II正面出須持	白磁	小型壺	1/3	復元口径7.2	微細な黑色粒含む	良好 胎土:乳白、釉:灰緑	110	
16	64 II下層 4区	青磁	皿	9/10	口径11.5、器高2.85	径4mm以下白・黑色粒やや多い	良好 胎土:灰黄、釉:灰オリーブ、透明	111	
16	65 II面下 TS.78	青磁	皿	3/5	口径11.15、器高2.45	精良	良好 胎土:灰灰~灰白、釉:灰オリーブ、透明	112	
16	66 検査区西壁 R1	鰐形陶器	盤	1/10	復元口径44.8	径2mm以下黒・赤色粒含む	良好 胎土:灰~淡黄、釉:オリーブ黄	113	
16	67 I層 T6 1区	土製品	罐	1/5	復元口径50	径3mm以下白・赤色粒やや多い	良好 外面:にぶい緑~黒褐色、内面:にぶい緑~褐灰~黒褐色	109	
17	72 SK023	土製品	土瓶	1/2	径1.8	径1mm以下石英・長石含む	良好 灰~黒	P3	
17	73 SK023	土製品	土瓶	完形	長3.4、径1.5、重さ7.6	径1mm以下白色粒、角閃石含む	良好 明赤褐色	P4	
17	74 SK023	土製品	土瓶	完形	長3.4、径0.9、重さ3.6	径1mm以下石英・長石含む	良好 にぶい緑	P5	
17	78 SK153	土製品	土瓶	完形	長3.4、径1.8、重さ11.6	径2mm以下石英・長石、角閃石含む	良好 にぶい赤褐色~褐灰	P1	
17	79 SK153	土製品	土瓶	完形	長3.6、径1.3、重さ5.7	径2mm以下石英・長石含む	良好 明赤褐色~黒褐色	P2	
17	82 SK026	土製品	土瓶	1/2	径1	微細な砂粒を含む	良好 にぶい赤褐色	P9	
17	84 SK022	土製品	土瓶	完形	長6.1、径1.9、重量17.6	径1mm以下黑色粒やや多い	良好 淡黃褐色~橙	P9	
17	85 SK022	土製品	土瓶	完形	長3.2、径1.2、重さ4.6	径2mm砂粒含む	良好 赤褐色~黒褐色	P10	
17	86 SK022	土製品	土瓶	完形	長3.4、径1.9、重さ3.6	精良	良好 にぶい黄緑	P11	
17	87 SK022	土製品	土瓶	一部欠	径0.9	径1mm以下黒・白色粒含む	良好 色變	P12	
17	91 SK001	土製品	土瓶	完形	長3.3、径1.4、重さ6.9	径2mm以下石英・長石含む	良好 細	P6	
17	92 SK001	土製品	土瓶	一部欠	径1	径1mm以下砂粒少ないと	良好 明赤褐色	P7	
19	96 SE035 下層	土製品	土瓶	完形	長さ5、径2、重量14.8g	径1mm以下白・黑色粒含む	良好 にぶい緑~赤褐色	P13	
19	97 SE035 下層	土製品	土瓶	完形	長さ3.6、径1.4、重量7.6	径2mm以下白色粒含む	良好 にぶい緑~緑	P14	
19	99 SE035	土製品	土瓶	完形	長さ4.75、径0.9、重量2.9g	精良	良好 灰~黄褐色	P15	
19	105 SE155	土製品	土瓶	完形	長5.5、径1.8、重量15.4g	径1mm以下石英・長石、黑色粒含む	良好 線文明赤褐色	P16	
19	106 SE155	土製品	土瓶	完形	長さ5.5、径1.2、重さ5.1g	微細な白色粒少く含む	良好 浅黄緑~明赤褐色	P17	
19	107 SK137	土製品	土瓶	完形	長さ5.5、径2.1、重量19.2g	径1mm以下白・赤色粒含む	良好 淡黃褐色~褐色	P19	
19	108 SK137	土製品	土瓶	1/2	径1.9	径1mm以下石英・長石、角閃石含む	良好 にぶい黄緑~褐色	P18	
19	109 SK137	土製品	土瓶	一部欠	長さ5.7、径1.6、重量16.6g	径1mm以下白・黑色粒含む	良好 にぶい緑~褐灰	P21	
19	110 SK137	土製品	土瓶	完形	長さ5.4、径1.4、重量8.7g	微細な砂粒を含む。精良	良好 にぶい黄緑~褐色	P20	
19	113 SX037	土製品	土瓶	完形	長さ5.2、幅3.6、厚さ2.8、重さ45.3g	径1mm以下黑色粒・角閃石含む	良好 にぶい緑~緑	P22	
19	114 SX037	土製品	土瓶	完形	長さ5.6、径1.6、重量12.2g	径1mm以下石英・角閃石含む	良好 赤褐色	P23	
19	115 SX037	土製品	土瓶	完形	長さ4.16、径1.4、重さ6g	微細な砂粒を含む	良好 黄灰褐色~褐色	P24	

第2表(1) 第I区第1面出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。※法量の[ ]内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考	番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考
5001 SP034	泥岩	砾石	一部欠	長さ[9.4]				5039 SK049	蛇紋岩質	石錐	一部欠	長さ[3.35]			
5002 SP074	砂岩	石球	完形	径3.45-4.1				5040 SK019	蛇紋岩質	石錐	完形	長さ10.25			
5003 SP074	滑石	石錐か	破片	長さ[5.6]				513 SK026	滑石	-	石錐	完形	長さ5.31, 重量26.7	17回81	
5004 SP074	滑石	不明	破片	長さ[3.21]				5041 SK026	滑石	-	石錐	破片	長さ4.3		
5005 SP074	滑石	-	不明加工品	破片	長さ[6.86]			5042 SK026	滑石	-	小錐	完形	長さ4.81		
5006 SP095	結晶片岩	不明	破片	長さ[3.75]				5043 SK138	滑石	-	石錐	破片	長さ[3.13]		
5007 SP115	滑石	-	石錐未成品か	完形	長さ5.36			516 SK022	滑石	-	石錐	完形	長さ7.24, 重量110.3	17回83	
5008 SP117	滑石	石錐	完形	長さ4.03				515 SK022	滑石	-	小型円形加工品	完形	径4.1-1.89, 重量2.3	17回88	
5009 SP117	滑石	-	石錐	破片	長さ[3.25]			514 SK022	砂岩	-	石球	完形	径4.5, 重量112.8	17回89	
5010 SP120	結晶片岩	石錐	一部欠	長さ[8.28]				5044 SK022	セザン	-	不明加工品	完形	長さ3.72		
5011 SP120	結晶片岩	石錐	破片	長さ[5.84]				512 SK001	滑石	弱	石錐	一部欠	長さ[6.65], 重量[24.2]	17回90	
5012 SP130	滑石	-	石錐	破片	長さ[4.42]			5045 SK091	滑石	-	小錐	完形	長さ3		
5013 SP142	滑石	-	石錐	完形	長さ4.09			5046 SK091	圓	-	石錐	破片	長さ[4.63]		
5014 SL051 周辺	滑石	-	石錐	破片	長さ[5.3]			5047 SK105	滑石	-	石錐(石錐用)	一部欠	長さ5.71		
S2 SP154 上面	砂岩	-	砾石	完形	長さ6.2, 重量17回68			517 SK033 下層	蛇紋岩質	倒	石錐	一部欠	長さ6.72, 重量[39.7]	19回95	
S3 SP108	滑石	-	温石(右側輪用)	完形	長さ7.46, 重量[66.2]	17回69		518 SE035	礫岩	-	石球	完形	径2.8-3.3, 重量38.3	19回99	
5015 SK031	滑石	-	石錐	破片	長さ[2.9]			5048 SE035	蛇紋岩質	弱	不明加工品	完形	長さ4.6		
5016 SK031	滑石	-	温石か	破片	長さ[4.24]			519 SE155	黏板岩	-	硯	破片	長さ[6.08], 草[1.5]	19回101	
5017 SK031	直角	-	礁石か	一部欠	長さ[6.1]			520 SE155	砂岩	-	石球	完形	径2.33-3.77, 重量52.6	19回102	
5018 SK031	滑石	-	小錐	完形	長さ3.97			521 SE155	滑石	-	石錐	完形	長さ6.5, 重量145.4	19回103	
5019 SK031	滑石	-	小錐	完形	長さ3.58			522 SE155	滑石	-	石錐	完形	長さ4.26, 重量43	19回104	
5020 SK031	滑石	-	石材	長さ6.91				5049 SE155	滑石	-	石錐	完形	長さ4.95		
5021 SK094	滑石	微弱	石錐	破片	長さ[5.33]			5050 SK137	砂岩	-	石球	完形	径4.3-4.5		
S9 SK135	滑石	-	石錐	完形	長さ4.72, 重量42.2	17回70		5051 SK137	滑石	-	石錐	破片	長さ[6.73]		
5022 SK135	結晶片岩	弱	不明加工品	破片	長さ[3.37]			5052 SK137	滑石	-	石錐	破片	長さ[4.37]		
5023 SK135	滑石	-	石材	破片	長さ[2.23]			5053 SK137	滑石	-	石錐	破片	長さ[4.58]		
S11 SK023	滑石	微弱	石錐	完形	長さ8, 重量75.4	17回71		5054 SK137	砂岩	-	不明方形加工品	完形	長さ4.97		
S21 SK023	滑石	微弱	石錐	破片	長さ[5.56]			5055 SX036	滑石	-	石錐	完形	長さ5.86		
5025 SK098	滑石	-	石錐	一部欠	長さ4.36			5056 SX036	滑石	-	石錐	完形	長さ4.42		
S32 SK153R1	砂岩	板碑	一部	長さ[31.8], 重量[1129]	18回93			5057 SX036	滑石	-	石錐	一部欠	長さ3.07		
5026 SK153	砂岩	中	石錐	一部欠	長さ9, 重量[159.1]	17回75		5058 SX036	滑石	-	石錐(石錐用)	完形	長さ9.11		
S7 SK153	滑石	-	石錐(右側輪用)	完形	長さ3.92, 重量35.8	17回76		5059 SX036	滑石	-	小片		10点		
S8 SK153	滑石	-	石錐	完形	長さ6.2, 重量34	17回77		5060 SX036	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ8.05	
S9 SK153	滑石	-	石錐	破片	長さ[3.63]			5061 SX036	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ6.6	
5022 SK153	滑石	-	石材	破片	長さ[5.23]			5062 SX036	T1	滑石	弱	石材	破片	長さ[4.8]	
5023 SK153	滑石	-	不明加工品	完形	長さ3.85			5063 SX036	T1	滑石	-	石錐	石材	長さ[4.8]	
5024 SK153	滑石	-	不明加工品	完形	長さ3.45			5064 SX037	砂岩	-	石球	完形	長さ7.04		
5025 SK153	滑石	-	不明加工品	完形	長さ3.95			5065 SX037	砂岩	-	石球	完形	長さ8.05		
S34 SK063R1	礫岩	白	石臼	完形	径30.5, 重量1510	18回94		5066 SX038	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ3.02-3.96	
5021 SK063	滑石	-	石錐	破片	長さ[3.97]			5067 SX038	滑石	-	石球	完形	長さ5.08, 重量50.8	19回111	
5022 SK027	滑石	-	石錐	破片	長さ[3.34]			5068 SX038	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ6.3	
5033 SK027	サード	-	小錐(光沢)	完形	長さ2.78			5069 SX038	滑石	-	石錐	石材	長さ3.83		
5034 SK006	滑石	-	石錐	完形	長さ2.78			5070 SX036	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ6.45	
5035 SK151	滑石	微弱	石材	完形	長さ10.44			5071 SX037	砂岩	-	石錐	石材	完形	長さ5.42	
5036 SK151	石英	-	石材	完形	長さ4.49			5072 SX037	砂岩	-	石錐	石材	完形	長さ4.77	
5037 SK121 周	砂岩	-	石球	完形	径3.34-4.15			5073 SX037	砂岩	-	石錐	石材	完形	長さ5.5	
514 SK005	滑石	-	温石か	完形	長さ8.59, 重量115	17回90		5074 SX038	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ4.47	
5038 SK049	滑石	-	石錐	破片	長さ[6.05]			5075 SX038	滑石	-	石錐	石材	完形	長さ4.77	

第2表(2) 第Ⅰ区第1面出土石器・石製品  
※石材の「磁性」はネオジム磁石による。※法量の[ ]内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量 (cm, g)	備考	番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量 (cm, g)	備考
5071	SE056	砂岩	-	不明方形成形品	破片	長さ 3.74		5091	I層 T1 (4区, 北西)	滑石	-	石織	破片	長さ [4.12]	
5072	SE047 鹿方 住化木	-	砥石か	一部欠	長さ [3.66]		5092	I層 2区	滑石	-	石織(?)石 鐵輪用)	完形	長さ 4.02		
5073	SM015	滑石	-	石鍬	完形	長さ 5.96		5093	I層 2区	砂岩	中	砥石か	破片	長さ [2.81]	
5074	SX015	滑石	弱	石鍬	完形	長さ 5.17		5094	I層 T7	滑石	-	石鍬	完形	長さ 2.91	
5075	SX086	滑石	-	石鍬	破片	長さ [4.08]		5095	I層 T7	蛇紋岩質	弱	石鍬	完形	長さ 2.96	
5076	SX086	滑石	-	石鍬加工品	完形	長さ 4.84		5096	I層 T7	蛇紋岩質	弱	石鍬	完形	長さ 3.08	
5077	SX086	滑石	-	石鍬	完形	長さ 2.71		5097	I層 T7	蛇紋岩質	弱	剝片	完形	長さ 4.74	
55	SX123	シラ ト質	微弱	砥石	完形	長さ 7.42, 重量 135.2	19回 116	5098	II下層 2区	黒曜石	-	石核	完形	長さ 3.68	
5078	SX136	滑石	-	石鍬	完形	長さ 8.59		5099	II下層 5区	滑石	-	石織	破片	長さ [4.19]	
5079	SX165	滑石	微弱	石鍬	完形	長さ 3.42		5100	II下層 5区	蛇紋岩質	弱	不明加工品	完形	長さ 4.78	
5080	I層 1区	滑石	-	石鍬	完形	長さ 3.29		5101	II下層 5区	蛇紋岩質	弱	剝片	完形	長さ 3.65	
5081	I層 T6・ T5・2区	野紋 岩質	弱	石鍬	一部欠	長さ [9.43], 重 1.8	117	5102	SX039 磁 気石	結晶岩 質	小円形	完形	長さ 2.73-2.88		
5082	1面(直面) T5・2区	滑石	-	石鍬	破片	長さ [4.45]		5103	便孔 (SP082)	滑石	-	石鍬	完形	長さ 4.41	
5083	1面(直面) T6・2区	砂岩	弱	石球	完形	径 2.56-2.84		5104	便孔 045	滑石	-	石鍬	完形	長さ 7.78	
5084	1面(直面) T6・2区	滑石	-	石鍬	一部欠	長さ 4.8		5105	便孔溝	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 2.69	
5085	1面(直面) T6・2区	安山岩	中	礫石	完形	長さ 8.67		5106	便孔 5 区	滑石	-	石織(?)石 鐵輪用)	完形	長さ 4.65	
5086	1面(直面) T6・2区	安山岩	中	砥石か	破片	長さ [4.24]		5107	便孔 5 区	滑石	-	剝片	完形	長さ 3.82	
5087	I面下層	滑石	-	不明加工品 (石織輪用)	完形	長さ 5.49		5108	便孔 5 区	滑石	-	剝片	完形	長さ 4.16	
5088	I面下 堆積土 SP050 周 辺	蛇紋 岩質	弱	石鍬	完形	長さ 4.08		5109	SK022 北 側	滑石	-	石織	破片	長さ [5.43]	
5089	I面下 堆積土 SP050 周 辺	蛇紋 岩質	弱	石鍬	一部欠	長さ 5.94		5110	便孔 西 側	蛇紋 岩質	弱	石鍬	完形	長さ 5.35	
5090	I面下地 堆積土 SP050 周 辺	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 4.55									

第3表(1) 第1面金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考	遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SP003	181115	鉄針		SP110	181212	鉄津	
SP009	181116	鉄針		SP115	181212	鉄津	
SP011	181116	鉄針		SP116	181212	鉄針	
SP012	181116	鉄針		SP117	181212	鉄針	
SP017	181120	鉄津		SP119	181212	銅錢	至道元寶(初榜 995年)-20回 118
SP029	181128	鉄津		SP126	181214	鉄針	
SP033	181128	鉄津		SP133	191214	鉄針	
SP043	181129	銅錢		SP141	181219	銅錢	元豐通寶(初榜 1078年)
SP053	181130	鉄針		SP142	181219	鉄針	
SP058	181205	鉄津		SP147	181217	鉄造剝片、流動津	
SP060	181205	鉄針		SL147	堆土	181217	鉄造剝片、流動津
SP061	181205	銅銭		SP032	181128	鉄津	
SP064	181205	鉄針		SP035	181130	鉄津	
SP077	181207	鉄針		SL051	181217	鉄造剝片、粒状津	
SP080	181207	鉄針		SL051	181217	鉄造剝片、粒状津	
SP081	181206	鉄津		SP008	181115	鉄津、鉄造剝片、粒状津	
SP083	181207	鉄針		SP154	190108	鉄造剝片、粒状津	
SP084	181207	鉄針		SP108	181212	鉄津	
SP092	181214	銅銭	元祐通寶(初榜 1086年)	SK001	181115	鉄針、鉄津	
SP101	181212	鉄針		SK005	181115	鉄津、鉄津	
SP103	181212	鉄針					

第3表(2) 第1面金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考	遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SK006	181115	鉄釘、銅錢					
SK014	181120	鉄釘					
SK019	181205	鉄釘、鉄津、銅錢	寛永通寶(初鋤 1636年)	1層 2区	190108	鉄釘、鉄津、銅錢 4	明治元寶(初鋤 1868年) 20回126 昭和元寶(初鋤 1926年)
SK022	181126	鉄製品、鉄釘、銅錢 2	寛永通寶(初鋤 1639年)				昭和元寶(初鋤 1931年)
SK023	181121	鉄釘、鉄津、銅錢					
SK025	181207	鉄釘、鉄津					
SK026 中央暗色土	181207	銅錢					
SK027	181126	鉄釘、鉄津、銅錢	政和通寶(初鋤 1117年) 大治通寶(初鋤 1636年)				
SK031	181128	鉄釘、鉄津					
SK039 下面堆積層	181212	鉄釘					
SK063	181205	鉄釘					
SK074	181212	鉄釘、鉄津					
SK094	181210	羽口、鉄津					
SK098	181210	鉄釘、鉄津					
SK135	181217	鉄釘					
SK138	181218	鉄釘					
SK144	181219	鉄津					
SK149	181226	鉄釘					
SK151	190109	鉄釘、鉄津					
SK153	190115	鉄釘、鉄津					
SE035	181128	鉄釘					
SE035 下層	190116	鉄釘、銅錢	寛永通寶(初鋤 1638年)				
SK137	181217	鉄釘、鉄津、銅錢 2	寛元通寶(初鋤 1208年) 20回119 昭和通寶(初鋤 1928年) 20回120				
SX036	181129	鉄製品、鉄釘、銅錢	泰昌通寶(初鋤 1205年) 20回121				
SX036 下	181212	鉄釘					
SX037	181129	鉄釘					
SX037	181214	鉄釘					
SX038	181129	鉄釘					
SE056	181210	鉄釘、鉄津					
SE056 下層	190107	鉄津					
SE047	181212	鉄釘					
SX015	181120	鉄釘					
SX086	181207	鉄釘、鉄津、銅錢 7	開元通寶(初鋤621 年) 景祐元宝(初鋤 1034年) 20回122 熙寧重寶(初鋤 1068年)				
			元祐通寶(初鋤 1089年) 20回123 宣和通寶(初鋤 1119年) 20回124 淳熙元宝(初鋤 1174年) 20回125				
SX123	181212	鉄津					
SX124	181212	鉄製品					
SX166	190118	鉄津					
SP059 周辺1面 下堆積土	181207	鉄釘、銅錢 4	皇宋通寶(初鋤 1039年) 元豐通寶(初鋤 1078年)				
			昭聖光寶(初鋤 1098年) 大觀通寶(初鋤 1107年)				
SP074 周辺シミ状	190207	鉄釘、鉄津					
SK091 周辺堆積土	181210	鉄釘					
SK131 周辺土	181218	鉄釘、銅錢	元豐通寶(初鋤 1078年)				
1層 1区	181226	鉄釘					

### 第3節 第Ⅰ区第2面の調査

第1面調査時に、攪乱や遺構の壁面観察によって、下層からの遺物出土を確認した。そのため、第1面調査後にトレントT-1～7を設定して、下層の確認を行ないつつ第1面を掘り下げ、標高2～1.7mの砂丘風成砂上を遺構検出の第2面とした。土坑・井戸・溝などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀～14世紀代を中心とする。

#### 1. 木棺墓

**SR152**（第22・23図、図版7-8、8-1～5） 2区。調査区南西隅の第Ⅰ面掘り下げ中に10～15cm角の礫の集積を確認したが、礫の形状や並びが揃っていないかったため、礫の流れ込みや廃棄と認識して、検出状況の写真撮影（図版7-8）と礫出土範囲の記録（第22図）を行なった。その後、下層確認のためのトレントT5の西端として掘削を進めたが、遺構の掘方を把握できなかった。トレントT6の南端で完形青磁碗と人骨・鉄釘を検出して以降、木棺墓SR152と認識して記録をとった。

SR152の北東部から礫が並んで確認され、当初はSR152の一部と認識していたが、軸が異なっており、さらに北側に石列が延びたため、別の遺構（SX168）とした。

鉄釘は木棺に付属するものと想定して、出土位置を記録した（第23図）。鉄釘の形状と長軸の向き（上下左右）に着目して記録したが、検出時の砂・銷付着状態の観察によるため、釘の頭部・先端の認識は間違っている可能性もある。後のX線写真撮影や銷取りによる正確な形状の認識に対応できるような精度で記録・取り上げを行うべきであった。

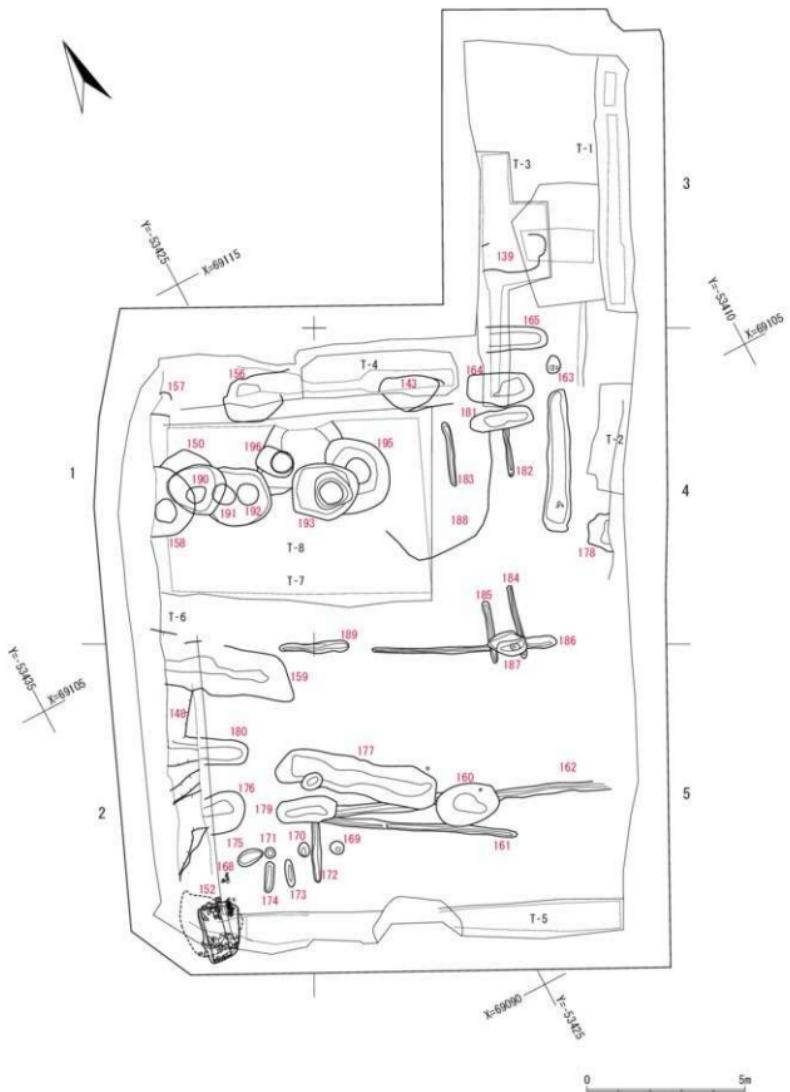
人骨は遺存状況が非常に悪く、形状を保った状態で取り上げることができなかつた。頭部付近の土は洗浄して、歯を採取した。装身具等の微細遺物は確認できなかつた。

上面礫の範囲は、長さ200cm、幅190cmを測る。墓壙は長さ182cm、幅115cm、深さ30cmを測る。棺材は残っていなかつたが、棺材を打ち付けたと考えられる鉄釘の位置から、長さ168cm、幅58cm程度の木棺を推定できる。

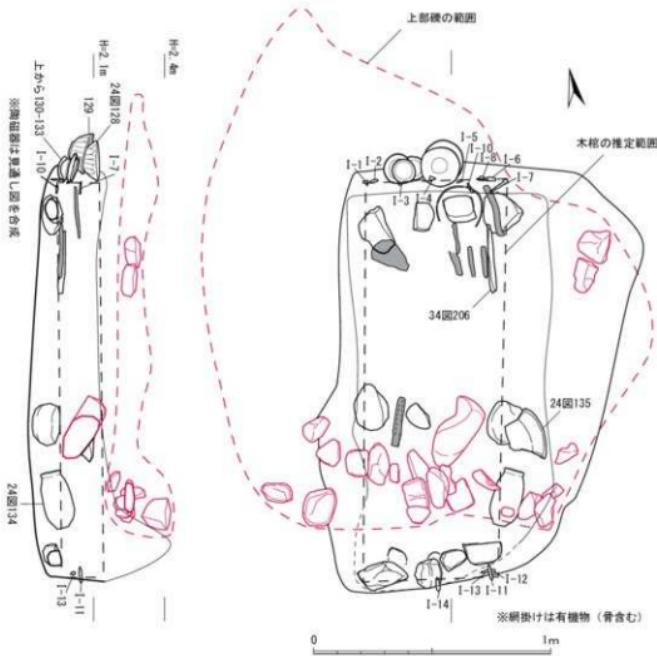
**出土遺物**（第24・33・34図、図版18-13） 128は龍泉窯系青磁碗IIb類（E期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。疊付を釉拭取り、高台内に輪状の焼台痕が残る。129は龍泉窯系青磁碗I-6b類（D期：12世紀中頃～後半）。高台内に輪状の焼台痕が残る。130・132・133は同安窯系青磁皿I-1a類（D期）。131は白磁皿VII-2b類（D期）。134は中国産陶器の壺。135は中国産陶器の大甕。部体下部に強いナデ上げの痕跡を特徴的に残す。I類で12世紀後半。136は龍泉窯系青磁杯III類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。174は滑石の不明加工品。193～205は鉄釘。釘の体部に直交して棺材の木質組織が残っている。残存長は、193が5.1cm、194が3.72cm、195が5.86cm、196が4.9cm、197が5.96cm、198が7.34cm、199が7.73cm、200が4.23cm、201が6.07cm、202が7.05cm、203が6.87cm、204が6.92cm、205が6.66cmを測る。鉄釘・木棺に関する詳しい所見は後述する（本章第5節第2項）。206は鉄製短刀。全長30.4cm、刀身の長さ22.1cm、幅3.8cm、厚さ1.6cm、茎の長さ8.5cm、幅1.3cm、厚さ0.9cmを測る。刀身に木質片が付着している。他にヒト頭蓋骨、歯と共に硬骨魚綱歯1点が出土した。

#### 2. 石列

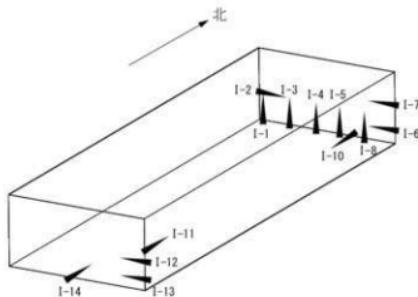
**SX168**（第25図、図版8-6） 2区。SR152の北側に長さ140cmの範囲で直線的に10～15cm角の石



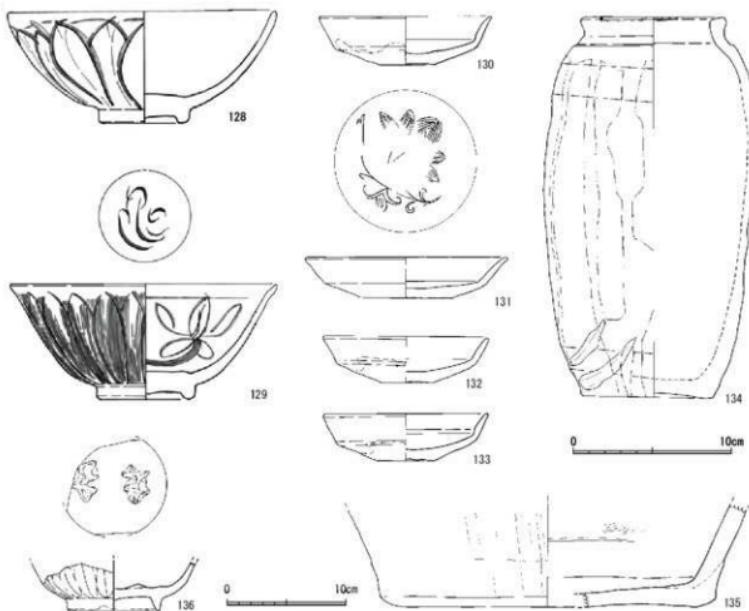
第21図 第I区第2面遺構全体図 (1/150)



第22図 SR152 実測図 (1/20)



第23図 SR152 鉄釘出土位置模式図



第24図 SR152出土土器実測図（135は1/4、他は1/3）

が配置される。SR152に切られる。

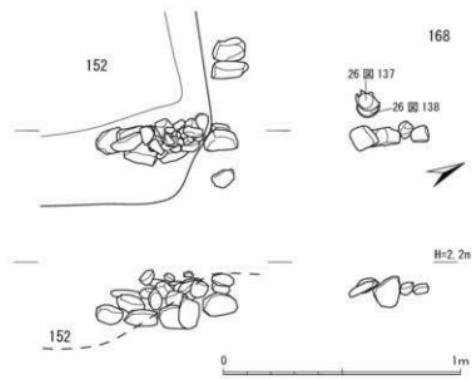
出土遺物（第26図） 137（図版18-11）は景德鎮窯青白磁皿。口縁部の釉を搔き取る。白磁X類（F期後半：13世紀後半～14世紀初頭前後）。138は同青白磁小碗。

### 3. 井戸

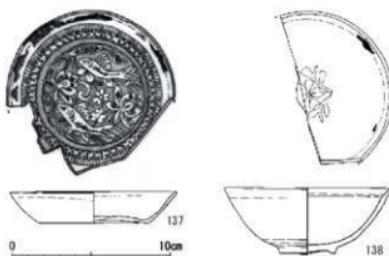
SE158の掘方はトレンチT6および調査区西壁で確認できたが、その他井戸の掘方は上面ではほとんど認識できなかった。第2面精査後、1区にわずかに汚れた砂が堆積していたため、トレンチT-8としてだめ押しで掘り下げるところ、下層で井戸群（井戸枠）を検出した。出土遺物の時期は12世紀中頃～14世紀初頭を中心とする。

**SE196**（第27図、図版8-7） 1区。井戸枠は確認されず、井筒と考えられる土坑部分の径は70cmを測る。底面の高さは標高0.3m程度。SE195・193・192に切られる。切り合いで最も古い井戸となる。

出土遺物（第28-33図） 139は井筒出土の同安窯系青磁碗I類（D期：12世紀中頃～後半）。140は井筒出土の同安窯系青磁碗II類（D期）。体部外面下半は露胎。141は掘方出土の同安窯系青磁皿I



第25図 SX168実測図 (1/20)



第26図 SX168出土土器実測図 (1/3)

出土遺物（第28・33図） 145は井筒出土の白磁皿IX-1類（F期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）。177・178は井筒出土の滑石製石錘。179は井筒出土の土錘。他に掘方からヒト下顎骨・歯（小児か）、ウマ歯、カレイ科第1血管間棘、井筒内からクジラ目椎骨などが出土した。

**SE192**（第27図、図版9-3） 1区。井戸枠はスギ板目材23枚の結桶で、径70cmを測る。標高1～0.25mに設置される。

出土遺物（第28図） 146は井筒出土の龍泉窯系青磁鉢。他に井筒・掘方から土錘が出土した。

**SE191**（第27図、図版9-4） 1区。井戸枠はスギ板目材19枚の結桶で、径72cmを測る。標高1～0.25mに設置される。

出土遺物（第28・33図） 147は井筒出土の糸切り底の土師器小皿で小型扁平化している。13世紀中頃。185は井筒出土の滑石製石錘。他に井筒から白磁、土錘が出土した。

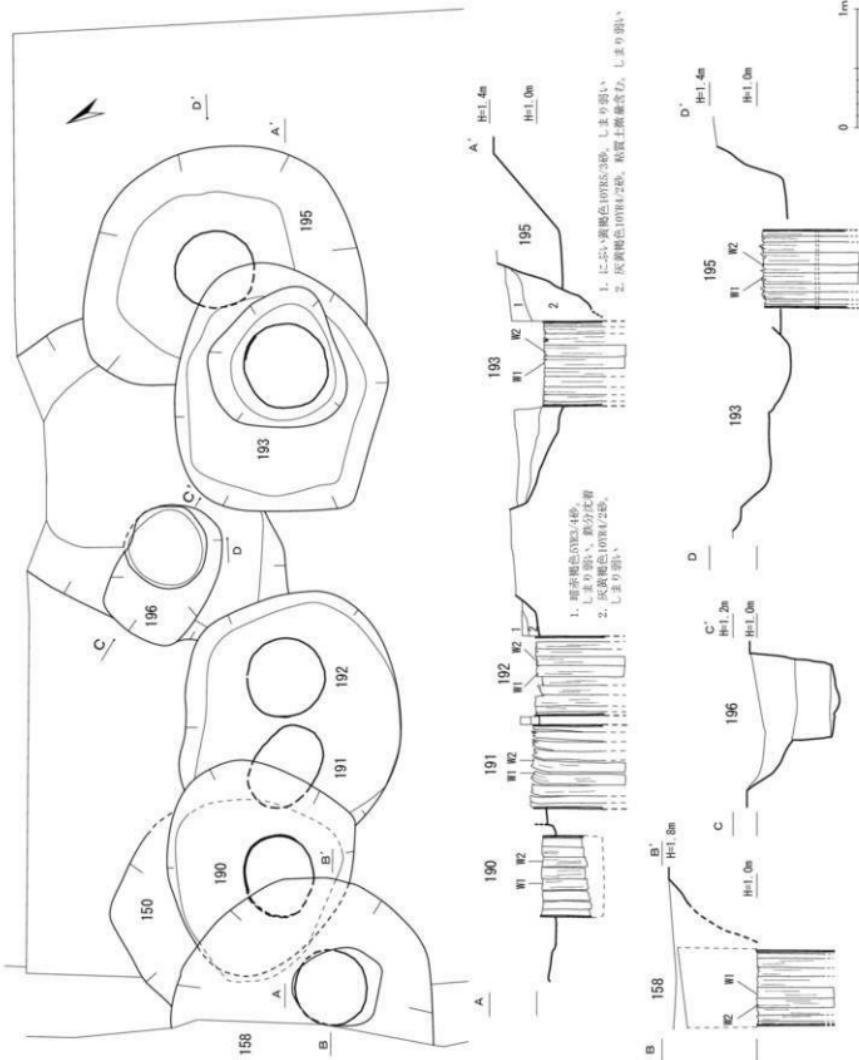
-2b類（D期）。底部外面の軸を搔き取る。142は掘方出土のヘラ切り底の土師器壺。12世紀中頃。175は井筒出土の滑石製石錘。長軸の溝の他、両側面に3ヵ所の対となる切り込み状の溝を持つ。176は井筒出土の土錘。他に井筒からヒト頭頂骨片が出土した。

**SE195**（第27図、図版8-8） 4区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径84cmを測る。遺存状態は悪いが籠が残っていた。標高0.95～0.1mに設置される。SE193に切られる。

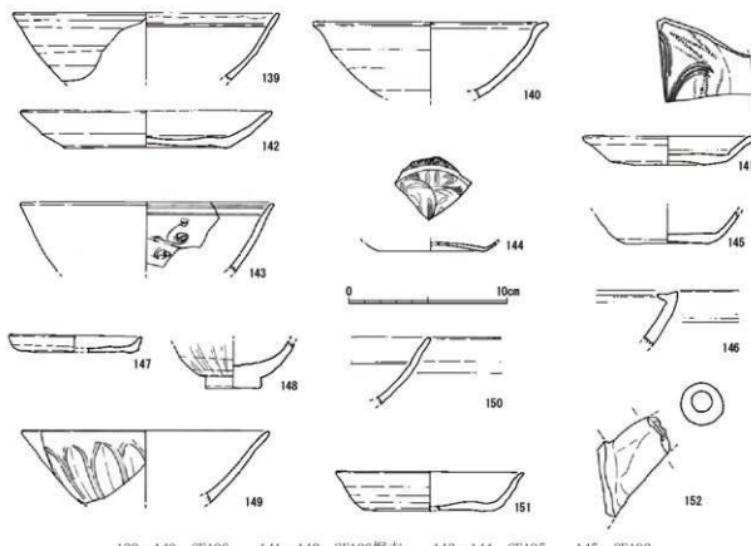
出土遺物（第28図） 143は井筒出土の龍泉窯系青磁碗I-4類（D期：12世紀中頃～後半）。144は井筒出土の白磁皿Xb類（F期後半：13世紀後半）。他に掘方からマダイ、ハタ科、ヒラメ、ニホンジカ下顎骨片などが出土した。

**SE193**（第27図、図版9-1・2）

1・4区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径77cmを測る。標高0.95～0.25mに設置される。



第27図 SE158・190・191・192・193・195・196実測図 (1/40)



139・140 SE196 141・142 SE196掘方 143・144 SE195 145 SE193  
146 SE192 147 SE191 148・149 SE190 150～152 SE158

第28図 SE出土土器実測図 (1/3)

**SE190** (第27図、図版9-5・6) 1区。井戸枠はスギ板目材20枚の結桶で、径65cmを測る。標高0.95～0.45mに設置される。

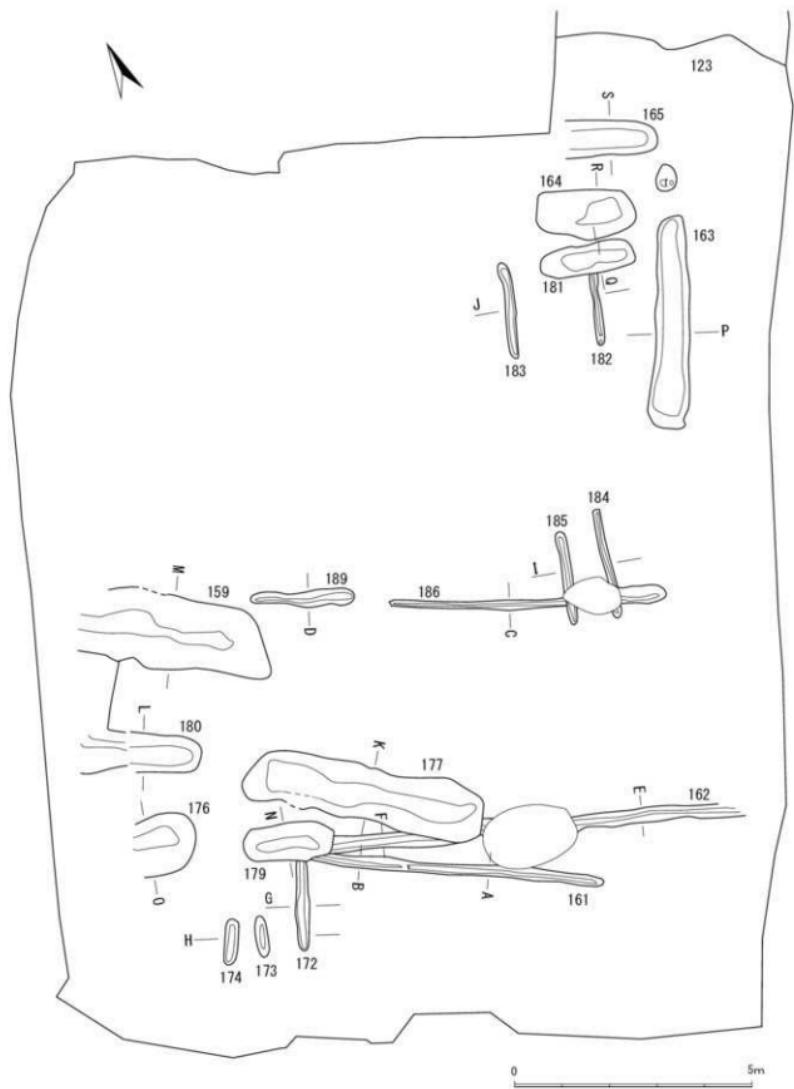
出土遺物 (第28・33図) 148は井筒出土の明黄褐色釉の青磁小椀。149は井筒出土の龍泉窯系青磁碗II b類 (E期:13世紀前半)。188は掘方出土の滑石製石錘。他に井筒からイス肩甲骨・四肢骨片 (子犬か)、イルカ類歯などが出土した。井筒最下層土壤から花粉はほとんど検出されず、植物珪酸体も少なかった。

**SE158** (第27図、図版9-7・8) 1区。井戸枠はスギ板目材22枚の結桶で、径77cmを測る。標高1～0.3mに設置される。SE190を切る。

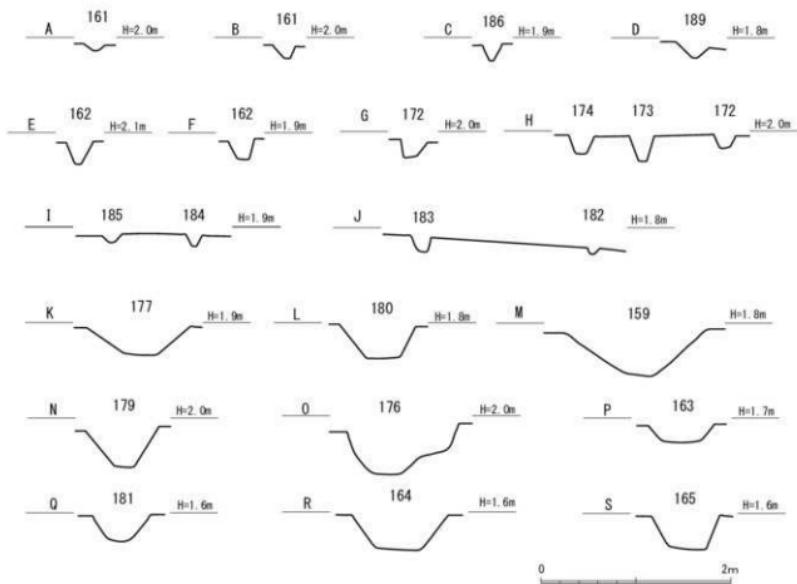
出土遺物 (第28・33図) 150は井筒出土の白磁碗。151は井筒出土の糸切り底の土師器坏で、口唇部や内面の一部が黒色化しており、灯明皿として利用されている。11世紀代。152は井筒出土の黒褐釉陶器水注。189は井筒出土の滑石製石錘。

#### 4. 溝

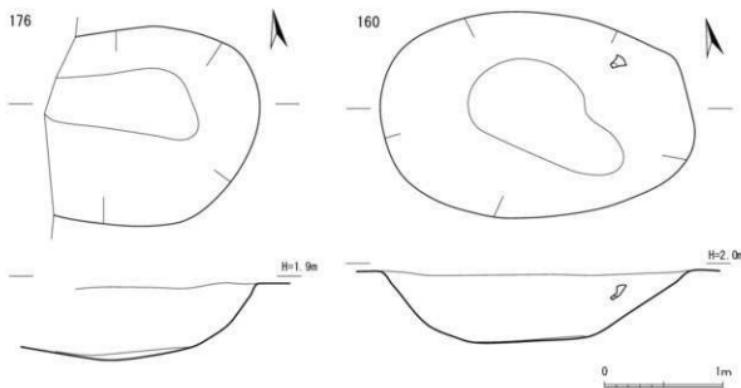
第2面全体で確認された。幅の狭い溝と広い溝で構成され、幅の狭い溝が幅の広い溝や土坑に切られる傾向がある。また、溝の方向にもわずかな差異があり、複数時期にわたって構築されている。出土遺物の時期は11世紀後半から12世紀後半もしくは13世紀代を中心とし、出土遺物からみても、層



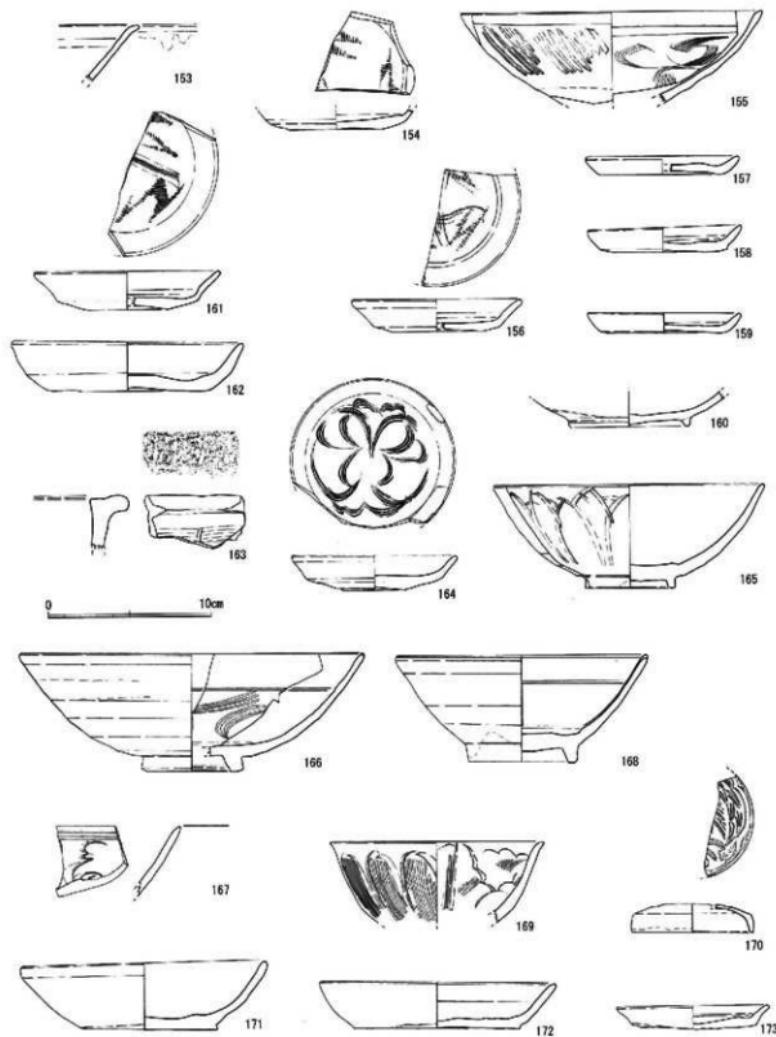
第29図 SD平面実測図 (1/100)



第30図 SD断面実測図 (1/50)



第31図 SK176・160実測図 (1/40)



153・154 SD162 155~159 SD163 160 SD164 161~163 SD159 164 SD177  
165 SK160 166 SX156 167 SX157 168 SX139 169~173 SX188

第32図 SD・SK・SX出土器実測図 (1/3)

位からみても、第Ⅰ区で最も古い遺構群と考えられる。

**SD162** (第29・30図、図版10-3) 5区。幅27cm、深さ23cmを測る。SD177やSK160に切られる。  
出土遺物（第32図） 153は白磁碗V-2a類（C期：11世紀後半～12世紀前半）。154は同安窯系青磁皿I-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面の釉を搔き取る。

**SD163** (第29・30図、図版10-4) 4区。幅83cm、深さ28cmを測る。

出土遺物（第32図） 155は同安窯系青磁碗III-1b類（D期：12世紀中頃～後半）で、体部外面下半は露胎。156は同安窯系青磁皿I-2b類（D期）で、底部外面の釉を搔き取る。157～159は糸切り底の土師器小皿。他にイヌ下顎骨片が出土した。

**SD164** (第29・30図、図版10-2) 4区。幅106cm、深さ49cmを測る。

出土遺物（第32図） 160は土師器の高台付碗。他に陶磁器片が出土した。

**SD159** (第29・30図) 2区。幅158cm、深さ61cmを測る。

出土遺物（第32・34図） 161は同安窯系青磁皿I-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面の釉を搔き取る。162は糸切り底の土師器坏。13世紀代。163は土師質鍋。207は銅錢「天聖元寶」（初鑄1023年）。

**SD177** (第29・30図) 2・5区。幅108cm、深さ56cmを測る。SD162を切る。

出土遺物（第32・34図） 164は龍泉窯系青磁皿I-2b類（D期：12世紀中頃～後半）。底部外面は釉を搔き取る。208は銅錢「祥符元寶」（初鑄1008年）。

## 5. 土坑

幅の広い溝と長軸方向が同じ傾向もあるため、同質のもの（短い溝）の可能性もある。出土遺物の時期は13世紀前半。

**SK176** (第31図) 2区。幅122cm、深さ52cmを測る。摩滅した黒曜石洞片が出土した。

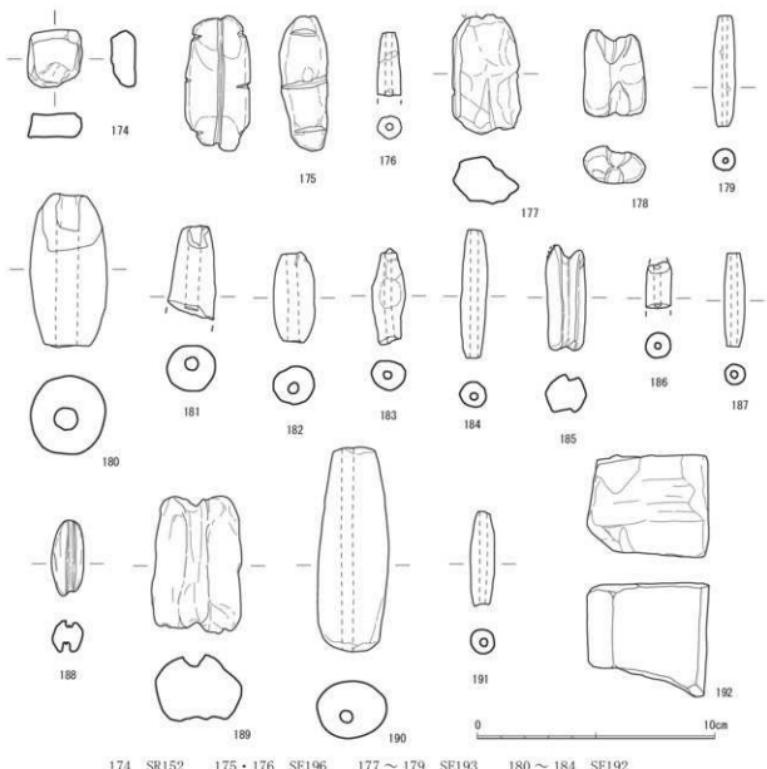
**SK160** (第31図、図版10-1) 5区。長さ199cm、幅130cm、深さ45cmを測る。SD162を切る。

出土遺物（第32図） 165は龍泉窯系青磁碗IIa類（E期：13世紀前後～前半）。底外面は露胎、豊付は釉剥ぎ取り。他にスッポン肋骨版、腹骨板片、哺乳類骨片が出土した。

## 6. 包含層

第2面上で形状が不明瞭な堆積層をSXとして記録した。出土遺物の時期は、11世紀後半から14世紀前半を中心とする。

**SX156** (1区) 出土遺物（第32図） 166（図版18-12）は白磁碗で、口縁部外面に白化粧土を施し、内面と口縁部外面まで黄色味がかった不透明釉がかけられる。内面見込みの釉を環状に搔き取る。磁



第33図 SR・SE・SX出土石製品・土錐実測図(1/2)

州窯産で12世紀後半～13世紀前半か。

**SX157**(1区) 出土遺物(第32図) 167は龍泉窯系青磁碗I類(D期:12世紀中頃～後半)。

**SX139**(3区) 出土遺物(第32図) 168は白磁碗II類(C期:11世紀後半～12世紀前半)で、内面見込みの軸を環状に搔き取る。

**SX188**(4区) 出土遺物(第32・33図) 169は龍泉窯系青磁碗I-6a類(D期:12世紀中頃～後半)。170は景德鎮窯青白磁合子蓋(F期:13世紀後半～14世紀前半)。171・172は糸切り底の土器器坏。2点とも内面に黒色付着物がある。173は糸切り底の小皿。12世紀後半。192は砂岩の砥石。立方体状に打削後も砥石として利用している。線状痕や浅い削り状の凹みが形成され、砥面は凹状ではなく

平滑になる。他にマダイ頭骨片（カブトワリ痕あり）が出土した。

## 7. 小結

溝の方向や井戸の並びから、第2面中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていたと想定され、第1面中世期の地割とはほぼ同じと考えられる。

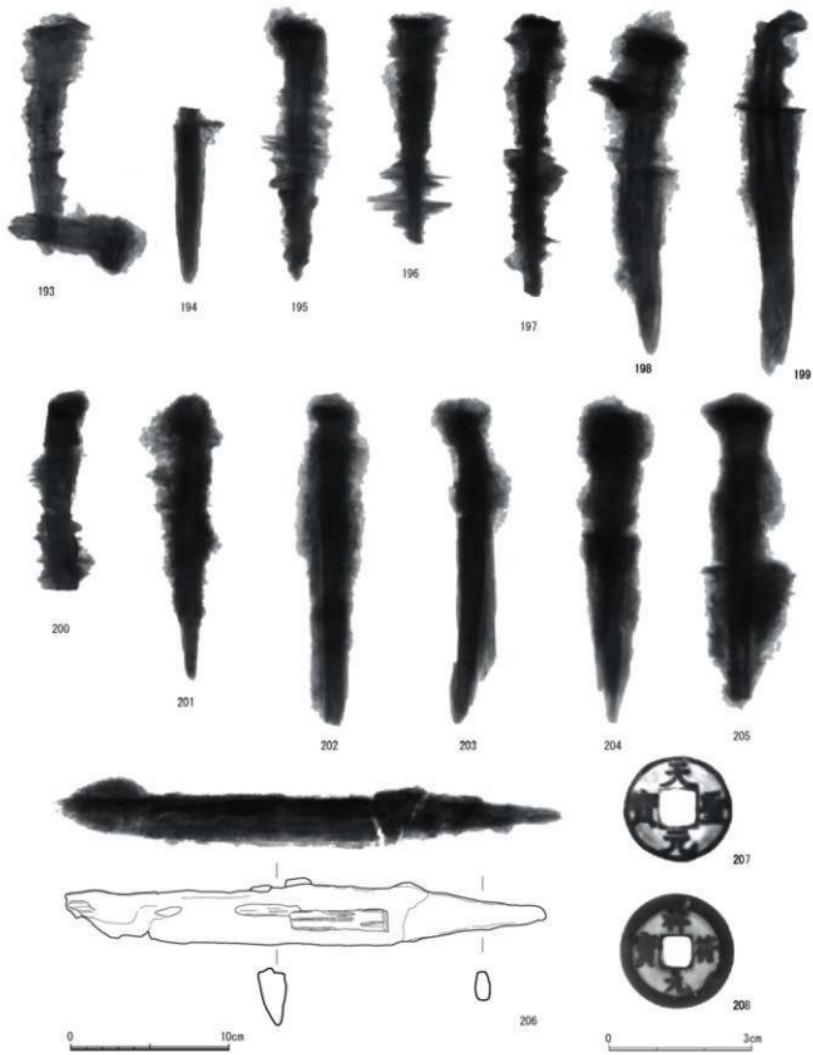
調査区全体で確認された数種の溝は、性格は不明だが、地割や埋め立て・整地に関係する可能性がある。

素掘り井戸SE196井筒からは人骨頭頂部片が、結桶井戸SE193の掘方からは小児下顎骨が、結桶井戸SE190井筒からは子犬骨が出土した。偶発的な混入でなければ、井戸の構築や廃棄に関係する可能性がある。

第2面については、第1面に比べて、漁撈具の出土が少ないことが特徴である。第33図や第5表で示すとおり、井戸から各種の滑石製石錘や土錘が出土したが、その他包含層や溝、土坑からは石錘・土錘・蛸壺はほとんど出土していない。第2面は通常の居住活動が本格化する前の段階に形成された活動面と考えられる。調査区南西隅で確認された木棺墓SR152も、当該地での居住地形成に伴って、最初期の段階で構築されたものと考えられる（副葬品は12世紀後半遺物を主体としつつ、13世紀代の遺物（第24図128・136）を含む）。

木棺墓SR152については、墓壙掘削後、北端・中央・南端に径20cmほどの礫を敷き、その上に木板を鉄釘で打ち付けて組み合わせた木棺（第5節第2項）を安置している。北側の青磁碗・皿（第24図128～133）は棺外副葬と考えられるが、鉄製短刀（第34図206）と陶器壺（第24図134）は木棺腐朽後に下位に落ちている可能性もあり、棺外か棺内か不明である。人骨は遺存状態が悪く、詳細は不明であるが、頭蓋や臼歯の形状は、成人女性の特徴を示している（第5節第1項）。

井戸から出土した石錘・土錘のうち、側面に3対の溝を持つ有溝石錘175（SE196）、小型有溝石錘188（SE190）、大型土錘180（SE192）、大型土錘190（SE158）は他と形状や大きさが異なる。側面有溝石錘175の同型石錘は箱崎遺跡11次（592集）・SE033出土52（13世紀中頃）、類似型石錘は21次（705集）・SE006出土11（13世紀後半）、32次B区（896集）・SP328出土263、包含層出土269、67次（1165集）・SE651出土11（13世紀後半～14世紀前半）、包含層出土34、73次（1316集）・包含層出土19、SK238出土7、SK428出土10などがある。側面有溝石錘175はSE196出土で12世紀中頃～後半の時期が考えられる。小型有溝石錘188の同型石錘は、箱崎遺跡47次（1046集）・SD20出土88（13世紀後半～14世紀前半以降か）、55次（1046集）・SK145（時期不明）、77次（1345集）・SE2085出土107（11世紀後半～12世紀前半）などが確認できる。小型有溝石錘188はSE190から出土しており、13世紀代の時期が考えられる。



193 ~ 206 SR152 207 SD159 208 SD177

第34図 第I区第2面金属製品実測図およびX線画像 (206は1/3、他は1/1)

第4表 第Ⅰ区第2面出土土器・土製品

番号	遺構・層位	種類	器種	現存	法徳 (cm)	胎土	後成	色調	仮面	
24	128 SR152 R1	青磁	碗	完形	口径16.9, 器高7	径2 mm以下砂粒ごく少ない	良好	胎土: 淡灰、輪: 灰緑、光沢	1	
24	129 SR152 R2	青磁	碗	完形	口径16.7, 器高7.2	径1 mm以下砂粒ごく少ない	良好	胎土: 不明、輪: 灰緑、光沢	2	
24	130 SR152 R2	青磁	皿	完形	口径10.8, 器高3	径2 mm以下砂粒含む	良好	胎土: 灰黄緑、輪: 灰緑味、光沢	3	
24	131 SR152 R4	白磁	皿	完形	口径12.7, 器高2.6	径1 mm以下砂粒含む	良好	胎土: 灰白、輪: 灰、光沢無い	4	
24	132 SR152 R5	青磁	皿	完形	口径10.4, 器高2.9	径1 mm以下砂粒少ない	良好	胎土: 淡黄緑、輪: 灰緑味、光沢	5	
24	133 SR152 R6	青磁	皿	完形	口径10.4, 器高3	径1 mm以下砂粒がない	良好	胎土: にぶい黄緑、輪: 灰緑味、光沢	6	
24	134 SR152 R10	陶器	壺	完形	口径9, 器高23.8	径2 mm砂粒や多い	良好	胎土: 灰~黒、輪: 純オーリエ~暗黒	7	
24	135 SR152 R9	陶器	大甕	底付	復元底径18.2	径2 mm以下白色粒含む	良好	胎土: 赤褐色、輪: 褐、灰	86	
24	136 SE152 上層	青磁	杯	底部	高台径5.8	微細な黑色粒含む	良好	胎土: 灰白、輪: 緑褐色、不透明	85	
26	137 SX168 R1	青白磁	皿	底付	口径10.5, 器高2	微細な黑色粒含む	良好	胎土: 白、輪: 空色、透明	99	
26	138 SX168 R2	青白磁	小皿	1/2	復元口径10.5, 葵紋4.2	精良	良好	胎土: 白、輪: 空色、透明	100	
28	139 SE196	青磁	碗	1/8	復元口径16.8	微細な白色粒含む	良好	胎土: 灰、輪: オリーブ、不透明	62	
28	140 SE196	青磁	碗	1/8	復元口径14.8	微細な白色粒含む	良好	胎土: 灰白、輪: 灰緑、透明	63	
28	141 SE196	楕方	青磁	皿	復元口径10.8, 器高1.8	微細な砂粒含む	良好	胎土: 灰、輪: 緑、透明	65	
28	142 SE196 楕方	土師器	杯	1/2	復元口径15.7, 器高2.1	径2.5 mm以下石英、長石や多い	良好	外表面: にぶい黄緑、内面: 淡黄緑~灰黒色	64	
28	143 SE195	青磁	碗	1/8	復元口径16	精良	良好	胎土: 灰、輪: 灰緑、光沢あり	60	
28	144 SE195	白磁	皿	1/4	復元底径6.6	精良	良好	胎土: 黄白、輪: 黄味、光沢無い	61	
28	145 SE193	白磁	皿	底付	底径5.3	精良	良好	胎土: 灰白、輪: 灰味、光沢あり	59	
28	146 SE194	青磁	碗	破片		精良	良好	胎土: 灰白、輪: 緑、光沢あり	58	
28	147 SE191	土師器	小皿	4.5	口径8.5, 器高1.1	径2 mm以下白、赤色粒含む	良好	にぶい黄緑	57	
28	148 SE190	青磁	碗	底付	高台径3.6	精良	良好	胎土: 淡黄緑、輪: 金葉緑、光沢あり	56	
28	149 SE190	青磁	碗	1/6	復元口径15.6	精良	良好	胎土: 暗灰、輪: 灰、光沢あり	55	
28	150 SE158	白磁	碗	破片		微細な白色粒含む	良好	胎土: 暗灰、輪: 灰、光沢強	52	
28	151 SE158	土師器	杯	1/4	復元口径11.8, 器高2.5	径1 mm以下黑色粒がない	精良	良好	明褐色	53
28	152 SE158	陶器	水注	破片		精良	良好	胎土: 灰、輪: 黒褐、光沢あり	54	
32	153 SD162	白磁	碗	破片		微細な黑色粒少ない	良好	胎土: 淡黄緑、輪: 黄灰、不透明	66	
32	154 SD162	青磁	皿	1/10	復元底径5.6	微細な黑色粒含む多い	良好	胎土: 黄灰、輪: オリーブ、透明	67	
32	155 SD163	青磁	碗	1/4	復元口径18.4	径1 mm以下白、黑色粒含む	良好	胎土: 黄灰~白、輪: オリーブ灰、透明	95	
32	156 SD163	青磁	皿	1/4	復元口径10.4	微細な白色粒含む	良好	胎土: 淡黄~黄、輪: オリーブ灰、透明	96	
32	157 SD163 R1	土師器	小皿	1.2	復元口径9.4、器高1.1	径2 mm以下石英、長石含む	良好	外表面: 明褐色~概~灰黒、内面: 淡黄緑~灰黒	92	
32	158 SD163 R2	土師器	小皿	完形	口径9.85、器高1.45	径2 mm以下石英、長石や多い	良好	外表面: にぶい灰、内面: 淡黄緑~にぶい黄緑	93	
32	159 SD163 R3	土師器	小皿	2/3	口径9.45、器高1.25	径2 mm以下石英、長石含む	良好	外表面: 浅黄緑~にぶい黄緑、内面: にぶい黄緑~概	94	
32	160 SD164	土師器	碗	底付	復元高台径7.4	径2 mm以下白、黑色粒含む	良好	胎土: 黄灰~白、輪: オリーブ灰、透明	97	
32	161 SD159	青磁	小皿	1/3	復元口径11.4、器高2.35	微細な白・赤色少ない	良好	胎土: 灰~灰黒、輪: オリーブ、透明	91	
32	162 SD159	土師器	杯	完形	口径14.2、器高3.1	径2 mm以下白、黑色粒少ない	良好	胎土: 黄灰~白、輪: 灰、光沢	90	
32	163 SD159	土師器	碗	破片		径6 mm以下石英、長石多い	良好	外表面: にぶい黒~黒褐色(スヌ付着)、内面: にぶい灰~灰褐色	89	
32	164 SD177 R1	青磁	皿	7/10	口径10.1、器高2.2	白色砂粒少なく含む	良好	胎土: 灰白、輪: 青緑、透明	114	
32	165 SK160	青磁	碗	1/5	復元口径16.6、器高6.35	径1 mm以下白色砂粒少ない	良好	胎土: 灰、輪: 綠褐色	33	
32	166 SX156	白磁	碗	1/7	復元口径21、器高7.15	径1 mm以下白、黑色粒含む	良好	胎土: 黄灰~灰黒、輪: 黄色灰、不透明	87	
32	167 SM157	青磁	碗	破片		微細な黑色粒少ない	良好	胎土: 淡灰、輪: オリーブ、透明	88	
32	168 SX159	白磁	碗	2/3	復元口径15.4、器高6.4	微細な黒・白色粒少ない	良好	胎土: 灰白、輪: 灰緑、透明	84	
32	169 SX158	青磁	碗	1/4	復元口径13.1	精良	良好	胎土: 灰白、輪: 青緑、透明	105	
32	170 SX158	青白磁	皿	1/8	復元口径15.4、器高1.7	微細な黒・白色粒含む	良好	胎土: 白、輪: 灰緑、透明	104	
32	171 SX188	土師器	杯	3/5	復元口径15.4、器高4.2	径3 mm以下石英、長石含む	良好	外表面: 浅黄緑~にぶい黄緑~黒褐色、内面: 浅黄緑~黒褐色	101	
32	172 SX188	土師器	杯	3/5	復元口径14.4、器高2.9	径1 mm以下石英、長石含む	良好	外表面: にぶい黒~灰黒~黄黒~黒褐色、内面: にぶい黒~にぶい黄緑~灰黒	107	
32	173 SX188	土師器	小皿	9/10	口径9.35、器高1.5	径1 mm以下白石英、長石、赤色粒少なく含む	良好	にぶい黄緑	103	
33	176 SE196	土製品	土鍤	2/2	径1	微細な白色粒を含む	良好	胎土: にぶい	P25	
33	179 SE193	土製品	土鍤	完形	長さ4.45、径0.9、重量3.4g	精良	良好	胎土: にぶい	P26	
33	180 SE192	土製品	土鍤	一端欠	長さ6.5、径3.3、重量67.9g	径1 mm以下石英、長石含む	良好	胎土: にぶい	P30	
33	181 SE192	土製品	土鍤	2/2	径2	径1 mm石英、長石、径3 cm市赤色粒含む	良好	胎土: 赤褐色	P31	
33	182 SE192	土製品	土鍤	完形	長さ10.5g	径1 mm以下白色粒含む	良好	胎土: 黒褐色~黒	P32	
33	183 SE192	土製品	土鍤	完形	長さ4.05、径1.4、重量6.4g	微細な砂粒を含む	良好	胎土: 赤褐色~赤灰	P33	
33	184 SE192 楕方	土製品	土鍤	完形	長さ4.7g	微細な砂粒を含む	良好	胎土: 浅黄緑~楕	P34	
33	186 SE191	土製品	土鍤	1/2	径1.05	精良。褐色	良好	胎土: 褐	P28	
33	187 SE191	土製品	土鍤	完形	長さ2.3g	精良	良好	胎土: にぶい	P29	
33	190 SE158	土製品	土鍤	完形	長さ8.7、径0.9、重量64.9g	径2 mm以下白、黑色粒含む	良好	胎土: にぶい黄緑~黒褐色	P35	
33	191 SE158	土製品	土鍤	完形	長さ4.1、重量3.4g	微細な砂粒を含む	良好	胎土: にぶい黒~白	P36	

第5表 第I区第2面出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。※法量の〔 〕内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量 (cm, g)	備考
S1	SR152 内側	滑石	-	不明加工品	一部欠	長さ 2.34, 重量 9.6	33回 174
S111	SR152 上層土	滑石	弱	石鍋	破片	長さ 4.84-9.46	3点
S25	SE196	滑石	-	石鍤	完形	長さ 5.74, 重量 46.9	33回 175
S112	SE196	砂岩	-	石球	完形	径 2.28-2.53	
S113	SE196 頂方	滑石	-	石鍋	破片	長さ [5.45]	
S114	SE195 頂方	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 7.94	
S115	SE196 頂方	チャート	-	小鏡 (光沢)	完形	長さ 2.09	
S27	SE193	滑石	-	石鍤	完形	長さ 5.06, 重量 34.9	33回 177
S28	SE193	滑石	-	石鍤	完形	長さ 3.7, 重量 21.3	33回 178
S116	SE193 頂方	滑石	-	石鍋	破片	長さ [3.33]	
S117	SE193 頂方	滑石	-	不明加工品 (石鍋転用)	完形	長さ 4.11	
S118	SE192	滑石	-	石鍤	破片	長さ [3.48]	
S119	SE192	滑石	弱	不明加工品	破片	長さ [2.35]	
S120	SE192 頂方	滑石	-	石鍋	破片	長さ [5.44]	
S121	SE192 頂方	滑石	-	石鍤	完形	長さ 2.94	
S30	SE191	滑石	-	石鍤	一部欠	長さ 4.44, 重量 17.3	33回 185
S29	SE190 頂方	滑石	-	石鍤	完形	長さ 3.16, 重量 6.8	33回 188
S122	SE190 頂方	滑石	弱	不明加工品	完形	長さ 8	
S31	SE158	滑石	-	石鍤	完形	長さ 5.78, 重量 94.8	33回 189
S123	SD177	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 3.58	
S124	SD179	滑石	-	不明加工品	破片	長さ [4.39]	
S125	SK176	黒曜石	-	剝片	完形	長さ 2.81	
S126	SX156 南半	滑石	-	石鍋	破片	長さ [5.42]	
S32	SX188	砂岩	-	石球	完形	長さ 4.8, 重量 142.2	33回 192
S127	SX188	黒曜岩か	-	円錐 (平滑)	完形	径 2.81-4.26	
S128	2面検出清掃	砂岩	-	石球	完形	径 2.78-3	
S129	2面検出清掃	滑石	-	石鍤	完形	長さ 4.83	
S130	2面検出清掃	滑石	-	石鍤	破片	長さ [2.4]	
S131	2面検出清掃	蛇紋岩質	弱	石鍤	完形	長さ 0.93	
S132	2面検出清掃	滑石	-	石鍤 (石鍋転用)	完形	長さ 2.16	
S133	2面検出清掃	蛇紋岩質	弱	剝片	完形	長さ 3.17	
S134	2面検出清掃	滑石	-	不明加工品	完形	長さ 2.14	
S135	2面清掃	頁岩	-	純石か	破片	長さ [2.57]	

第6表 第2面金属関係遺物出土構造

遺構	取上日	金属関係遺物	備考	遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SR152 I1	090111	鉄針 34 図 193		SE158 頂方	190128	鉄針	
SR152 I2	090111	鉄針 34 図 194		SD159	190116	鉄洋、銅線	天聖元寶 (初鉄 1023年) 34回 207
SR152 I3	090111	鉄針 34 図 195		SD161	190121	鉄針	
SR152 I4	090111	鉄針 34 図 196		SD162	190121	鉄針	
SR152 I5	090111	鉄針 34 図 197		SD163	190123	鉄針、鉄津	
SR152 I6	090111	鉄針 34 図 198		SD164	190123	鉄津	
SR152 I7	090111	鉄針 34 図 199		SD175	190121	鉄津	
SR152 I8	090115	鉄針 34 図 200		SD177	190123	鉄針、鉄津、銅線 3	祥符元寶 (初鉄 1008年) 34回 208 形聖元寶 (初鉄 1066年) 大觀通寶 (初鉄 1107年)
SR152 I10	090116	鉄針 34 図 201		SD182	190122	鉄針	
SR152 I11	090124	鉄針 34 図 202		SK176	190122	鉄針、鉄津	
SR152 I12	090124	鉄針 34 図 203		SK160	190121	鉄片、鉄津	
SR152 I13	090124	鉄針 34 図 204		SX049	181130	鉄針、鉄津	
SR152 I14	090124	鉄針 34 図 205		SX096	181210	鉄針	
SR152 I19	090116	我垣刀 34 図 206		SX136	181217	銅錢	
SR152 南半	090123	鉄針		SX143	181219	鉄針	
SR152 南端	090124	鉄針		SX143 南半	190123	鉄片、鉄野、鉄津	
SR152 上層土	090118	鉄針		SX146 (下巻含む)	181225	鉄針、鉄津	
SR152 外側	090108	鉄針		SX148 T6	181225	鉄津	
SE196	090120	鉄針		SX150	190123	鉄片、鉄針、鉄津	
SE196 頂方	090130	鉄針、鉄津		SX150 T6	181226	鉄針	
SE195	090129	鉄針		SX154	190108	鉄津	
SE195 頂方 (井戸型)	090129	鉄針、鉄津		SX154 上面	190108	鉄津	
SE195 頂方	090130	鉄津		SX156 T4	190109	鉄針、銅錢	熙寧元寶 (初鉄 1068年)
SE193	090129	鉄針、銅錢 2		SX156 南半	190123	鉄針、鉄津	
SE193 頂方	090129	鉄針		SX157	190122	鉄針	
SE192	090129	鉄針		SX181	190123	鉄針	
SE192 頂方	090129	鉄針		SX188	190123	鉄針、鉄津	
SE191	090129	鉄針		2面検出清掃	190123	鉄針、鉄津	
SE190	090128	鉄針		2面清掃	190118	鉄針	
SE158	090128	鉄針					

#### 第4節 第II区の調査

表土をバックホウで除去後、標高2.2~1.8mの面を遺構検出面とした。全体に共同溝や建物基礎（旧工学部防音講義室）による影響が大きく、遺構の残りは悪い。ピット・土坑・井戸・堆積層などを掘削・記録した。出土遺物の時期は12世紀~16世紀代を中心とする。なお、調査着手時は、南東側を調査区として設定し、グリッド1~10区を設定していたが、調査中に調査区を拡張する必要性が生じ、北西側に調査区を拡張して新たにグリッド11~19区を設定した。調査時の遺物取り上げなどはグリッド1~19区を用いたが、これらの区割は順番に並んでいなかったため、本報告では、南北軸にA~Fの記号を、東西軸に1~4の番号を付して、各区割を「アルファベット・数字」で呼称する。

#### 1. 土器埋納遺構

**SX044** (第37図、図版14-1・2) E-4区。掘り込みは長さ80cm、深さ34cmを測る。埋土が黄褐色の細・中砂で地山と区別がつかず、平面の遺構検出では認識していなかったが、擾乱で切られた断面が雨で流れて土師器が露出したので発見できた。

出土遺物（第38図、図版19-1）209~230はヘラ切り底の土師器小皿。231は下層出土の糸切り底の土師器小皿。他の土師器に比べて細かく割れている。232~236はヘラ切り底の土師器坏。232・233は他に比べて細かく割れている。236は糸切り底の土師器坏。12世紀中頃。

#### 2. ピット

調査区内からは柱穴が複数確認されたが、建物としての明確な並びは認識できなかった。出土遺物の時期は、概ね13世紀中頃~後半、14世紀代、16世紀前半の3時期に分かれる。

出土遺物（第39図）237（図版19-2）はSP077（C-1区）出土の糸切り底の土師器小皿で、底内面に判読不明の墨書きが残る。13世紀中頃。238はSP075（C-1区）出土の糸切り底の土師器小皿で、灯明皿として利用している。13世紀後半。239はSP078（C-1区）出土の龍泉窯系青磁皿。14世紀後半か。240・241はSP012（E-3区）出土。240は白磁碗V-4類（D期：12世紀中頃~後半）。241は糸切り底の土師器小皿で、底部は縮小化し、板状压痕がない。14世紀。242はSP055（D-3区）出土の龍泉窯系青磁碗高台部を瓦玉に再加工している。16世紀前半か。

#### 3. 土坑

土坑の形状については、残りも悪く、第I区のような不定形土坑、方形土坑・碟敷土坑、円形・梢円形土坑といった区別は明確でなかった。出土遺物の時期は、16世紀代を中心とする。第I区の土坑が、概ね12世紀後半~14世紀代、17世紀代に分かれることから、間を埋める時期に相当する。

**SK034** (第40図、図版14-3) D-4区。幅81cm、深さ22cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂。SK033に切られる。出土遺物（第44図）249は瓦質の火鉢。

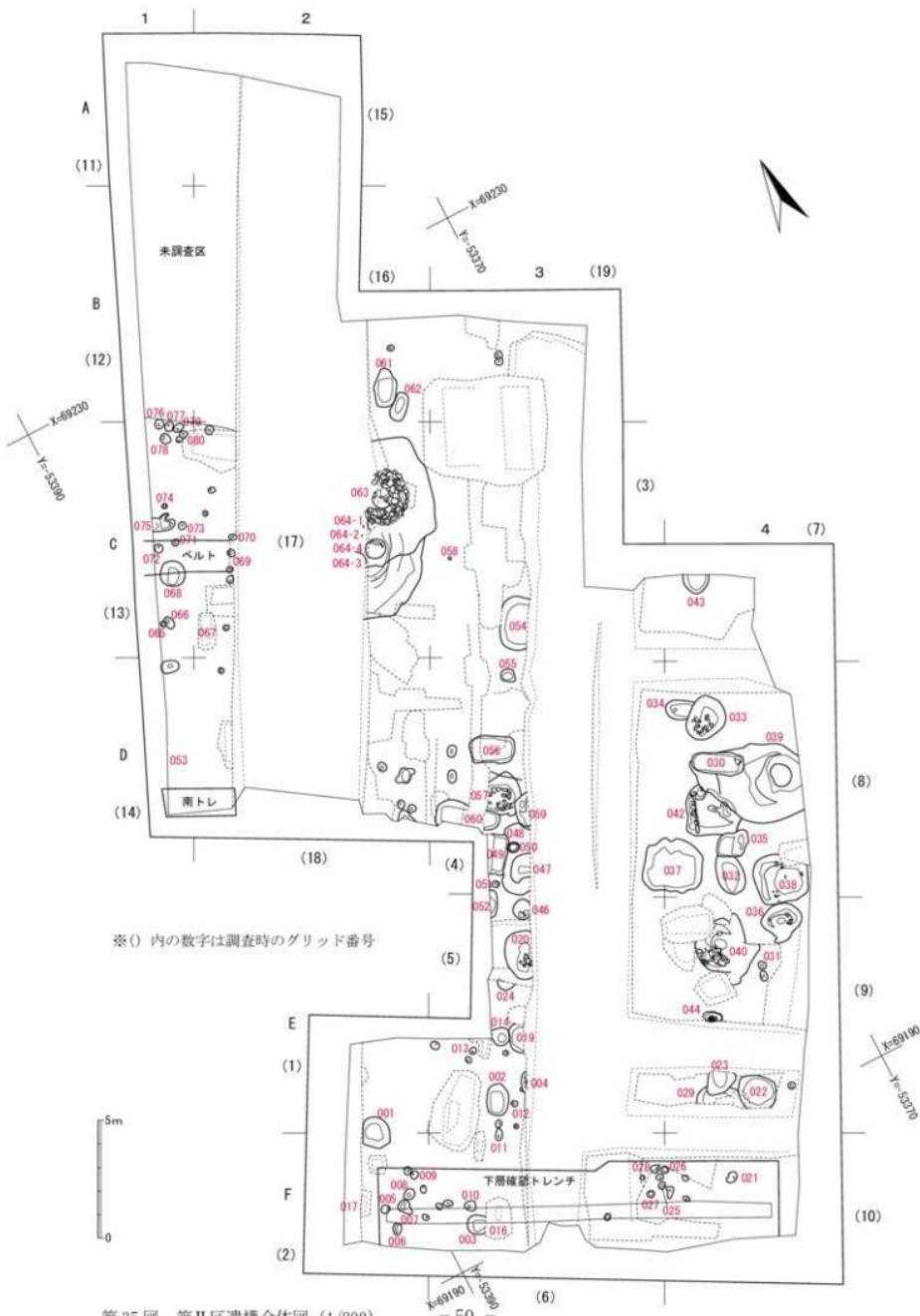
**SK033** (第40図、図版14-4) D-4区。長さ189cm、幅155cm、深さ51cmを測る。埋土は黄褐色砂ブロック含む暗オリーブ褐色粘質砂。礫・動物骨を含む。出土遺物（第44図）248は青花の鉢。

**SK030** (第40図、図版14-5) D-4区。長さ220cm、幅97cm、深さ16cmを測る。床にオリーブ褐色2.5Y4/4粘土を貼る。東側の扁平碟は上面のみが弱く被熱している。SE039を切る。

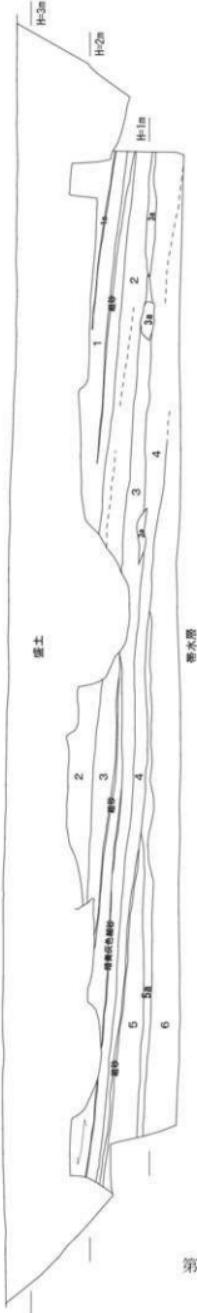
出土遺物（第44図）247は瓦玉。出土遺物からの時期比定は困難だが、箱崎遺跡70・72次調査（1342・1344集）で確認された灰白色粘土を貼った土坑は15世紀以降の中世期と想定されている。

**SK042** (第40図、図版14-6~8) D-4区。長さ213cm、深さ35cmを測る。西壁に角碟が並ぶ。埋土には炭層が形成される。SE039に切られるが、出土遺物はSE039よりも新しく、整合しない。

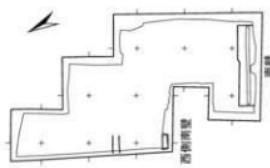
出土遺物（第44・50図）243（図版19-3）は龍泉窯系青磁碗。15世紀中頃。246は朝鮮王朝の白



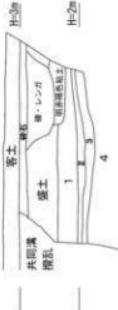
第35図 第II区遺構全体図 (1/200)



第II区隔壁土層  
1. ない、黄褐色 10YR5/4 細砂  
2. 細砂  
3. 黄褐、明黄褐色、細～粗砂互層 3a 棕色 10YR4/4 粗砂。鉄分沈量  
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 ～明黃褐色 10Y6/6、細～粗砂互層。3層より中・粗砂多く、凹凸・波状を呈す  
5. 細～粗砂互層 5a 鉄分沈量粗砂。遺物含 L。  
6. 粗砂

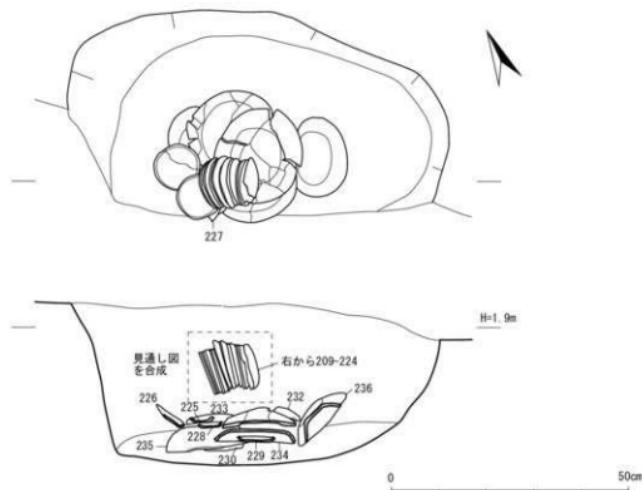


第II区西側隔壁土層  
1. 茶オリーブ褐色 2.5Y3/3 粗質砂。径 1cm 砕少なく含 L  
2. 褐色 10YR4/4 細～中砂。径 1cm 砕少ない。  
3. 茶褐色粘土砂が層状・ブロック状に混ざる  
4. 粗砂

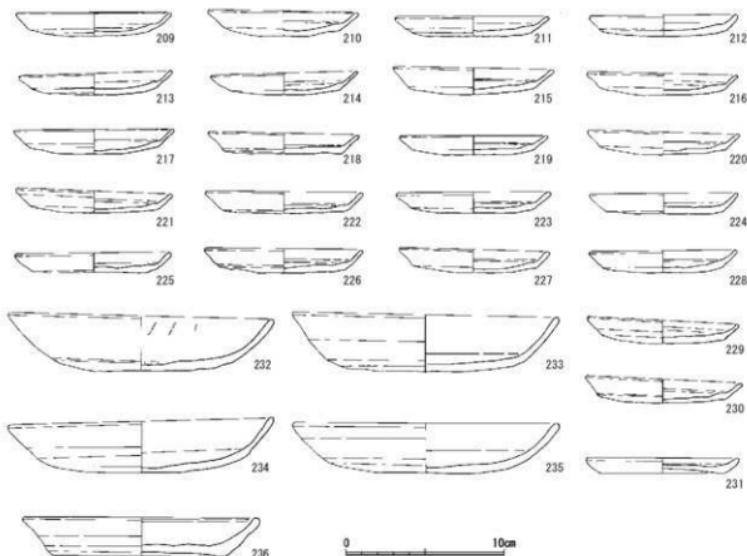


0 2m

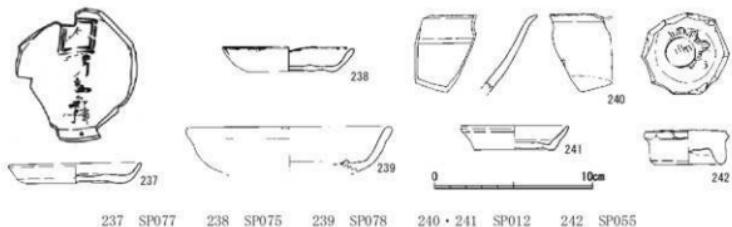
第36図 第II区壁面土層実測図 (1/80)



第37図 SX044 実測図 (1/10)



第38図 SX044出土土器実測図 (1/3)



第39図 SP出土土器実測図 (1/3)

磁皿。見込みと疊付に目跡が付く。15世紀後半～16世紀。244・245は糸切り底の土師器小皿。15世紀後半。297・298は滑石製石錘。299は砂岩の石球。他にイネ、オオムギ、コムギの炭化果実が約200点、カレイ科椎骨、クロダイ属頭骨片、硬骨魚綱（被熱）などが出土した。

**SK037** (第40図、図版15-1) D-4区。長さ250cm、幅211cm、深さ45cmを測る。埋土は径1cm炭、黄褐色砂を含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂。底面は凹凸をなす。埋土の炭を含む泥質層を洗浄したが何も検出できなかった。

**SK035** (第40図、図版15-2) D-4区。長さ126cm、幅112cm、深さ39cmを測る。埋土は黒褐色10YR2/3粘質砂で、下層は黄褐色砂を互層状に含む。SK042・032を切る。

**SK032** (第40図、図版15-3) D-4区。幅112cm、深さ28cmを測る。埋土は径1cm炭を含む黒褐色10YR2/2-2/3粘質砂。

**SK038** (第41図、図版15-4) D-4区。長さ230cm、幅204cm、深さ67cmを測る。埋土は泥質砂で、被熱・破壊した小皿を含む。

出土遺物 (第44・50図) 250・251は糸切り・板状圧痕底の土師器小皿。251は灯明皿利用される。252は糸切り底の土師器皿。253は土師質土器の釜。16世紀初頭。254は弥生土器の器台。後期末か。302・303は滑石製石錘。他にマダイ、ハタ科？、硬骨魚綱（被熱）、ヘビ類、カエル類、イタボガキ科？片が出土した。埋土から花粉はほとんど検出されず、イネの植物珪酸体が比較的多く検出された。

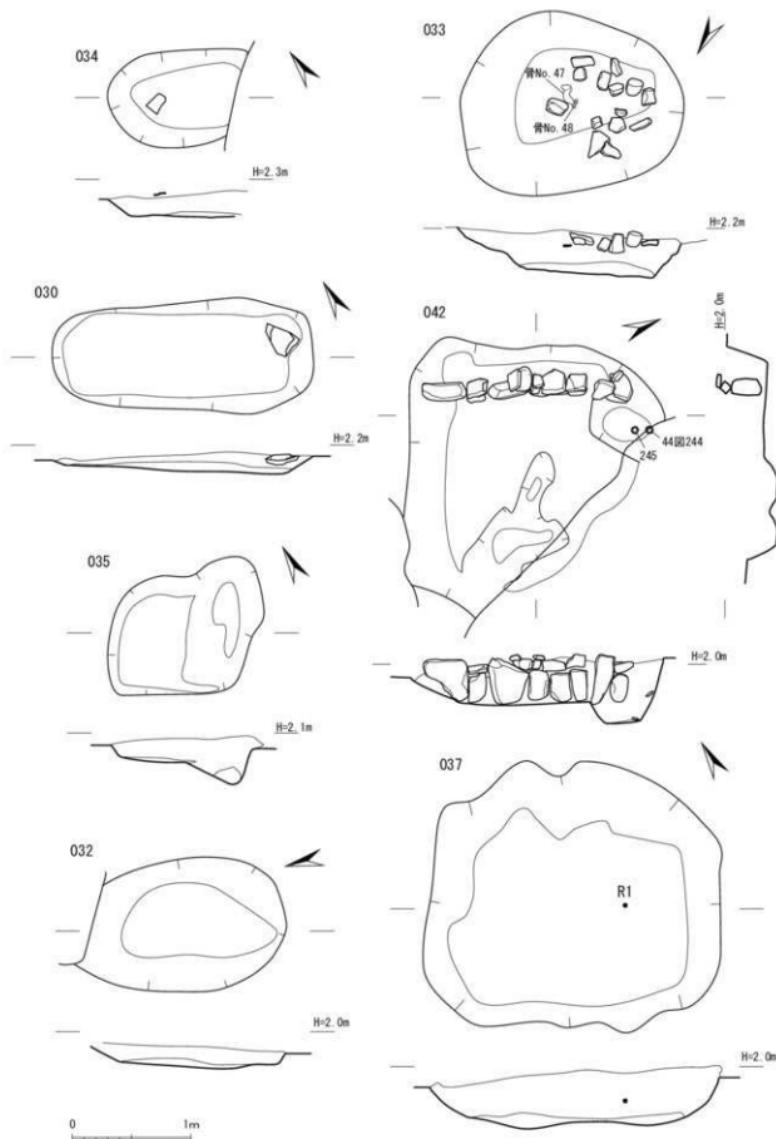
**SK036** (第41図、図版15-5) E-4区。長さ174cm、幅162cm、深さ70cmを測る。埋土は径5mm炭粒を少なく含む暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質砂で骨や扁平礫（被熱なし）を含む。

出土遺物 (第44・50図) 255は糸切り底の土師器皿。256は土師質の鍋。薄手で内面を丁寧なハケメで仕上げる。16世紀初頭。他にヒト脛骨（男性か）、鳥類骨片などが出土した。

**SK040** (第41図、図版15-6) E-4区。幅272cm、深さ92cmを測る。埋土は暗オリーブ褐色2.5Y3/3で、上層は径1cm炭を含む砂質土、下層は粘質土。

出土遺物 (第44・50図) 257は景德鎮窯系青花皿。15世紀後半。258は高麗象嵌青磁碗。14世紀後半～15世紀。259は朝鮮王朝の雜釉陶器皿。疊付に目跡が付く。15世紀後半。261は瓦質の鍋。口縁部上端を内側に短く折り曲げており、防長型足鍋と考えられる。15世紀末～16世紀初頭。262は土師質の茶釜。15世紀代か。260は土師質の瓦玉。305・306は滑石製石錘。下層土を洗浄したが、小さい炭化材の他は何も検出できなかった。また、埋土から花粉はほとんど検出されず、イネの植物珪酸体が比較的多く検出された。

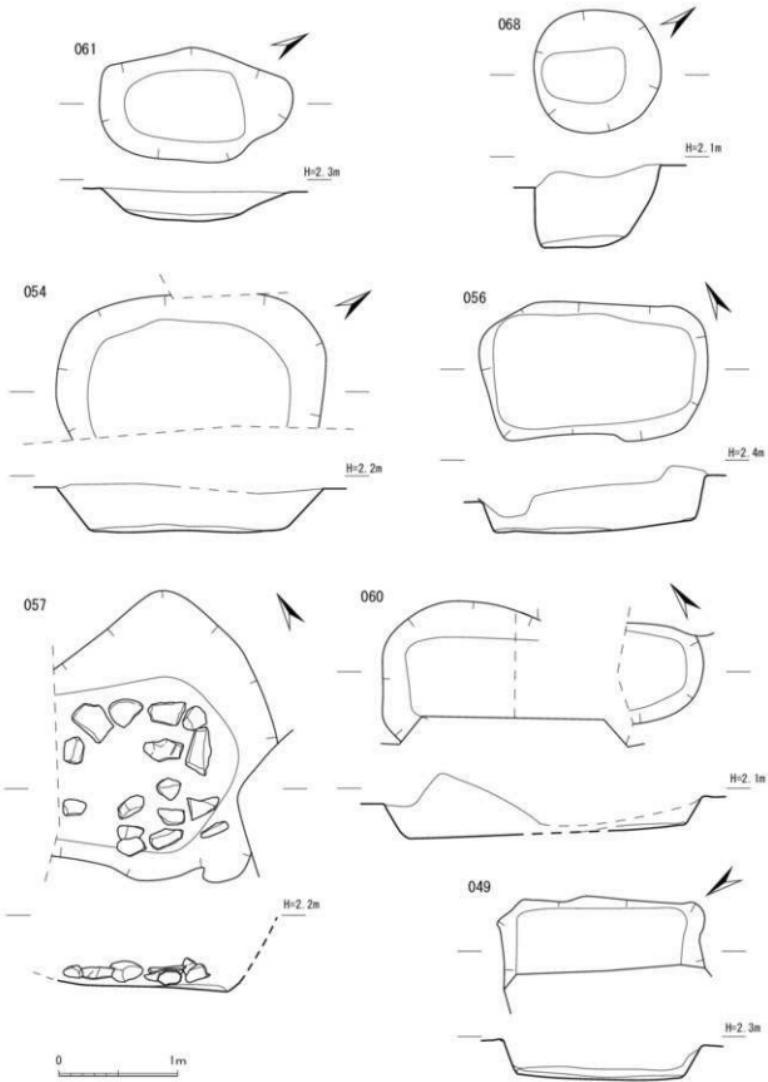
**SK022** (第41図、図版15-7) E-4区。長さ174cm、深さ34cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質砂で、



第40図 SK034・033・030・042・035・032・037 実測図 (1/40)



第41図 SK038・036・040・022・023 実測図 (1/40)



第42図 SK061・068・054・056・057・060・049 実測図 (1/40)

暗オリーブ褐色粘質砂と黄褐色砂を層状に含む。

**SK023** (第41図) E-4区。幅115cm、深さ25cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質砂で、暗オリーブ褐色粘質砂と黄褐色砂を層状に含む。

**SK061** (第42図) B-2区。長さ163cm、幅96cm、深さ23cmを測る。落ち込み状。

**SK068** (第42図) C-1区。長さ106cm、幅103cm、深さ69cmを測る。擾乱か。

**SK054** (第42図、図版15-8) C-3区。長さ226cm、深さ39cmを測る。

**SK056** (第42図、図版16-1) D-3区。長さ193cm、幅117cm、深さ59cmを測る。埋土はにぶい黄褐色10YR4/3～褐色4/4粘質砂。出土遺物 (第50図) 310は滑石製石錘。

**SK057** (第42図、図版16-2) D-3区。幅181cm、深さ63cmを測る。底に礫を敷く。

出土遺物 (第45・50図) 264は青花小碗。265は丸瓦。凹面に布目痕、凸面にタタキ痕がある。313は滑石製石錘。他にサメ類椎骨 (被熱) が出土した。

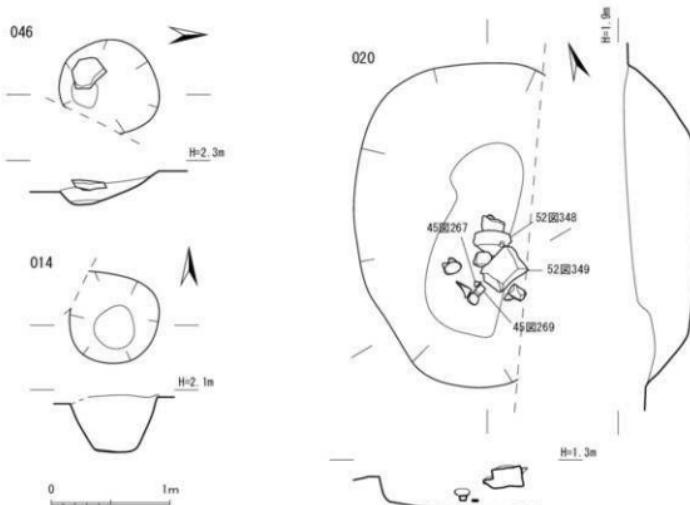
**SK060** (第42図) D-3区。長さ270cm、深さ60cmを測る。出土遺物 (第51図) 316・317は石錘。

**SK046** (第43図) E-3区。長さ86cm、深さ29cmを測る。出土遺物 (第45図) 263は邵武窯系白磁皿で、内底は環状に釉を剥ぐ。15世紀代。

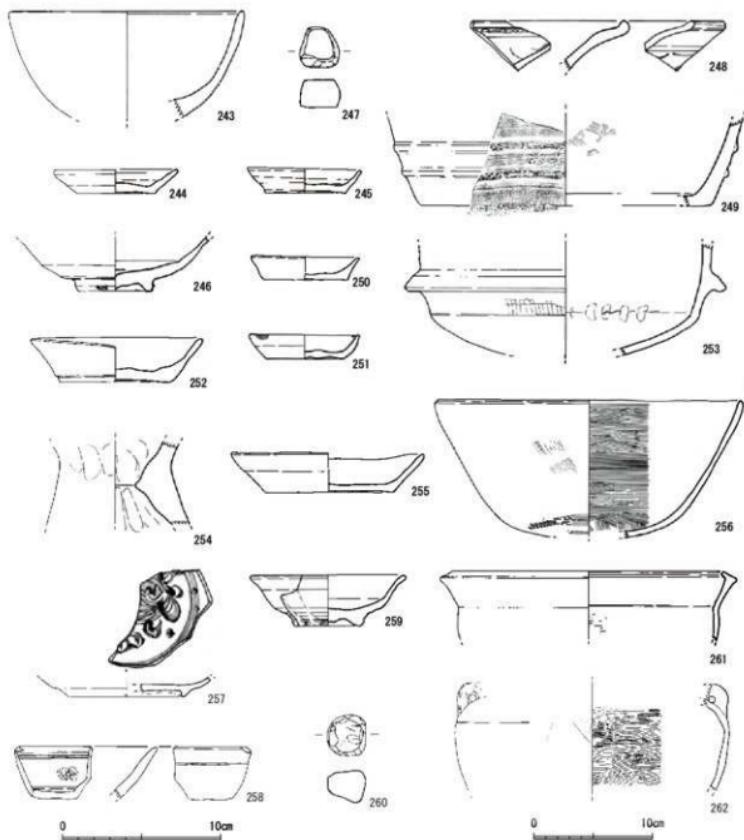
**SK014** (第43図) E-3区。長さ78cm、深さ48cmを測る。埋土下層に礫を含む。

**SK020** (第43図、図版16-3) E-3区。長さ206cm、深さ76cmを測る。

出土遺物 (第45・51・52図) 267は朝鮮産灰釉陶器碗。豊付は釉剥ぎ。16世紀。268 (図版19-4) は土師器の脚付坏。坏部は糸切り底。269は土質質の鍋。16世紀初頭。266は瓦質土器を再加工した円盤形土製品。320は花崗岩の磨石。321は滑石製石錘。348は石臼。白面が挽き手の挿入孔に達するまで磨り減る。349は不明の加工石造品。全体に被熱・暗色化している。他に鹿角片が出土した。



第43図 SK046・020・014 実測図 (1/40)



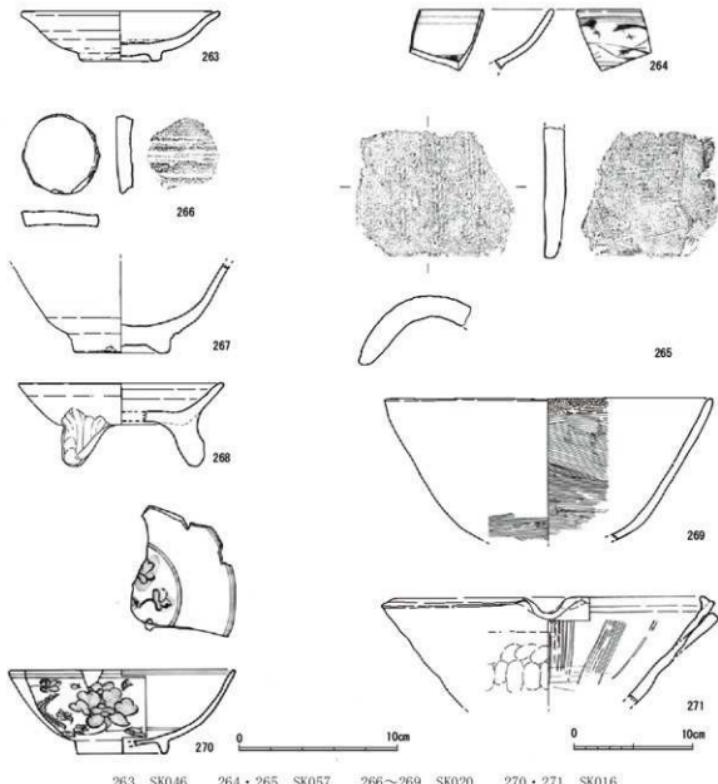
第44図 SK出土土器実測図 1 (249・253・256・261・262は1/4、他は1/3)

**SK019** (第35図、図版16-4) E-3区。深さ28cmを測る。埋土は黄褐色砂ブロック含むオリーブ褐色2.5Y4/3粘質砂。

**SK002** (第35図、図版16-5) E-3区。長さ135cm、幅93cm、深さ36cmを測る。

**SK016** (第35図) F-3区。長さ178cm、幅113cm、深さ53cmを測る。搅乱。

出土遺物（第45図）270（図版19-5）は景德鎮窯青花碗。16世紀初頭。271は瓦質土器の擂鉢。口縁端内面に粘土帯を貼り付けて内側に屈曲させる。



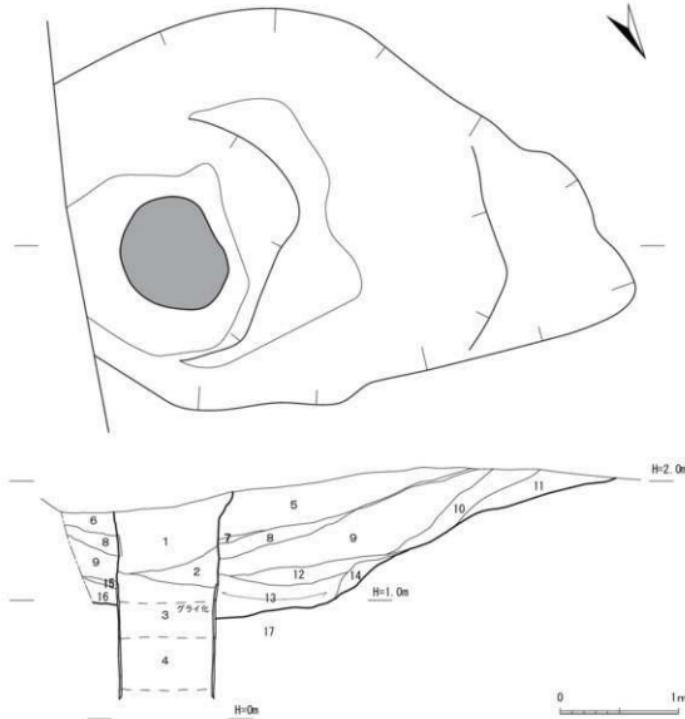
第45図 SK出土器実測図2 (265・269・271は1/4、他は1/3)

#### 4. 井戸

**SE039** (第46図、図版16-6、17-1) D-4区。掘方は幅332cm、井戸枠はスギ板目材の結桶で径80cmを測る。標高1.15～0.15mに設置される。井筒内埋土は、上層がブロック堆積、下層が互層堆積で、下層土を洗浄したところ、植物遺体は確認できなかったが、動物骨を少量採取した。

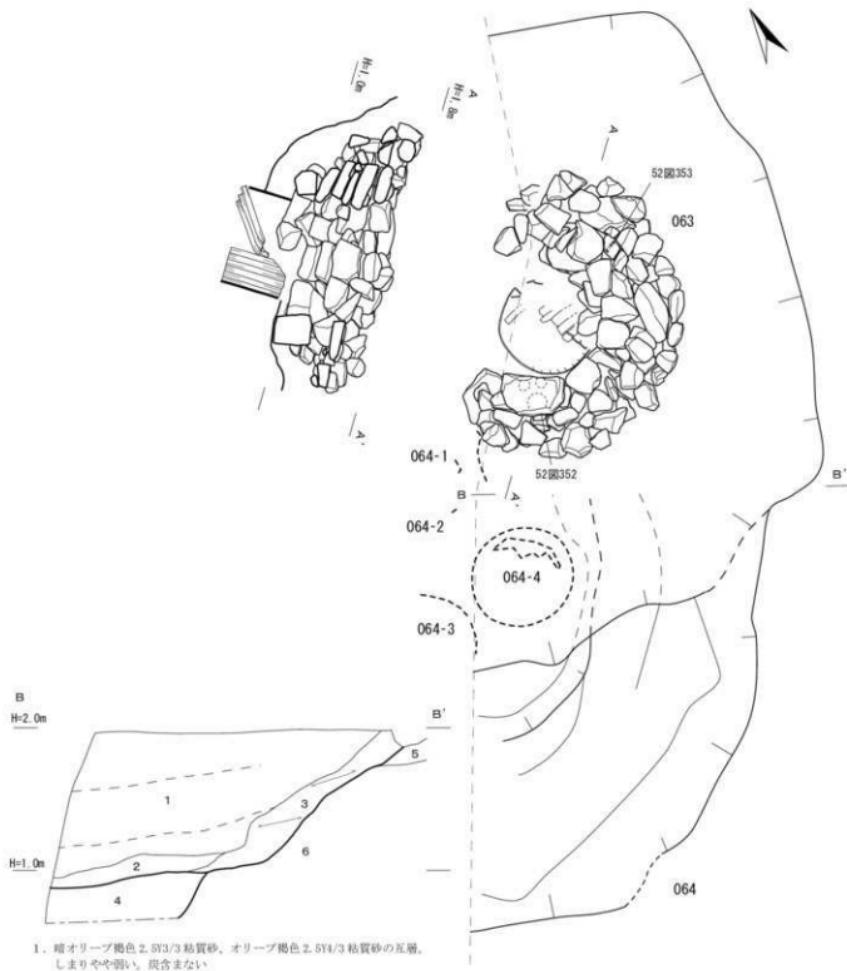
出土遺物 (第48・51図) 272は井筒下層出土の龍泉窯系青磁壺III-3類 (F期: 13世紀中頃～14世紀初頭)。273は掘方出土の広東産白磁碗。11世紀後半～12世紀前半。325～327は掘方出土の大小の滑石製石錘。他に井筒内からカエル類、アジ科、フグ科、貝類片が出土した。

**SE063** (第47図、図版16-7、17-2) C-2区。掘方は隅丸方形をなし、幅497cm、井戸枠はスギ板目材の結桶で径84cmを測り、上部は石組で幅116cmを測る。石組は形状の揃わない礫をやや粗く積んでおり、下層の4、5段、高さ80cmほどが残っている。



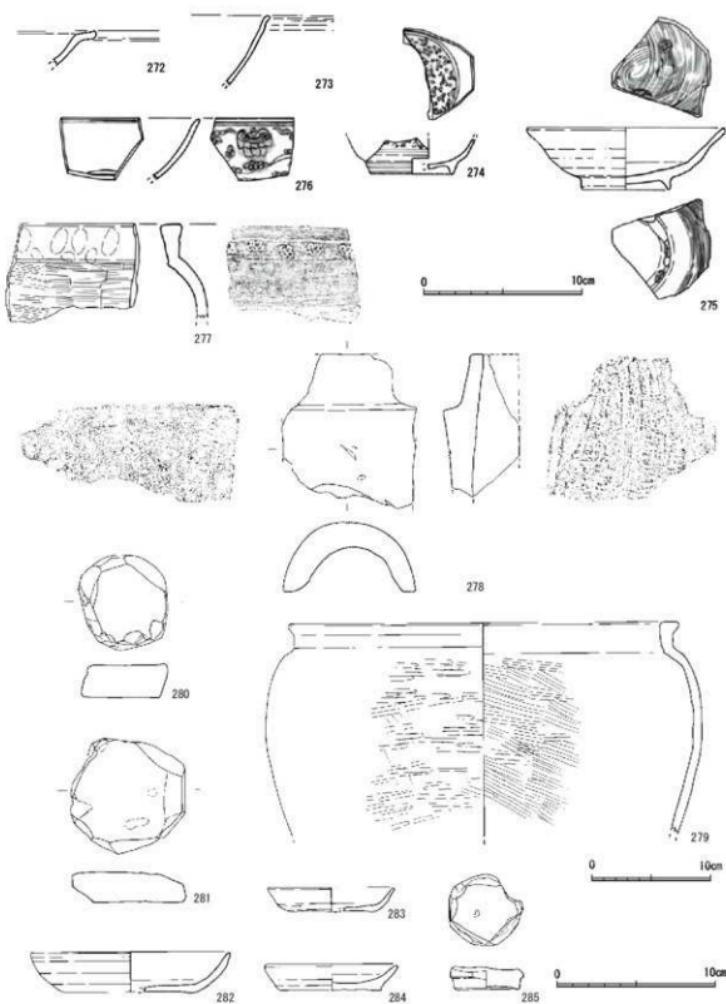
1. 暗褐色 10YR3/3 粘質砂。径 1cm 炭やや多い。黄褐色、オリーブ褐色粘土ブロック含む。ブロック堆積
2. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂。黄褐色砂と互層状堆積（厚さ 1～5cm）。径 1cm 炭多い。
3. 黒褐色 2.5Y3/2 粘質砂。黄褐色砂と互層（厚さ 1～5cm）。径 1cm 炭少ない。下層はグライト化する。
4. 灰色粘質砂
5. 暗褐色 10YR3/4 粘質砂。径 2 cm 炭やや多い。黄褐色砂、オリーブ褐色粘土ブロック含む
6. 暗褐色 10YR4/4 砂。径 1cm 炭少ない
7. 黄褐色砂
8. オリーブ褐色粘質砂。炭・粘土含む
9. 暗褐色 10YR3/4 粘質砂。径 1cm 炭含む。5 層と同質でやや砂質強い
10. 黄褐色細・中砂。暗褐色粘質砂ブロック含む
11. 暗褐色 10YR3/4 粘質砂。砂質
12. 暗褐色 10YR3/4 粘質砂。砂質。小ブロック状
13. 暗褐色 10YR3/3 粘質砂。黄褐色砂と互層（厚さ 2cm）。木質含む。
14. 細・中砂。暗褐色粘土含む
15. 黄褐色砂
16. にぶい黄褐色 10YR4/3 粘質砂
17. 暗褐色 10YR4/6 細～粗砂

第 46 図 SE039 実測図 (1/40)



1. 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 粘質砂、オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質砂の互層。  
しまりやや弱い、炭合まない。
2. オリーブ褐色 2.5Y4/4 細・中砂、暗オリーブ褐色粘質砂の互層
3. オリーブ褐色 2.5Y4/3 粘質砂  
※1～3層 : SE063 脳力
4. オリーブ褐色 2.5Y4/4 細・中砂、暗オリーブ褐色粘質砂の混土ブロック  
※SE064 脳力
5. 黄褐色 2.5Y5/4 細砂
6. 細～中砂互層

第47図 SE063・064 実測図 (1/40)



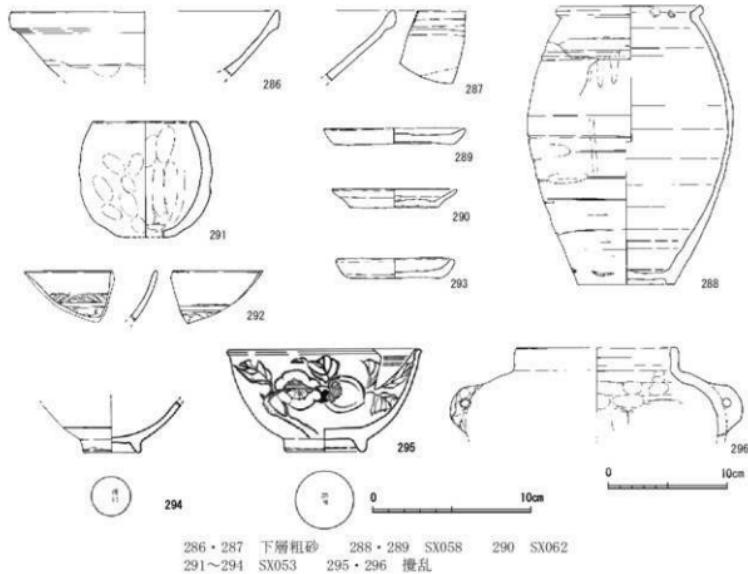
272・273 SE039 274~281 SE063 282 SE064-3 283~285 SE064-4

第48図 SE出土土器実測図 (277~279は1/4、他は1/3)

出土遺物（第48図） 274（図版19-6）は掘方出土の景德鎮窯系青花連子碗。16世紀前半。275は石組出土の粉青沙器碗。高台に幅1cm程度の切り込みを入れる。16世紀。276（図版19-7）は井筒出土の景德鎮窯系青花碗。16世紀後半。277・279は井筒出土の瓦質の風炉。278は井筒出土の丸瓦。280・281は井筒出土の平瓦片を利用した瓦玉。280は破面である側面を研磨している。336・337は石組出土の蛇紋岩質、滑石製の石錘。352・353・354は石組出土の板磚。352には阿弥陀三尊種子が彫られる。353には「白？一金」の文字、354には不明漢字二字が彫られる。350・351は井筒出土の石塔片。350は五輪塔の火輪で、1辺24.5cm、高さ12.5cmを測る。全体に細かい鑿痕が残り、平坦に成形されている。肩部が被熱、暗色化する。351は宝篋印塔の笠石で、復元最大幅は22cm以上、推定高は約14cmを測る。他に掘方と石組から螭壺破片が出土している。

**SE064**（第47図、図版16-8） C-2区。SE063を掘り下げる過程で別の掘り込みとして認識され、帶水層に至る標高0.6m付近で、戸門柱を少なくとも4基確認した。064-1はスギ板目材の結桶で、SE063に切られており、詳細は不明である。064-2・3は、スギ板目材の結桶で、共同構造乱に切られており、詳細は不明である。064-4は、スギ板目材の結桶で、径82～88cmを測る。4基の戸門柱の中では最も残りがよい。

出土遺物（第48・51図） 343・344は064-1・2出土の土錘。282は064-3出土の糸切り底の土師器坏。13世紀後半。283～285、345～347は、064-4出土。283・284は糸切り底の土師器小皿。13世紀後半。285は天目碗高台部を使った瓦玉。345・346は土錘。347は砂岩の石球。



第49図 SX・包含層・攪乱出土器実測図（288・296は1/4、他は1/3）

## 5. 包含層ほか出土遺物（第49図）

下層粗砂出土遺物 286はC-3区北擾乱下粗砂（H=0.65m）出土、287はD-1・2区南トレンチ下層出土で、いずれも白磁碗IV類（C期：11世紀後半～12世紀前半）。

**SX058** (C-3区。地山粗砂) 出土遺物 288(図版19-8)は陶器無耳壺。口縁内面、底外面に目跡がつく。13世紀。289は糸切り底の土師器小皿。13世紀前半。

**SX062** (B-2区。落ち込み状の堆積層) 出土遺物 290は糸切り底の土師器小皿。14世紀。

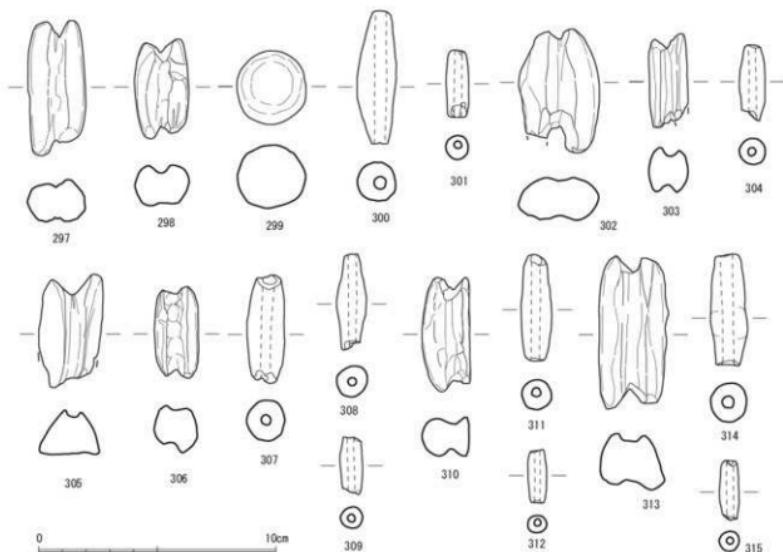
**SX053** (C・D-1・2区。拡張した調査区の堆積層) 出土遺物 291はベルト3層出土の蛸壺。292は粉青沙器の碗。高麗象嵌青磁に似る。14世紀末～15世紀。293はベルト1・2層出土の糸切り底の土師器小皿。14世紀代。294は上面出土の肥前系染付小碗で、高台内に「波39」の銘がある。統制軍食器（昭和16～21年）。他に南トレンチから蛸壺破片が出土している。

**拡張区擾乱出土遺物** 295(図版19-9)は磁器碗で、高台内に「有8」の銘がある。統制軍食器（昭和16～21年）。296は土師質の茶釜で、内外面をナデで仕上げる。16～17世紀代か。

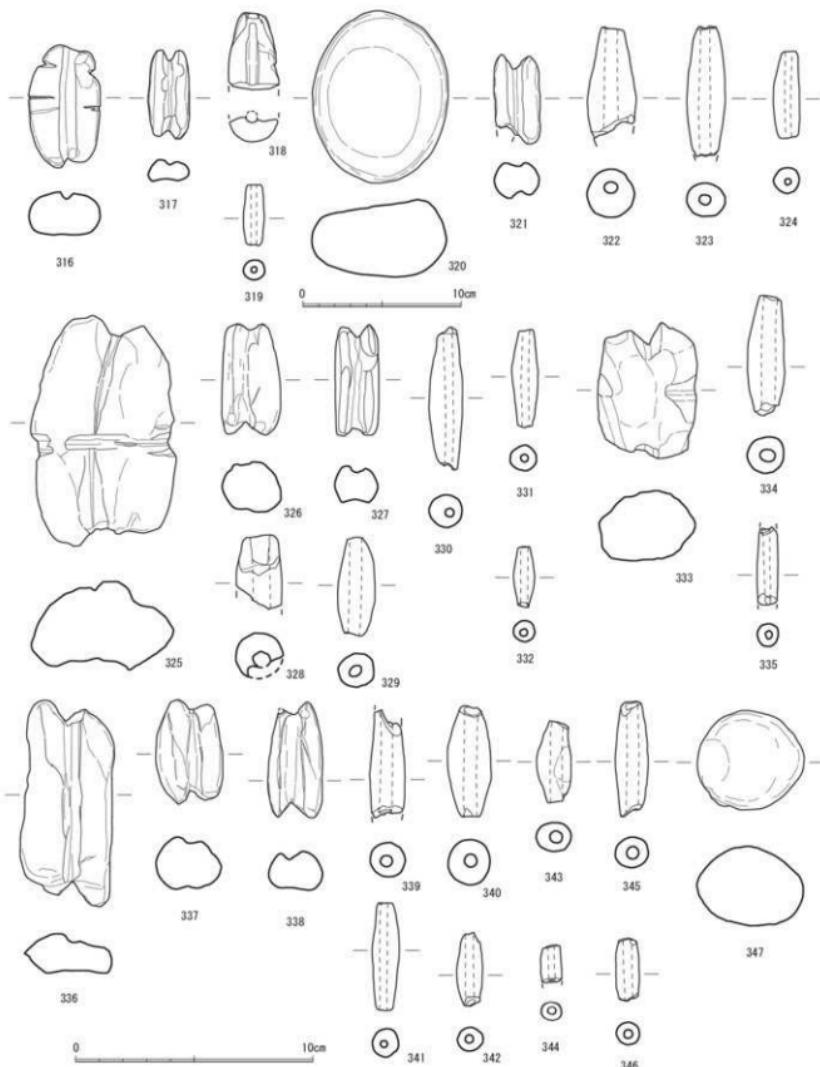
## 6. 小結

方形土坑の軸や遺構の並びから、第II区中世期の地割は、現況地割（調査区区割）からわずかに西に振れていたと想定され、第I区中世期の地割とはほぼ同じと考えられる。

調査区南壁土層（第36図）を見ると、地山の砂層が東から西へ傾斜しており、調査区の東側は砂丘列の高い方で、削平の影響が著しいが、西側拡張区（A～D-1・2区）は低い方で、削平の影響が比



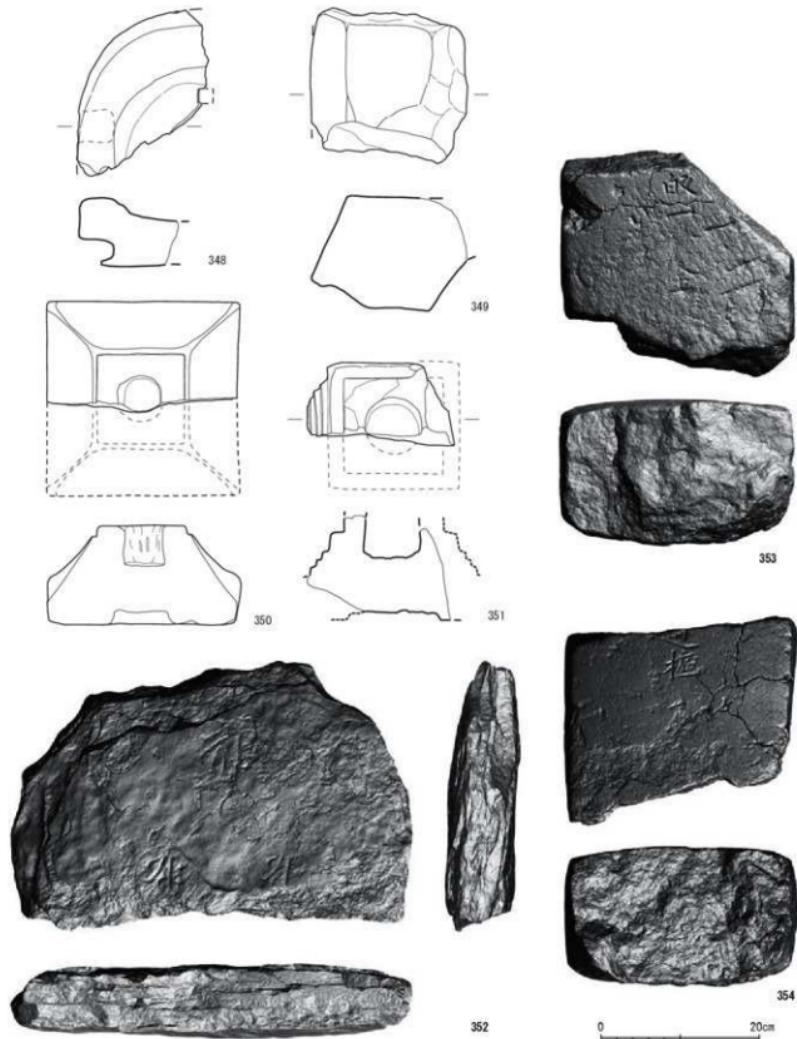
第50図 SK出土石製品・土錐実測図(1/2)



316 ~ 319 SK060    320 ~ 324 SK020

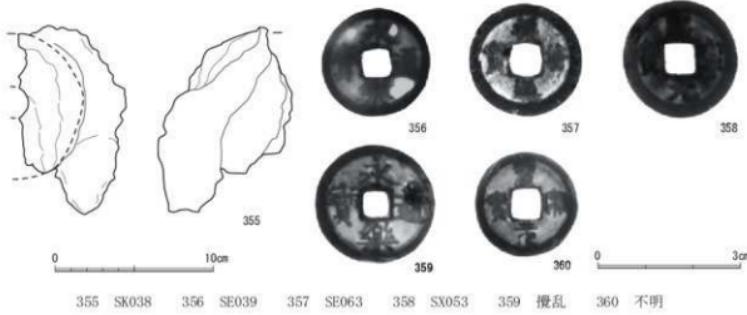
325 ~ 332 SE039 扇方    333 ~ 335 SE039 井筒    336 ~ 342 SE063    343 ~ 347 SE064

第51図 SK・SE出土石製品・土錐実測図 (320は1/3、他は1/2)



348・349 SK020 350・351 SE063 井筒 352～354 SE063 石組

第52図 SK020、SE063出土石製品実測図および三次元モデル画像（1/6）



第53図 第II区出土金属関係遺物実測図およびX線画像 (355は1/3、他は1/1)

較の小さかったため、遺物包含層（SX053）が残っていたと考えられる。

地山の粗砂からは、11世紀後半～12世紀前半の遺物が確認され（第49図286・287）、第II区の中で古い時期の構造として、SX044（12世紀中頃）、SX058（13世紀前半）、SE064（13世紀後半）、SE039（13世紀中頃～14世紀初頭）などが構築される。14世紀後半から15世紀前半は空白期となり、各種土坑やSE063は15世紀後半～16世紀代に構築される。

第7表(1) 第II区出土土器・土製品

編號	多号	遺構・層位	種類	器種	残存	法量(cm)	胎土	施色	色調	伝番
38	209	SX044 R1	土師器	小皿	9/10	口径9.5cm、器高1.45	微細な白色粒含む	良好	外面：にぶい黄緑、内面：橙～にぶい黄緑	2
38	210	SX044 R2	土師器	小皿	完形	口径9.6cm、器高1.7	微細な白・黒色粒含む	良好	橙	3
38	211	SX044 R3	土師器	小皿	完形	口径9.7cm、器高1.25	微細な白・黒色粒含む	良好	外面：にぶい黄緑～灰黄緑、内面：橙～にぶい黄緑	4
38	212	SX044 R4	土師器	小皿	完形	口径9.4cm、器高1.35	微細な赤・黑色粒含む	良好	橙～にぶい黄緑	5
38	213	SX044 R5	土師器	小皿	完形	口径9.9cm、器高1.55	微細な白・黒色粒、露食含む	良好	橙～にぶい黄緑	6
38	214	SX044 R6	土師器	小皿	完形	口径9.5cm、器高1.5	微細な白色粒、露食含む	良好	橙～にぶい黄緑	7
38	215	SX044 R7	土師器	小皿	完形	口径10.0cm、器高1.8	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄緑	8
38	216	SX044 R8	土師器	小皿	9/10	口径9.5cm、器高1.5	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄緑	9
38	217	SX044 R9	土師器	小皿	完形	口径10.3cm、器高1.6	微細な黒色粒含む	良好	外表面：橙、内面：橙～にぶい黄緑	10
38	218	SX044 R10	土師器	小皿	完形	口径9.5cm、器高1.4	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄緑	11
38	219	SX044 R11	土師器	小皿	完形	口径9.4cm、器高1.2	微細な赤色粒含む	良好	橙	12
38	220	SX044 R12	土師器	小皿	完形	口径9.6cm、器高1.55	径2mm以下赤色粒含む	良好	外表面：橙、内面：橙～にぶい黄緑	13
38	221	SX044 R13	土師器	小皿	完形	口径9.6cm、器高1.55	微細な赤色粒含む	良好	橙	14
38	222	SX044 R14	土師器	小皿	完形	口径9.5cm、器高1.4	微細な白色粒含む	良好	橙～にぶい黄緑	15
38	223	SX044 R15	土師器	小皿	完形	口径9.8cm、器高1.35	微細な白・赤色粒含む	良好	外表面：橙～にぶい黄緑、内面：橙	16
38	224	SX044 R16	土師器	小皿	完形	口径9.4cm、器高1.3	微細な白色粒含む	良好	外表面：橙～にぶい黄緑、内面：橙	17
38	225	SX044 R17	土師器	小皿	完形	口径9.9cm、器高1.3	微細な黒色粒含む	良好	外表面：橙～にぶい黄緑、内面：橙	18
38	226	SX044 R18	土師器	小皿	完形	口径10.0cm、器高1.55	微細な白・黒色粒含む	良好	橙	19
38	227	SX044 R19	土師器	小皿	9/10	口径9.5cm、器高1.55	微細な白色粒含む	良好	橙	20
38	228	SX044 R20	土師器	小皿	9/10	口径9.4cm、器高1.45	微細な黒色粒含む	良好	橙	21
38	229	SX044 R26	土師器	小皿	9/10	口径9.6cm、器高1.7	微細な赤・黒色粒含む	良好	橙	27
38	230	SX044 R27	土師器	小皿	9/10	口径9.9cm、器高1.7	微細な白・赤色粒含む	良好	橙	28
38	231	SX044 下層	土師器	小皿	9/10	口径9.6cm、器高0.95	径3mm以下白色粒含む	良好	外面：にぶい黄緑、内面：浅黄緑～にぶい黄緑	29
38	232	SX044 R21	土師器	坪	完形	口径16.75cm、器高3.65	微細な赤色粒含む	良好	橙	22
38	233	SX044 R22	土師器	坪	完形	口径16.8cm、器高3.75	微細な黒色粒含む	良好	外表面：橙、内面：橙～浅黄緑	23
38	234	SX044 R23	土師器	坪	完形	口径16.75cm、器高3.45	微細な白・赤色粒含む	良好	外表面：橙～にぶい黄緑、内面：橙	24
38	235	SX044 R24	土師器	坪	完形	口径16.8cm、器高3.2cm	径2mm以下白色粒、微細な黒・赤色粒含む	良好	外表面：橙～にぶい黄緑、内面：にぶい黄緑	25
38	236	SX044 R25	土師器	坪	完形	口径15cm、器高2.45cm	径2mm以下白色粒含む	良好	外表面：にぶい黄緑、内面：橙～にぶい黄緑	26
39	237	SP077	土師器	小皿	7/10	口径8.4cm、器高1.3	径1mm以下白・黒・灰色粒含む	良好	にぶい黄緑	1
39	238	SP078	土師器	完形	口径8.3cm、器高1.6	径1mm以下白・黒・赤色粒含む	良好	外表面：にぶい黄緑、内面：にぶい黄緑	39	
39	239	SP078	青磁	皿	1/8	復元口径13cm	微細な白色粒含む	良好	胎土：明灰白、釉：明ナーブル灰、光沢	40
39	240	SP012	白磁	碗	破片	-	微細な白色粒含む	良好	胎土：灰黄、釉：灰オーラー、透明、光沢	37

第7表(2) 第II区出土土器・土製品

辨別番号	遺構・層位	種類	器形	残存	法量(cm)	胎土	性状	色調	反面
39 241 SP012	土師器 小皿	口径	6.8、器高1.5	3/5	径6.8cm以下石英・長石含む	良好	橙	36	
39 242 SP055	青磁 瓢(瓦玉)	底部	高台径4.9、深5.5		微細な白色粒含む	良好	胎土: 明灰白。釉: オリーブ灰、光沢	38	
44 243 SK042	青磁 瓢	1/8	復元口径14.8		微細な砂粒含む	良好	胎土: 土灰、釉: 純灰、不透明	62	
44 244 SK042 R1	土師器 小皿	完形	口径7.8、器高1.5		径2mm以下白色粒少ない。精良	良好	橙	59	
44 245 SK042 R2	土師器 小皿	4/5	口径7.2、器高1.6		径2mm以下白色粒少ない。精良	良好	胎土～にぶい赤褐色。内面： 外面：明赤褐色～にぶい赤褐色。内面：	60	
44 246 SK042	白磁 皿	1/3	高台径4.9		径2mm以下白色粒含む	良好	胎土: 土灰、釉: 灰白、透明	61	
44 247 SK030	土製品 瓦玉	完形	径2.5、厚さ1.7		径1mm以下白色粒含む	良好	暗灰	43	
44 248 SK033	青花 瓢	破片	-		-	精良	胎土: 灰白、釉: 灰白、半透明	44	
44 249 SK034	瓦質 瓢	底部	復元底径24.6		径1mm以下白色粒含む	良好	外側：暗褐色～にぶい黒褐色。内面： 黄褐色～にぶい赤褐色。	45	
44 250 SK034 R1	土師器 小皿	9/10	口径6.8、器高1.5		径1mm以下白色粒含む	良好	胎土～にぶい赤褐色。内面： 黄褐色～にぶい黒褐色。	48	
44 251 SK038	土師器 小皿	7/10	口径7.3、器高1.5		径1mm以下白色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	49	
44 252 SK038 R3	土師器 釜	3/5	復元口径10.8、器高2.8		径2mm以下白英・長石、赤色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	52	
44 253 SK038	土師器 釜	1/2	復元口径27.0		径1mm以下白色粒含む	良好	外側：暗褐色～黒、内面： 暗褐色	53	
44 254 SK038	土師器 器台	1/4	胴部最大径7		径3mm以下石英・長石多い	良好	外側：にぶい黄褐色、内面： 暗褐色	51	
44 255 SK036	土師器 皿	1/2	復元口径12.1、器高2.5		径3mm以下石英・長石、赤色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	47	
44 256 SK036 R2	土師器 瓢	1/4	復元口径26		径3mm以下石英・長石含む	良好	灰黃～黒(スヌ)	46	
44 257 SK040	慶應復青花	皿	復元高台径7.3		-	精良	胎土：純白、釉：透明	56	
44 258 SK040	慶應復 青磁	碗	破片		微細な砂粒含む	良好	胎土：灰白、釉：オリーブ灰、透明	54	
44 259 SK040	慶應復	陶器 皿	1/2	復元口径9.8、器高3.25	径3mm以下白色粒含む	良好	胎土：灰～黒、釉：灰白、不透明	56	
44 260 SK040	土製品 瓦玉	完形	直径4.2、厚さ2.05		径1mm以下白英・赤色粒含む	良好	胎土～にぶい黄褐色～にぶい黄褐色。	53	
44 261 SK040	慶應復	瓦質 瓢	1/10	復元口径26	径1mm以下白色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	57	
44 262 SK040	慶應復	土師器 斧釜	1/6	胴部最大径23.05	径3mm以下石英・長石やや多い、角閉石含む	良好	外側： 橙、内面：にぶい赤褐色～黒褐色。	55	
45 263 SK046	白磁 皿	1/3	復元口径12.5、器高3.1		径1mm以下砂粒含む	良好	胎土：淡黄褐色、釉：乳白、不透明	63	
45 264 SK057	下層 青花 小皿	破片	-		微細な砂粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	69	
45 265 SK057	下層 瓦	丸	1/3	厚さ9.4、直径9.15	径3mm以下石英・長石多い	良好	外側：にぶい黒褐色～黒、内面：暗褐色～黒褐色。	68	
45 266 SK020	土製品 圓形容器	完形	直径5.9、厚さ1.2		径2mm以下石英・長石含む	良好	外側： 暗褐色、内面： 暗褐色	33	
45 267 SK020 R3	陶器 瓢	1/4	高台径6		微細な白・黒色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：オリーブがかつた灰白、光沢あり	31	
45 268 SK020	土師器 斧付	1/4	復元口径8.5、器高5.2		微細な白・赤色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	32	
45 269 SK020 R2	土師器 瓢	2/3	口径21.6		径3mm以下石英・長石含む	良好	外側：灰黄褐色～黒褐色(スヌ・カグ)、内面： 暗褐色	30	
45 270 SK016	青花 瓢	1/4	復元口径14.2、器高5.3		微細な砂粒含む	良好	胎土：白、釉：透明、ガラス質	42	
45 271 SK016 + SK002	瓦質 瓢	1/6	復元口径28		径3mm以下石英・長石含む	良好	外側：灰白～黒褐色、内面： 暗褐色	41	
48 272 SK039	井筒下層 青磁	壺	破片		微細な砂粒含む	良好	胎土：灰、釉：オリーブ、半透明	75	
48 273 SK039	井筒下層	白磁 瓢	破片		-	精良	胎土：淡灰褐色、半透明	76	
48 274 SE063	飴方 青花 瓢	底部	高台径5.2		微細な白色粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	82	
48 275 SE063	石組 陶器 陶器	1/10	復元口径12.5、器高5.19		微細な白色粒含む	良好	胎土：黒褐色、釉：透明	80	
48 276 SE063	井筒 青花 瓢	破片	-		微細な黒色粒含む	良好	胎土：純白、釉：透明	81	
48 277 SE063	井筒 瓦質 瓢	破片	-		径3mm以下石英・長石、赤色粒含む	良好	外側：淡赤褐色～浅黄褐色～にぶい黄褐色、内面： 暗褐色～灰褐色。	84	
48 278 SE063	井筒 瓦	丸	1/4	幅11.3、高さ6.4	径3mm以下白英・長石、赤色粒含む	良好	灰黃～灰	79	
48 279 SE063	井筒 戸下段	瓦質 瓢	1/10	復元口径32.8	径4mm以下石英・長石含む	良好	外側：灰～黄褐色、内面： 灰	83	
48 280 SE063	井筒 瓦玉	完形	直径5.95、厚さ2.1		径1mm以下白色粒含む	良好	灰	78	
48 281 SE063	井筒 瓦玉	完形	直径7.3、厚さ1.9		径1mm以下砂粒含む	良好	胎土～褐褐色。	77	
48 282 SE064-3	土師器 瓢	1/4	復元口径12.6、器高5.25		径1mm以下白英・石英、長石含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	85	
48 283 SE064-4	土師器 小皿	7/10	口径8.0、器高1.55		径1mm以下石英・長石含む	良好	胎土～にぶい黄褐色。	87	
48 284 SE064-4	土師器 小皿	9/10	直径8.45、器高1.65		径1mm以下白英・長石、赤色粒含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	86	
48 285 SE064-4	土師器 瓢	完形	厚さ4.6、厚さ1.5		径1mm以下白色粒含む	良好	胎土：褐色、釉：褐色～黒褐色。	88	
48 296 SE053	日本復元土瓶	白磁 瓢	1/7	復元口径17	径3mm以下白色粒含む	良好	胎土：灰白、釉：灰、透明	72	
48 297 井筒下層	白磁 瓢	破片	-		微細な砂粒含む	良好	胎土：淡灰褐色、灰褐色。	74	
48 298 SX058	陶器 茶壺	1/2	復元口径15.5、器高5.25		微細な白色粒含む	良好	胎土：褐色、釉：にぶい黄褐色。	35	
48 299 SX058	土師器 小皿	4/5	口径8.9、器高1		径2mm以下白英・長石含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	34	
49 300 SX062	土師器 小皿	2/3	復元口径7.9、器高1.15		径1mm以下砂粒含む	良好	外側：青葉～にぶい黄褐色、内面： 淡黄褐色～にぶい黒褐色。	70	
49 301 SX055	南青白	茶釜	1/3	復元口径6.6、器高7.3	径3mm以下石英・長石含む	良好	胎土～にぶい黄褐色。	66	
49 302 SK037	青磁 瓢	破片	-		-	精良	胎土：灰、釉：透明	67	
49 303 SK055	南青白	小皿	2/3	復元口径7.5、器高1.2	径2mm以下石英・長石含む	良好	胎土～にぶい黄褐色。	65	
49 304 SK053	上面 柄付	小皿	底部	高台径3.7	-	精良	胎土：純白、釉：透明	64	
49 305 SK053	柄付	碗	9/10	口径12.3、器高6.5	微細な砂粒含む	良好	胎土：純白、釉：純白、透明	71	
49 306 柄付壺	土師器 茶釜	1/5	復元口径13.6		径2mm以下石英・長石やや多い	良好	外側：淡黄褐色～にぶい黒褐色、内面： 淡黄褐色～にぶい黒褐色。	73	
50 300 SK042	土製品 土瓶	完形	直径5.6、重さ12.6g		微細な白・赤色粒含む	良好	胎土～灰褐色。	P66	
50 301 SK042	土製品 土瓶	完形	直径5.8、重さ12.8g		微細な黒・赤色粒含む	良好	淡黄褐色～にぶい褐色。	P61	
50 304 SK038	土製品 土瓶	完形	直径5.8、重さ7.6g		径1mm以下白、黒色和含む	良好	胎土～にぶい黒褐色。	P56	

第7表(3) 第II区出土土器・土製品

番号	遺構・層位	種類	器形	残存	法量(cm)	始土	地成	色調	長軸	
50	307 SK040	土製品	土牌	完形	長さ4.5、径1.7、重量12.7g	径3mm以下石英、径1mm角閃石含む	良好	にぶい黄緑～灰黃褐色	P57	
50	308 SK040	土製品	土牌	完形	長さ4.5、径1.3、重量4.5g	径1mm白色砂含む	良好	褐	P58	
50	309 SK040 櫛孔器	土製品	土牌	1/2	径0.95	微細な白・赤色粒含む	良好	灰黃緑	P59	
50	311 SK056	土製品	土牌	完形	長さ3.4、径1.5、重量1.9g	微細な白・黒色砂含む	良好	灰黃褐色	P62	
50	312 SK056	土製品	土牌	完形	長さ2.0、径0.8、重量1.2g	微細な白色粒含む	良好	にぶい赤褐色	P63	
50	314 SK057 下層	土製品	土牌	完形	長さ4.7、径1.6、重量10.0g	径1mm以下石英・長石含む	良好	明赤褐色	P64	
50	315 SK057 下層	土製品	土牌	完形	長さ2.5、径0.8、重量1.6g	微細な白色粒含む	良好	橙～明赤褐色	P65	
51	318 SK060 西	土製品	土牌	1/2	径2	径1mm以下白	赤色粒含む	良好	にぶい橙	P58
51	319 SK060 西	土製品	土牌	完形	長さ2.5、径0.9、重量1.8g	微細な白・黒色砂含む	良好	にぶい赤褐色	P59	
51	322 SK020	土製品	土牌	1/2	径2	径1mm以下白	赤色粒含む	良好	浅黃	P53
51	323 SK020	土製品	土牌	完形	長さ5.5、径1.6、重量12.0g	径1mm以下黒・白色粒含む	良好	にぶい橙～褐	P54	
51	324 SK020	土製品	土牌	完形	長さ3.7、径1.1、重量4.5g	径1mm以下白・黒色砂含む	良好	にぶい黄緑	P55	
51	328 SE039 扇力北半	土製品	土牌	1/2	径2	微細な白色粒含む	良好	橙	P38	
51	329 SE039 扇力	土製品	土牌	完形	長さ4.7、径1.6、重量8.2g	微細な白色粒含む	良好	にぶい褐	P37	
51	330 SE039 扇力 北半	土製品	土牌	完形	長さ6.6、径1.4、重量11.4g	径2mm以下白色粒・微細な黒色粒含む	良好	にぶい橙	P39	
51	331 SE039 扇力北半	土製品	土牌	完形	長さ4.1、径1.1、重量4.4g	微細な砂粒含む	良好	にぶい橙	P40	
51	332 SE039 扇力北半	土製品	土牌	完形	長さ2.55、径0.9、重量1.7g	微細な砂粒含む	良好	にぶい黄緑	P41	
51	334 SE039 升開下層	土製品	土牌	完形	長さ3.6、径1.6、重量9.9g	径1mm以下白色粒含む	良好	淡黃緑～黒褐色	P42	
51	335 SE039 升開	土製品	土牌	一部欠	径0.95	微細な砂粒含む	良好	明赤褐色	P43	
51	339 SE060 井筒下層	土製品	土牌	一部欠	径1.5	径1mm以下白	黑色粒含む	良好	赤褐色	P50
51	340 SE063 石組	土製品	土牌	完形	長さ4.65、径1.9、重量12.6g	径1mm以下石英・長石含む	良好	褐	P48	
51	341 SE063 石組	土製品	土牌	完形	長さ4.5、径1.2、重量4.2g	微細な白・黒色粒含む	良好	にぶい橙	P49	
51	SE063 扇力 ベルト2層	土製品	土牌	完形	長さ3.1、径1.1、重量2.9g	微細な白・黒色粒含む	良好	にぶい赤褐色	P51	
51	SE064-1・2	土製品	土牌	完形	長さ3.4、径1.5、重量5.5g	径1mm白色砂含む	良好	にぶい橙～にぶい褐	P44	
51	SE064-1・2	土製品	土牌	1/2	径0.9	径1mm以下白	黑色粒含む	良好	にぶい橙・風化強い	P45
51	SE064-4	土製品	土牌	完形	長さ3.8、径1.4、重量7.7g	径1mm以下石英含む	良好	洪積～褐	P46	
51	SE064-4	土製品	土牌	完形	長さ2.6、径1、重量2.7g	微細な黒色粒含む	良好	にぶい橙	P47	

第8表(1) 第II区出土石器・石製品

奈石材の「磁性」はネオジム磁石による。 奈石量の□内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考	番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考
5136 SP073	滑石	-	石縫	破片	長さ[4.2]			5158 SK057 上層	滑石	無羽	石縫	一部欠	長さ5.14		
5137 SK033	滑石	-	石縫	破片	長さ[10.14]			5159 SK057 上層	滑石	-	石縫	一部欠	長さ4.47		
S49 SK042	滑石	微弱	石縫	完形	長さ5.71、重量30.6g	50 国 297	1610 SK057 上層	滑石	無羽	石材	完形		長さ8.46		
S50 SK042	滑石	微弱	石縫	完形	長さ4.13、重量22.8g	50 国 298	1611 SK057 上層	滑石	-	石縫	破片	長さ[3.14]			
S51 SK042	砂岩	微弱	石縫	完形	径2.62-3.08、重 量29.4g	50 国 299	1612 SK057 上層	滑石	無羽	石材	完形		長さ8.46		
5138 SK042	滑石	-	石縫	破片	長さ[5.06]			1613 SK057 上層	滑石	無羽	石材	破片	長さ[2.8]		
5139 SK042	滑石	微弱	石材	破片	長さ[4.97]			1614 SK057 上層	滑石	-	石材	破片	長さ[2.65]		
5140 SK042	滑石	-	石材	破片	長さ4.46			1615 SK057 上層	砂岩	-	石材	破片	長さ[4.45]		
5141 SK042	滑石	微弱	石材	完形	長さ3.4			1616 SK057 上層	安山岩	中	石	城片	長さ[3.83]		
5142 SK042	滑石	-	石材	完形	長さ3.3			543 SK020R4	花崗岩	中	石	城片	長さ[3.83]		
5143 SK042	片岩	微弱	円盤形	一部欠	長さ3.57			543 SK020R4	花崗岩	中	石	城片	長さ10.85、重 量66.9g	51 国 320	
S45 SK038	滑石	-	石縫	完形	長さ3.19、重量8.3g	50 国 302	544 SK020	滑石	無羽	石縫	一部欠	長さ3.77、重 量[14.6]	51 国 321		
S46 SK038	赤状岩質	中	石縫	一部欠	長さ3.95、17.1	50 国 303	545 SK020R1	安山岩	中	石	城片	厚さ8.7、重量350g	52 国 348		
S44 SK038	綠色岩質	中	石縫	一部欠	長さ[7.21]			546 SK020R7	安山岩	中	石	城片	厚さ14.6、重 量760g	52 国 349	
S47 SK040	板状岩質	中	石縫	一部欠	長さ[4.95]、重 量[25.5]	50 国 305	547 SK020	滑石	弱	石縫	一部欠	長さ[2.88]			
5145 SK040	滑石	微弱	石縫	完形	長さ3.9			548 SK020	滑石	弱	石縫	完形	長さ6.11		
5146 SK040 横乳孔	滑石	弱	石縫	完形	長さ3.88、重量19.5g	50 国 306	549 SK004	滑石	無羽	石縫	一部欠	長さ6.15			
5147 SK040 横乳孔	滑石	弱	石縫	一部欠	長さ5.5			550 SK003	砂岩	-	石縫	完形	長さ6.3		
5148 SK040 横乳孔	滑石	微弱	石縫	一部欠	長さ5.41			547 SK018 横乳	69岩	弱	石縫	城片	長さ[4.35]		
5149 SK040 横乳孔	滑石	弱	石縫	完形	長さ3.54			548 SK066	滑石	-	内盤形	完形	径4.06-4.46		
5150 SK040 横乳孔	滑石	弱	石縫	完形	長さ3.84			549 SK066	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.24、重 量45.8g	51 国 316	
5150 SK040 横乳孔	滑石	微弱	石縫	完形	長さ3.77			550 SK066	滑石	弱	石縫	完形	長さ3.71、重 量9g	51 国 317	
5151 SK022	滑石	-	石縫	完形	長さ6.61			547 SK066	滑石	-	石縫	完形	長さ5.23		
5152 SK022	滑石	微弱	石縫	完形	長さ5.65			548 SK066	滑石	-	石縫	完形	長さ4.38		
5153 SK063	滑石	弱	石縫	完形	長さ3.65			549 SK066	滑石	-	石縫	完形	長さ4.53		
5154 SK056	滑石	弱	石縫	完形	長さ4.78、重量26	50 国 310	550 SK066	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42			
5154 SK056	滑石	-	石縫	完形	長さ[3.5]			551 SK066	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42		
553 SK057 上層	滑石	-	石縫	完形	長さ6.5、重 量60.8g	50 国 313	552 SK066	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42			
553 SK057 上層	滑石	弱	石縫	一部欠	長さ4.28			553 SK069	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42		
556 SK057 上層	滑石	弱	石縫	一部欠	長さ4.3			554 SK069	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42		
557 SK057 上層	滑石	弱	石縫	一部欠	長さ6.23			555 SK069	滑石	弱	石縫	完形	長さ5.42		

第8表(2) 第II区出土石器・石製品

※石材の「磁性」はネオジム磁石による。※法量の□内は残存法量

番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考	番号	遺構・層位	石材	磁性	器種	残存	法量(cm, g)	備考
S178	SE039 楯方・ 北半	滑石	弱	石鏟	一部欠	長さ 4.96		5189	SE063 楯方	滑石	-	小円 盤状	壳形	径 1.78-2.06	
S179	SE039 楯方・ 北半	滑石	-	石鏟	一部欠	長さ [5.11]		5190	SE063 楯方	滑石	-	小円 盤状	壳形	径 1.86-2.04	
S38	SE039 楯方・ 南半	滑石	弱	石鏟	完形	長さ 4.76, 重量 19.4	51 図 327	S39	SE064-4	砂岩	-	石鏟	壳形	径 3.31-4.53, 重 量 82.8	51 図 347
S180	SE039 楯方・ 南半	滑石	弱	石鏟	一部欠	長さ 4.85		5191	SX053 ベルト 1・2層	滑石	弱	石鏟	完形	長さ 4.85	
S181	SE039 楯方・ 南半	滑石	弱	石鏟	完形	長さ 4.78		5192	SX053 ベル ト 1・2層	滑石	弱	石鏟	一部欠	長さ [5.73]	
S182	SE039 楯方・ 南半	滑石	弱	石材	完形	長さ 4.93		5193	SX053 ベル ト 3層	滑石	弱	石鏟	破片	長さ [5.25]	
S37	SE039 井筒 下層	滑石	-	石鏟	完形	長さ 5.69, 重量 105.2	51 図 333	5194	SE053 下面	滑石	-	不明 加工品	破片	長さ [3.13]	
S40	SE063 石組 蛇紋岩質 中	石	石	石鏟	完形	長さ 8.62, 重 量 80.8	51 図 336	5195	SX053 ベル ト 上層乱	滑石	-	石鏟	完形	長さ 4.03	
S41	SE063 石組 滑石	滑石	微弱	石鏟	完形	長さ 4.46, 重 量 41.1	51 図 337	5196	输出・搬乱 1区	粘板岩	弱	石材	破片		2点
S43	SE063 石組 滑石	滑石	微弱	石鏟	一部欠	長さ 5.54		5197	输出・搬乱 4区	砂岩	-	石鏟	完形	径 3.04-3.46	
S184	SE063 石組 滑石	滑石	微弱	石	石	長さ 4.74		5198	输出・搬乱 1・2・5・6区	滑石	弱	石鏟	完形	長さ 5.58	
S62	SE063 石組 R1	砂岩	-	板碑	一部 欠	長さ [35.5], 重 量 [1960g]	52 図 352	5199	输出・搬乱 1・2・5・6区	滑石	弱	石鏟	完形	長さ 4.91	
S63	SE063 石組 R2	砂岩	-	板碑	一部 欠	長さ [17.4], 重 量 [4750g]	52 図 353	5200	输出・搬乱 1・2・5・6区	滑石	微弱	石鏟	完形	長さ 4.44	
S64	SE063 石組 裏込	砂岩	-	板碑	一部 欠	長さ [15.8], 重 量 [4700g]	52 図 354	5201	输出・搬乱 8・9区	粘板岩	弱	石材	破片		2点
S185	SE063 井戸 下層	滑石	微弱	石	石	長さ 4.73		5202	输出・搬乱 8・9区	滑石	-	石鏟	完形	長さ 7.94	
S61	SE063 井筒	砂岩	-	火輪	破片	1辺 24.5, 重 量 [535g]	52 図 350	5203	搬乱弧頂區	滑石	-	石鏟	完形	長さ 6.98	
S60	SE063 井筒	砂岩	-	宝鏡印	破片	長さ [18.6], 重 量 [1850g]	52 図 351	5204	搬乱弧張區	滑石	微弱	石	壳形	長さ 5.57	
S42	SE063 ベル ト 1層	蛇紋岩質 中	石	石	石	長さ 4.86, 重 量 25.1	51 図 338	5205	搬乱弧張區	滑石	微弱	石	一部欠	長さ 5.81	
S186	SE063 楯方	滑石	弱	石	石	長さ 4.73		5206	搬乱弧張區	滑石	-	石	壳形	長さ 4.22	
S187	SE063 楯方	滑石	-	石材	完形	長さ 6.48		5207	输出・搬乱 鉛張西区	滑石	-	石	一部欠	長さ [2.9]	
S188	SE063 楯方	蛇紋岩質 中	小円 盤状	石	石	径 1.91-1.94									

第9表 第II区金属関係遺物出土遺構

遺構	取上日	金属関係遺物	備考	遺構	取上日	金属関係遺物	備考
SP011	190324	鉄針		SK068	190312	鉄針	
SP073	190322	鉄鍔		SE039 楯方	190218	鉄針	
SP079	190312	鉄針		SE039 楯方・北半	190215	鉄針、鉄津	
SK002	190201	鉄針		SE039 楯方・南半	190215	鉄針、鉄津	
SK004	190204	鉄針		SE039 井筒下層		鉄針、銅釦	永楽通寶(初鑄 1408年) 53図 356
SK030	190212	鉄針		SE063	190315	鉄針、銅釦	
SK032	190205	鉄針		SE063	190315	鉄針、銅釦 2	
SK034	190206	鉄針		SE063 ベルト 1層	190312	鉄針	
SK036	190212	鉄針		SE063 楯方	190315	鉄針	
SK037	190212	鉄針		SE063 石組	190318	鉄針、鉄製品 2	
SK038 R4	190214	鉄針、木片(鉄針貫入)		SE063 井筒下層	190318	銅錢	祥符通寶(初鑄 1008年) 53図 357
SK038 R5	190214	鉄製品 2		SE063	190318	銅錢	
SK038 R6	190214	羽口 53図 355		SK064・SE063 混土	190312	鉄針、銅製品	
SK038	190214	鉄針、鉄製品 1		SE064-4	190313	鉄針	
SK040	190215	鉄針		SX048	190218	鉄針	
SK040 撫亂混	190213	鉄針		SX053 上面	190301	鉄片	
SK042	190215	鉄針、鉄津、銅錢 2		SX053 ベルト 1・2層	190311	鉄針、鉄片、銅錢	昭寧元寶(初鑄 1068年) 53図 358
SK046	190218	鉄針		SX053 ベルト 3層	190312	鉄針、銅片	
SK049	190221	鉄針		SX058	190308	鉄片	
SK052	190221	鉄針		SX018 搬乱	190204	鉄針、銅片	
SK054	190307	鉄針		SX053 ベルト上層	190311	鉄針	
SK056	190308	鉄針、鉄津		鉛張西区搬出・搬乱	190312	鉄針、銅錢	永楽通寶(初鑄 1408年) 53図 359
SK057 上層	190308	鉄針、鉄津		4 区 府底	190308	鉄針	
SK057 下層	190308	鉄針		不明		銅錢	聖宋元寶(初鑄 1101年) 53図 360
SK059	190308	鉄針					
SK060 西	190308	鉄針、鉄津、銅片、銅錢					

## 第5節 自然科学分析

第1項 動物骨・貝類、木製品樹種、種実、土壤（花粉・植物珪酸体・珪藻）の自然科学分析

株式会社古環境研究所

### 1. 動物骨・貝類

#### （1）方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。

#### （2）結果

試料の詳細と、同定された分類群および部位を第10表に示す。主要な分類群の写真を図版20・21に示す。以下に、遺構別に同定結果を述べる。なお、哺乳類に関しては細片で観察部位を欠くものが多い。

#### ① 第Ⅰ区

- ・ SD162 哺乳類 6点。
- ・ SE035（下層を含む） 硬骨魚綱 7点、ネズミ科 3点、哺乳類 1点。
- ・ SE047（堀方） ニホンジカ 1点。
- ・ SE158 硬骨魚綱 1点、哺乳類 1点。
- ・ SE190 イヌ 4点、イルカ類 1点。イヌの骨は小さく全て未融合であり、子犬のものである。
- ・ SE193（堀方を含む） カレイ科 1点、ヒト 7点、ウマ 1点、クジラ目 1点、哺乳類 1点。ヒトの下顎骨は永久歯が生え替わる時期のもので6才程度であり、遊離歯は下顎骨と同一である。
- ・ SE195（堀方） ハタ科 5点、タイ科？ 6点、マダイ 3点、ヒラメ 3点、硬骨魚綱 2点他 10.59g、ニホンジカ 1点。
- ・ SE196（堀方を含む） ヒト 2点、哺乳類 1点。
- ・ SK008 硬骨魚綱 1点。
- ・ SK023 腹足綱。
- ・ SK160 スッポン 3点、哺乳類 9点。
- ・ SX188 マダイ？ 1点、硬骨魚綱 3点。
- ・ SP059 周辺 1面下堆積土 ヒト 1点。ヒト頭蓋骨は被熱により白色を呈する。
- ・ SP074 イヌ 1点。
- ・ SX036 イルカ類 1点。
- ・ SX048 ウマ 1点。
- ・ SX143 T4 イヌ 1点。
- ・ SX148 T6 ウマ 1点。
- ・ SR152（外側を含む） 硬骨魚綱 1点、ヒト 88点、哺乳類 75点。No.20のヒトの第一大臼歯は成人しているヒトの歯であり、また、No.21のヒトの頭蓋骨は骨表面の筋附着面の凹凸がほとんど見られないことから女性の骨である。なお、ヒトの頭蓋骨片は細片であり計数が高くなっているが、最低個体数が複数体とは限らない。
- ・ SX163 イヌが 1点。
- ・ SX178 腹足綱 1点。
- ・ SX180 ニホンジカ 1点。
- ・ SX188（3区西ベルトを含む） 斧足綱 8体、マダイ 2点、哺乳類破片。マダイはカブトワリによって切断された解体痕が観察された。
- ・ I面下4区 ウマ 1点。
- ・ 2面検出清掃 斧足綱 1点、ウマ／ウシ 1点。
- ・ II下層（4区、T6南） フネガイ科？ 1点、マダイ 1点、ウマ 1点、哺乳類 1点。

#### ② 第Ⅱ区

- ・ SE039（井筒下層、井筒内下層土、堀方北半を含む） 腹足綱 1点、斧足綱細片、アジ科 1点、フグ科 1点、硬骨魚綱 23点、カエル類 2点、哺乳類 1点。
- ・ SE064（1・2、3） タコノマクラ目 2点。
- ・ SK002 ヒト 1点。
- ・ SK020 ニホンジカ？ 1点、哺乳類 1点。

- ・SK033 豚歯目1点、哺乳類28点が同定。
- ・SK036 鳥類11点、ヒト1点、哺乳類58点。ヒトの脛骨は、骨質の厚さや筋付着面の荒さから男性のものである。
- ・SK038（下層を含む） イボタガキ科？1点、ハタ科？1点、マダイ2点、硬骨魚綱29点、カエル類1点、ヘビ類1点。硬骨魚綱には被熱によって白色を呈するものがある。
- ・SK042 クロダイ属2点、カレイ科2点、硬骨魚綱37点、哺乳類25点。カレイ科、硬骨魚綱は被熱によって白色を呈する。
- ・SK057（上層、下層） サメ類7点。いずれも被熱による白色を呈する。

### （3）考察

箱崎遺跡92次発掘調査で出土した動物遺存体は、巻貝および二枚貝の貝類、タコノマクラ目、魚類、鳥類、ヒトやクジラ目およびイルカ類を含む哺乳類であった。タコノマクラ目とヒトを除いた貝類および動物は、いずれも食用となるものであり、解体痕が観察されるものや、被熱変化のあるものが見られた。

巻貝は破片が多く、同定に至らないものばかりであった。二枚貝はイボタガキ科？、フネガイ科？の2種類で、内湾から河口の岩礁や、潮間帯下の泥底に生息する海生の貝類である。タコノマクラ目は貝類ではなく、また食用でもないが、底曳網漁などで混獲されたものが消費地まで持ち込まれたと考えられる。

サメ類、マダイ、ハタ科などの海水魚、クジラ目、イルカ類などの海生哺乳類は11種類同定された。ハタ科、マダイが比較的多く、カブトワリなどの解体痕や被熱による色調の変化などが見られる。アジ科は沿岸表層を群れて回遊する魚で、ハタ科、マダイ、クロダイ属、フグ科は沿岸性の岩礁域や砂泥底に生息する。カレイ科、ヒラメは沿岸の浅い水域から深海までの海底に生息する。磯釣りなどで漁獲できるが、底曳網、刺し網などで漁獲される。サメ類は外洋に生息しており、食用の他に皮がヤスリの素材として利用される。クジラ目、イルカ類は外洋から沿岸などに生息し、時代によっては、食用だけでなく肋骨などが骨角器に利用される。刺網漁、追い込み漁などで漁獲される。なお、現在ではマダイなどを漁獲する磯建網漁にサメ類やイルカ類が混獲されることがある。

陸生動物は、鳥類、カエル類、スッポン、ヘビ類、ヒト、ネズミ科、イヌ、ウマ、ニホンジカなど10種類が同定された。役畜のイヌやウマは飼育されていた可能性がある。野生動物としてはスッポン、カエル類、ヘビ類、ネズミ科、ニホンジカがいる。ウマは、乗馬や荷物の牽引などに使役され、最終的には解体され、皮や肉を資源として利用したと考えられる。イヌは飼育されるが、中近世では食用にされた例もある。イヌには幼い子犬も含まれ、子犬から成犬まで本遺跡には存在した。スッポンは淡水生で河川の中・下流域や池、湖沼などに生息する。江戸時代などでは主に西日本で食されてきた。カエル類、ヘビ類は湿潤な環境を好み、スッポンの生息する湖沼などに共に生息する。ネズミ科は河川、湖畔や人里に近い田畠や土手に生息し、人里近くで見られる。ニホンジカは自然豊かな山野に生息する動物であり、食用となる。また、ニホンジカは古くから角や骨が骨角器に利用される。

当時の人々は、近隣に位置する博多湾沿岸の岩礁域や砂礫、干潟より貝類やハタ科、マダイ、クロダイ属、フグ科などの魚類を獲得し、それに加え網漁でサメ類、クジラ目、イルカ類なども漁獲していたと考えられる。陸生動物にはウマ、イヌなどの役畜も含まれるが、カエル類、スッポン、ニホンジカ、ネズミ科などの野生動物も消費されていた。いずれの動物遺存体も食用や骨角器に利用されたのち廃棄されたものと考えられる。なお、SE193堀方、SE196、SP059、SR152よりヒトの骨が同定

第10表(1) 動物遺存体同定結果

%	調査区	遺構・部位	位置	結果(学名/和名)	部位	部分	左右	個数	備考
2	I	SP074		<i>Canis familiaris</i> イヌ	大顎骨			1	
3	I	SK008		<i>Osteichthyes</i> 硬骨魚綱	鰓			1	
4	I	SK023		<i>Plants</i> 不明植物	不明			28	突起・孔あり
7	I	SE035	土中シンプル	<i>Gastropoda</i> 腹足綱	硬骨魚綱	破片		1	
				<i>Osteichthyes</i> 硬骨魚綱	不明	破片		3	
				<i>Osteichthyes</i> 硬骨魚綱	鰓			3	
				<i>Muridae</i> ネズミ科	下顎骨		左 右	2	
				<i>Muridae</i> ネズミ科	上顎骨		左	1	
				<i>Mammalia</i> 哺乳類	頭蓋骨	破片		1	
				<i>Equis cabalus</i> ウマ	頭蓋骨	破片		1	
8	I	SE035 下層	R1	<i>Equis cabalus</i> ウマ	上顎骨	ほぼ完形	右	1	
18	I	SX036	Odontoceti fam. indet.	<i>イルカ類</i>	椎骨	椎体		1	
1	I	SE047 垂方		<i>Cervus nippon</i> ニホンジカ	鹿角			1	
19	I	SX048		<i>Equis cabalus</i> ウマ	頭	逆離歯		1	
24	I	1面下4区		<i>Equis cabalus</i> ウマ	上顎骨	ほぼ完形	右	1	
25	I	SP059 周辺1面下堆積土		<i>Homo sapiens</i>	ヒト	頭蓋骨	頭頂骨片	1	被熱白色変化
33	I	2面検出堆積		<i>Bivalvia</i>	破片			1	
34	I	2面検出堆積		<i>Equis cabalus / Bos taurus</i>	ウマ / ウシ	齒	逆離歯(C)	1	
35	I	II下層4区		<i>Arcidiae?</i>	ネコガイ科?	破片		1	
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	上顎鎖骨	破片	左	1
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	肋骨		1	
26	I	黒堀周(II下層)		<i>Equis cabalus</i> ウマ	基節骨(後肢)	近位	右	1	
				<i>Homo sapiens</i>	ヒト	頭蓋骨	破片	60	
				<i>Homo sapiens</i>	ヒト	齒	第一大臼齒	1	成人
				<i>Homo sapiens</i>	ヒト	齒	第二大臼齒	1	
20	I	SR152	頭骨付近	<i>Homo sapiens</i>	ヒト	齒		25	
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	不明	破片	30	ヒトと同一か?
				<i>Osteichthyes</i>	硬骨魚綱	齒	逆離歯	1	
21	I	SR152	頭骨	<i>Homo sapiens</i>	ヒト	頭蓋骨	破片	1	女性か
22	I	SR152	骨①	<i>Mammalia</i>	哺乳類	不明	破片	45	土壤
23	I	SR152外側		Unknown	不明	不明		1	不明
15	I	SE196		<i>Homo sapiens</i>	ヒト	頭頸骨	破片	2	
16	I	SE196 垂方		<i>Mammalia</i>	哺乳類	肋骨?		1	
14	I	SE195 垂方		<i>Pagrus major</i>	マダイ	前頭骨	破片	1	
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	前上顎骨	ほぼ完形	左	1
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	主顎蓋骨	破片	左	1
				<i>Sparidae?</i>	タイ科?	椎骨	完形	6	
				<i>Serranidae</i>	ハタ科	主顎蓋骨	ほぼ完形	左	1
				<i>Serranidae</i>	ハタ科	方骨	完形	左	1
				<i>Serranidae</i>	ハタ科	前顎蓋骨	破片	左	1 切断
				<i>Serranidae</i>	ハタ科	歯骨	破片	左	1
				<i>Serranidae</i>	ハタ科	歯骨	破片	右	1 解体痕
				<i>Pomachthys olivaceus</i>	ヒラメ	椎骨	完形	3	
11	I	SE193		<i>Osteichthyes</i>	硬骨魚綱	椎骨	椎体	1	
				<i>Osteichthyes</i>	硬骨魚綱	鰓		1	
				<i>Osteichthyes</i>	硬骨魚綱	不明	破片	10,59g	
				<i>Cervus nippon</i>	ニホンジカ	下顎骨	下顎体	左	1
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	肋骨	破片	1	木
				<i>Cetacea</i>	クジラ目	椎骨	椎体	1	
				<i>Pleuronectidae</i>	カツオ科	第1血管間繩		1	
				<i>Homo sapiens</i>	ヒト	下顎骨		1	6才程度
				<i>Homo sapiens</i>	ヒト	齒	逆離歯(破片)	6	下顎と同一
				<i>Equis cabalus</i>	ウマ	齒	逆離歯(下顎M3)	右	1
10	I	SE190		<i>Canis familiaris</i>	イヌ	肩甲骨	左	1	子犬、肩甲骨、棲骨。肩骨は同一個体
				<i>Canis familiaris</i>	イヌ	橈骨	左	1	
				<i>Canis familiaris</i>	イヌ	尺骨	左	1	
				<i>Canis familiaris</i>	イヌ	脛骨	左	1	
9	I	SE158		Odontoceti fam. indet.	イルカ類	齒	逆離歯	1	
5	I	SK160		<i>Osteichthyes</i>	硬骨魚綱	不明	破片	3	
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	肋骨		1	
				<i>Pelodiscus sinensis</i>	スッポン	肋骨板	破片	1	
				<i>Pelodiscus sinensis</i>	スッポン	中顎骨板	ほぼ完形	1	
				<i>Pelodiscus sinensis</i>	スッポン	下顎骨板	破片	1	
17	I	SD162		<i>Mammalia</i>	哺乳類	四肢骨	骨幹	1	小型
28	I	SD163		<i>Canis familiaris</i>	イヌ	肋骨	破片	7	大型
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	不明	破片	6	
				<i>Mammalia</i>	哺乳類	下顎骨	下顎体	左	1

第10表(2) 動物遺存体同定結果

No.	調査区	遺構・部位	位置	結果(学名/和名)	部位	部分	左	右	個数	備考
26	I	SX143-T4		<i>Canis familiaris</i>	イヌ	椎骨		頭椎	1	
27	I	SX145-T6		<i>Equus cabalus</i>	ウマ	歯		遊離歯	1	
29	I	SX178		Gastropoda	腹足綱	殻軸			1	
30	I	SX180		<i>Cervus nippon</i>	ニホンジカ	肩甲骨	左		1	
				<i>Pagrus major</i> ♀	マダイ?	舌帯骨		破片	右	1
6	I	SX188		Osteichthyes	硬骨魚綱	鰓棘		担鱗骨	1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明		破片	2	
31	I	SX188		Bivalvia	斧足綱	不明		破片	8	
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	前頭骨・上後頭骨		破片	2	切断(カブトワリ)
32	I	SX188、3区西 ベルト		Mammalia	哺乳類	不明		破片	-	大型哺乳類か?
47	II	SK033	骨-1	Rodentia	齧歯目	歯		遊離歯	1	
				Mammalia	哺乳類	不明		破片	27	
48	II	SK033	骨-2	Mammalia	哺乳類	不明		破片	1	
				Pleuronectidae	カレイ科	椎骨		完形	2	被熱黒色変化
53	II	SK042		Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨		ほぼ完形	8	被熱白色変化
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明		破片	29	被熱白色変化。炭
54	II	SK042		Acanthopagrus	クロダイ属	前上頸骨	左	破片	1	土器
				Acanthopagrus	クロダイ属	歯骨	左	破片	1	
				Mammalia	哺乳類	不明		破片	25	
51	II	SK038		Ostreidae?	イボタガキ科?	破片			3	
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	前上頸骨	ほぼ完形	右	1	鱗
				<i>Pagrus major</i>	マダイ	副蝶形骨		破片	1	
				Serranidae?	ハタ科?	椎骨		完形	1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	副蝶形骨		ほぼ完形	1	
52	II	SK038 下層		Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨		ほぼ完形	4	内2点被熱白色変化
				Osteichthyes	硬骨魚綱	尾部棒状骨		破片	12	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	椎骨		ほぼ完形	11	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明		破片	1	
				Colubridae gen. et sp. indet.	ヘビ科	椎骨		完形	1	
				Salientia fam. indet.	カエル類	愈骨		ほぼ完形	右	1
49	II	SK036	R1	<i>Homo sapiens</i>	ヒト	椎骨			右	1 男性か
50	II	SK036		Mammalia	哺乳類	不明		破片	58	
55	II	SK057 上層		Aves	鳥類	不明		破片	11	
56	II	SK057 下層		Selachii	サメ類	椎骨		ほぼ完形	6	被熱白色変化
45	II	SK020	R1	Mammalia	哺乳類	椎骨		完形	1	被熱白色変化
46	II	SK020	R6	<i>Cervus nippon</i> ?	ニホンジカ?	角?			1	
44	II	SK002		<i>Homo sapiens</i>	ヒト	椎骨			1	
				Salientia fam. indet.	カエル類	椎骨		骨体	右	1
37	II	SK039		Salientia fam. indet.	カエル類	大顎骨		ほぼ完形	左	1
						カエル類		ほぼ完形	左	1
38	II	SE039 井筒内下層土		Carangidae	アジ科	鱗		種鱗	1	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	不明		破片	11	
				Osteichthyes	硬骨魚綱	鱗			12	
39	II	SE039 井筒下層		Gastropoda	腹足綱	殻軸		1		
				Bivalvia	斧足綱	細片			-	
40	II	SE039 井筒下層		Tetraodontidae	フグ科	歯骨		ほぼ完形	左	1
41	II	SE039 堀方北半		Mammalia	哺乳類	四肢骨			1	
42	II	SE064-1-2		Clypeasteroida	タコノマクサ目	破片			1	
43	II	SE064-3		Clypeasteroida	タコノマクサ目	破片			1	

された。SE193堀方では6才程度の子供の下顎骨であり、SR152では検出された骨を1個体と考えるならば成人した女性の頭蓋骨である。SP059のヒト頭蓋骨は被熱による白色変化が見られ、火葬された人骨の可能性があり、SR152より出土した人骨は埋葬された人骨の可能性がある。しかし、井戸跡では動物骨が投棄されることが大半であり、またSE193堀方では他の動物骨と共に出土しているため、SE163堀方およびSE196より出土した人骨は、井戸や井戸堀方を埋めるときに共に投棄された可能性がある。

## 【参考文献】

安部永 (1994) 日本の哺乳類、東海大学出版会、195p.

松井章 (1988) 中世のマダイ漁 草戸千軒、第182号草戸千軒町遺跡調査研究所、p.6-7.

## 2. 木製品樹種

### (1) 方法

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。

### (2) 結果

樹種同定結果を第11表に示す。井戸の部材と木製品は、針葉樹のスギと広葉樹のイヌキに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don ヒノキ科スギ属

軸方向組織は仮道管を主要素とし、他に樹脂細胞が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・イヌキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科イヌキ属

小径の道管が年輪界一様にはほぼ単独で散在する散孔材。道管の分布密度は比較的高い。道管の穿孔板は階段穿孔板となる。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は、独立帶状または短接線状で、放射方向にはほぼ等間隔に配列する。

### (3) 考察

樹種同定を実施した木製品等は、伊東・山田（2012）の木器分類を参考にすると、服飾具（櫛）、施設材・器具材（井戸枠板・木棒）、その他（加工木片）に分けられる。これらの木製品等は、櫛がイヌキで、他は全てスギに同定された。各樹種の材質等についてみると、針葉樹のスギは、木理が直通で割裂性と耐水性が比較的高い。イヌキは、重硬・緻密で強度が高い。

器種別にみると、試料の大半を占める井戸枠板は、12基の井戸から出土している。井戸の時期は、SE063が16世紀代、その他の11基は13~14世紀とされる。板材は、その全てが板目板であり、樹種も全てスギとなる。この結果から、時期に関わらずスギが多用されたことが推定される。また、板目板は、年輪が板の広い面に対して平行に層状に入る。細胞壁が厚く、細胞密度が高い晩材部が層状に入るために、柾目板に比べて耐水性が高いという特徴がある。井戸枠に使うことから、より耐水性の高い木取りで製作された可能性がある。

木棒は、近世の井戸SE047から出土した。樹種は同じくスギが利用されるが、木取りは柾目状を呈しており、それ以前の井戸枠板とは木取りが異なる。木取りの違いは、部位の違いなどが影響している可能性がある。

福岡市内では、下月隈C遺跡の中世とされる井戸を構成する井戸側板にスギ、井戸枠・板にアカガ

第11表 樹種同定結果

No.	調査区	造構	位置	器種	木取り	樹種
1	I	SE035	W1	井戸枠板	板目	スギ
2	I	SE035	東半最下層	柾	削出	イヌキ
3	I	SE047		木棒	柾目状	スギ
4	I	SE155	W1	井戸枠板	板目	スギ
5	I	SE158	W1	井戸枠板	板目	スギ
6	I	SE190	W1	井戸枠板	板目	スギ
7	I	SE191	W1	井戸枠板	板目	スギ
8	I	SE191		加工木片	分割角材状	スギ
9	I	SE192	W1	井戸枠板	板目	スギ
10	I	SE193	W1	井戸枠板	板目	スギ
11	I	SE195	W1	井戸枠板	板目	スギ
12	II	SE039		井戸枠板	板目	スギ
13	II	SE063	W1	井戸枠板	板目	スギ
14	II	SE064-1		井戸枠板	板目	スギ
15	II	SE064-2		井戸枠板	板目	スギ
16	II	SE064-3		井戸枠板	板目	スギ
17	II	SE064-4		井戸枠板	板目	スギ

シ亜属、アワブキ属、スギ、モミ属、井戸枠・杭にキブシ、シキミ、スダジイ、ツブラジイ、井戸枠・曲物にヒノキ、井筒（曲物）にモミ属が確認されている（三村・高橋,2005）。スギの利用は、既存の調査例とも整合的といえる。

櫛は、いわゆる横櫛である。背がやや山なりに丸みを帯びる形状であり、背が木口、胸が板目となる木取りで削出されている。イスノキは重硬・緻密で加工が困難であるが、緻密であるために細かな加工には適しており、利用の背景に考えられる。

伊東・山田（2012）のデータベースによれば、福岡県内では御笠川南条坊遺跡の鎌倉時代とされる横串がイスノキに同定されている。また、同時期の資料では、全国的にイスノキの利用が多くを占めており、中世の横櫛ではイスノキが主体であったことが推定される。

加工木片は、分割角材状を呈する部材である。スギが利用されることから、加工性の高い木材の選択・利用が推定される。

#### 【参考文献】

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久（編）,2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,444p.
- 三村昌史・高橋 敦,2005,第6次調査出土材の樹種からみた木材利用,「下月隈C遺跡V -福岡空港周辺整備工事に伴う下月隈C遺跡第6次発掘調査報告－本文編」,福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第839集,福岡市教育委員会,221-230.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）,海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

### 3. 種実

#### (1) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

#### (2) 結果

##### ○分類群

草本4分類群が同定された。結果を第12表に示し、同定された分類群の写真を図版22に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

第12表 炭化種実同定結果

No.	調査区	遺構	分類群		部位	個数
			学名	和名		
I	II	SK042	<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	炭実	3
			<i>Hordeum vulgare L.</i>	オオムギ	炭実	65
			<i>Triticum aestivum L.</i>	コムギ	炭実	17
			<i>Hordeum-Triticum</i>	ムギ類	炭実(破片)	151
				炭化材	細片	(+)
			備考	石		(+)
				虫瘤		1

##### 〔草本〕

イネ *Oryza sativa L.* 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

オオムギ *Hordeum vulgare L.* 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

コムギ *Triticum aestivum L.* 炭化果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈する。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。

ムギ類(オオムギ・コムギ) *Hordeum-Triticum* 炭化果実 イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、発泡しており胚が確認できないためムギ類とした。

##### ○種実群集の特徴

草本種実のイネ果実3点、オオムギ果実65点、コムギ果実17点、ムギ類果実151点が同定され、その他に炭化材細片(+)、石(+)、虫瘤1点が確認された。

#### (3) 考察

草本種実のイネ、オオムギ、コムギ、ムギ類は食用になる栽培植物で、すべて炭化している。いずれも主要となる農作物の穀類であり、周囲または時期的に水田や畑が盛行していたと推定される。種実の組成から、オオムギやコムギなどの穀類を作物とする畑作が主要に行われていたと考えられる。

##### 【参考文献】

笠原安夫(1985)日本雑草図説、養賢堂、494p.

笠原安夫(1988)作物および田畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.

南木謙彦(1991)栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ、雄山閣出版、p.165-174.

南木謙彦(1993)葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-

#### 4. 土壤(花粉分析・植物珪酸体分析・珪藻分析)

##### ○花粉分析

###### (1) 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)
- 6) 再び冰酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の分類は、同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(–)で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉(1973)、中村(1980)を参照して行った。イネ属については、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉(AP)および非樹木花粉(NAP)となるが非樹木花粉(NAP)は草本花粉として示した。

###### (2) 結果

産出した分類群は、樹木花粉2、草本花粉4、シダ植物胞子1形態の計7分類群である。花粉分析の結果を第13表に示し、主な分類群の顕微鏡写真を図版22に示した。同時に、寄生虫卵についても観察した結果、1分類群が確認された。以下に産出した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕 スギ、コナラ属コナラ亜属

〔草本花粉〕 イネ科、アブラナ科、タンボボ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子

〔寄生虫卵〕 回虫卵

次に、各調査区における花粉化石群集の特徴を述べる。

###### 1) 第I区: SE190最下層、西壁土層サンプル1、サンプル2

いずれの試料も密度が極めて低く、SE190最下層でスギがわずかに検出されたのみであった。

###### 2) 第II区: SK038下層、SK040下層

いずれの試料も密度が極めて低い。SK038下層でイネ科、タンボボ亜科、アブラナ科、ヨモギ属がわずかに検出され、SK040下層でコナラ属コナラ亜属、イネ科がわずかに検出された。また、SK038下層から回虫卵がわずかに検出された。

###### (3) 考察

###### 1) 第I区

SE190最下層は、花粉密度が極めて低いことから、堆積速度が速く花粉が集積できなかつたか淘汰されたと考えられる。分解質の遺体片が多く、周囲からの落ち込みが著しかつたとみられる。

西壁土層では、いずれの試料とも花粉が検出されないことから、堆積速度が速かつたか淘汰された

第13表 花粉分析結果

分類群		I 区 SE190	I 区西層		II 区 SK038	II 区 SK040
学名	和名	最下層	サンプル1	サンプル2	下層	下層
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1				1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属					
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科				3	1
Cruciferae	アブラナ科				1	
Lactucoideae	タンポポ亜科				3	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属				1	
Fern spore	シダ植物胞子					
Monocolpate spore	單溝溝胞子				3	
Arboreal pollen	樹木花粉	1	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	8	1
Total pollen	花粉総数	1	0	0	8	2
Pollen frequencies of 1 cm <sup>3</sup>	試料 1 cm <sup>3</sup> 中の花粉密度 × 10 <sup>2</sup>	0.6			0.6 × 10 <sup>2</sup>	0.1 × 10 <sup>2</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	3	0
Parasite eggs	寄生虫卵				5	
<i>Ascaris (lumbrico) deg.</i>	回虫卵					
Total	計	0	0	0	5	0
Parasite eggs frequencies of 1 cm <sup>3</sup>	試料 1 cm <sup>3</sup> 中の寄生虫卵密度 × 10				3.5	
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimein	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal + woods fragments	微細炭化物・微細木片	(++)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal + woods fragments)					0.4	
木分解遺体片		384.0	16.3	8.1	37.6	
分解質遺体片		13.4	0.3	2.3	20.5	
炭化遺体片 (微粒炭)						

と考えられる。

## 2) 第Ⅱ区

SK038下層は、花粉密度が極めて低いことから、堆積速度が速く花粉が集積できなかつたか淘汰されたと考えられる。なお、イネ科、タンポポ亜科などの草本がわずかに産出しており、周辺に比較的乾燥した陽当たりの良い開けた環境が分布していたと推定される。寄生虫の回虫卵が少量認められた。産状から生活汚染の影響が想定され、周囲に由来となる居住域ないし生活域があつたとみなされる。

SK040下層は、花粉密度が極めて低く、堆積速度が速く花粉が集積できなかつたか淘汰されたと考えられる。コナラ属コナラ亜属、イネ科がわずかに検出されている。これらは風媒花植物であることから、周辺の植生を反映したものと思われる。

## ○植物珪酸体分析

### (1) 方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1 gに対し直徑約40 μm のガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）により脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）により土壤を分散
- 5) 沈底法により20 μm 以下の微粒子を除去
- 6) 乾燥後、封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

検鏡は、400倍の偏光顕微鏡下で行う。同定は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象とする。計数は、ガラスピーズ個数が500以上になるまで行う。これはほぼプレバート1枚分の精査に相当する。試料1g中の植物珪酸体個数は、試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率を乗じて算出する。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）を乗じて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出する。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。

## （2）結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表および第52図に示した。主要な分類群の顕微鏡写真を図版23に示す。

〔イネ科〕 イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型（おもにスキ属）、ウシクサ族型（チガヤ属など）、シバ属型

〔イネ科-タケ亜科〕 ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・ヤダケ属など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、その他未分類等

〔イネ科-その他〕 未分類等

〔木本起源〕 クスノキ科、イスノキ属

〔その他〕 海綿骨針

次に、各調査区における植物珪酸体の産出状況を述べる。

### 1) 第I区 SE190最下層、西壁土層サンプル1、サンプル2

SE190最下層は、植物珪酸体の産出量が少ない。イネ、キビ族型、スキ属型、ウシクサ族型の草本と、クスノキ科、イスノキ属の木本が少量検出されたが、優占種は認められない。植物珪酸体以外に海綿骨針が少量検出された。

西壁土層サンプル1とサンプル2は、いずれもイネが高密度で検出され優占する。次いでスキ属型が多く、キビ族型、タケ亜科のネザサ節型とメダケ節型、木本のイスノキ属がそれぞれ少量検出された。他には、サンプル1ではシバ属型と木本のクスノキ科が、サンプル2ではウシクサ族型とタケ亜科のミヤコザサ節型が少量認められた。両試料からは植物珪酸体の他に海綿骨針が少量検出された。

### 2) 第II区 SK038下層、SK040下層

それぞれイネが高密度で検出され優占する。次いでスキ属型が多く、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族型、タケ亜科のネザサ節型とメダケ節型、木本のクスノキ科とイスノキ属が低密度で検出された。他にSK038下層ではシバ属型、SK040下層ではタケ亜科のミヤコザサが少量認められた。植物珪酸体の他に海綿骨針が少量検出された。

## （3）考察

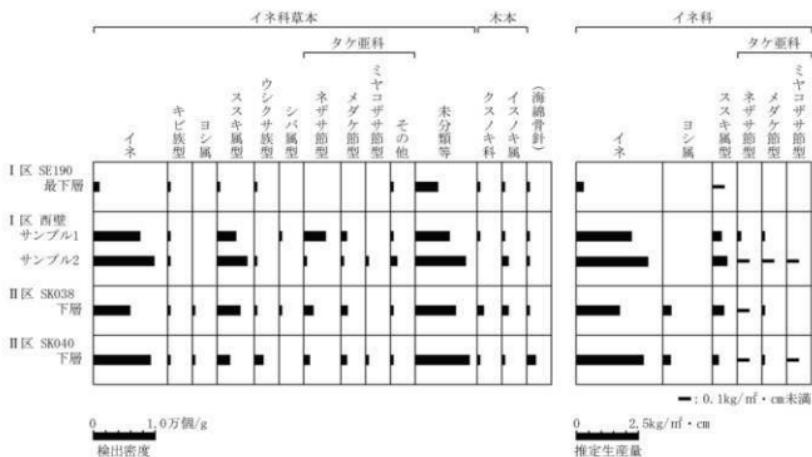
### 1) 第I区

SE190最下層では、植物珪酸体の産出量が少なく、優占種も認められない。陽当たりが悪くイネ科草本植物の生育できない環境であったか、堆積速度が速かったことが考えられる。ここで検出された植物珪酸体は、周辺から混入したものと判断される。

西壁土層では、サンプル1、サンプル2ともにイネの植物珪酸体が高い密度で検出されている。サンプル1では7,600個/g、サンプル2では9,900個/gであり、いずれも稲作跡の判断基準値である5,000個/gを超過している。このことから、調査地もしくは近傍に水田が分布していた可能性が高い

第14表 植物珪酸体分析結果

分類群	学名	I 区 SE190		I 区 西壁		II 区 SK038		II 区 SK040	
		最下層	サンプル 1	サンプル 2	下層	下層	下層	下層	下層
イネ科	Gramineae								
イネ	<i>Oryza sativa</i>	10	76	99	60	93			
キビ族型	<i>Panicum type</i>	5	5	5	5	5			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>					5	5		
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	5	31	49	38	21			
ウシクサ族型	<i>Andropogoneae type</i>	5		5	5	5			
シソ族型	<i>Zizaniopsis miliacea</i>		5		5				
タケ亜科	Bambusoideae								
ネヂガサ族型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>		36	5	16	10			
メダケ族型	<i>Pleioblastus sect. Nipponica Iwatsuzi</i>		10	5	11	10			
ミヤコザサ族型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>			5	5	5			
その他	Others	5	5	11	5	5			
その他イネ科	Others								
未分類等	Unknown	37	86	82	66	88			
本木	Arborescens								
クスノキ科	Lauraceae	5	5		11	5			
イヌクチ属	<i>Ditsylium</i>	5	5	11	11	5			
(海綿骨針)	Sponge	5	5	5	5	5			
植物珪酸体総数	Total	77	234	277	238	267			
おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出									
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.31	2.25	2.91	1.77	2.73			
ヨシ属	<i>Phragmites</i>				0.35	0.32			
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.06	0.38	0.61	0.48	0.26			
ネヂガサ族型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.17	0.03	0.08	0.05				
メダケ族型	<i>Pleioblastus sect. Nipponica Iwatsuzi</i>	0.12	0.06	0.13	0.12				
ミヤコザサ族型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>		0.02	0.02	0.02				



第54図 植物珪酸体分析結果

と考えられる。なお、ススキ属多く検出されていることから、畦畔や水田周辺の乾いたところにはススキ属が生育していたと推定される。

## 2) 第Ⅱ区

SK038下層とSK040下層では、それぞれイネの植物珪酸体が6,000個/g、9,300個/gと高い密度であり、いずれも稻作跡の判断基準値の5,000個/gを超過している。なお、調査対象が土坑であることから、水田だったところに土坑が造られたか、何らかの要因で水田土壤が混入したか投棄されたことが想定される。ここでもススキ属が多く検出されていることから、調査地周辺の乾いたところにはススキ属が生育していたと推定される。なお、水田土壤が混入あるいは投棄されたのならば、その水田の畦畔や周辺の乾いたところにススキ属が生育していたと考えられる。

### ○珪藻分析

#### (1) 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm<sup>3</sup>を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残流をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作製
- 6) 檢鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

#### (2) 結果

産出した珪藻は、真塩性種（海水生種）8分類群、真-中塩性種（海-汽水生種）12分類群、中塩性種（汽水生種）5分類群、中-貧塩性種（汽-淡水生種）3分類群、貧塩性種（淡水生種）63分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端2個につき1個と数えた。分析結果を第15表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第53図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe (1974) の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群は顕微鏡写真を図版24に示した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔真-中塩性種〕 *Achnanthes delicatula*, *Cocconeis scutellum*, *Navicula duerrenbergiana*, *Nitzschia granulata*

〔中塩性種〕 *Navicula perminuta*

〔中-貧塩性種〕 *Rhopalodia gibberula*

〔貧塩性種〕 *Achnanthes lanceolata*, *Achnanthes minutissima*, *Amphora fontinalis*, *Amphora montana*, *Amphora veneta*, *Cocconeis disculus*, *Cocconeis placentula*, *Fragilaria exigua*, *Fragilaria pinnata*, *Fragilaria* sp1., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula kotschyii*, *Navicula mutica*, *Navicula pseudoacceptata*, *Navicula* spp., *Navicula veneta*, *Nitzschia frustulum-liebetrichii*, *Nitzschia palea*

次に、各調査区における珪藻化石群集の特徴を述べる。

### 1) 第Ⅰ区：SE190最下層、西壁土層サンプル1、サンプル2

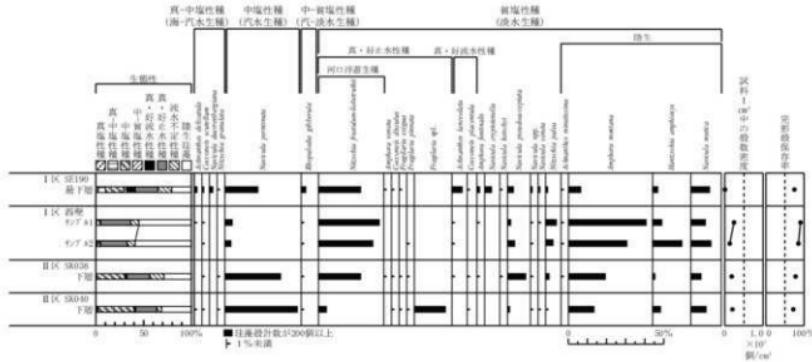
SE190最下層では、真塩性種（海水生種）から貧塩性種（淡水生種）まで多様な分類群が産出する。貧塩性種（淡水生種）で真・好止水性種が24%、陸生珪藻が21%と多く、次いで中塩性種（汽水生種）が19%を占める。比較的優占するのは、好止水性種で河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetrichii*である。次に中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*の産出率が高い。他に貧塩性種（淡水生種）では、陸生珪藻の*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、真・好流水性種で中～下流性河川指標種の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性種の*Navicula cryptotanella*、*Navicula pseudoacceptata*などが比較的多く、中・貧塩性種（汽～淡水生種）の*Rhopalodia gibberula*もやや多い。

西壁土層サンプル1、サンプル2では、珪藻の組成、構成とともに類似する傾向を示す。すなわち、陸生珪藻が59%から55%、真・好止水性種が29%から32%を占める。陸生珪藻では、*Amphora montana*を主に*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*の産出率が高い。真・好止水性種では、河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetrichii*が優占する。他に流水不定性種の*Nitzschia palea*、*Navicula pseudoacceptata*、中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*が低率に産出する。

### 2) 第Ⅱ区：SK038下層、SK040下層

SK038下層では、中塩性種（汽水生種）が29%、陸生珪藻が29%、真・好止水性種が24%、流水不定性種が15%を占める。中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*、真・好止水性種で河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetrichii*、陸生珪藻の*Amphora montana*の産出率が高く、流水不定性種の*Navicula pseudoacceptata*、陸生珪藻の*Navicula mutica*などが産出する。

SK040下層では、中塩性種（汽水生種）が38%、陸生珪藻が31%、真・好止水性種が22%を占める。中塩性種（汽水生種）の*Navicula perminuta*が高率に産出し、真・好止水性種では、小型の*Fragilaria* sp1.と河口浮遊性種の*Nitzschia frustulum-liebetrichii*、陸生珪藻では、*Amphora montana*、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*の産出率が高い。



第55図 主要珪藻ダイアグラム

第15表(1) 珪藻分析結果

分類群 貧塩性種(淡水生種)	I区SE190 最下層	I区西壁 サンプル1 サンプル2		II区SK038 下層	II区SK040 下層
<i>Achmanthes hungarica</i>		1	1		
<i>Achmanthes lanceolata</i>	16	1	1	2	
<i>Achmanthes minutissima</i>	2	3	2	2	
<i>Achmanthes saccula</i>	1				
<i>Amphora aequalis</i>	1				
<i>Amphora fontinalis</i>	4	1		2	
<i>Amphora montana</i>	19	218	142	94	58
<i>Amphora veneta</i>	2			2	
<i>Amphora spp.</i>				1	
<i>Caloneis bacillum</i>				1	
<i>Caloneis gilicula</i>				1	
<i>Coccineis disculus</i>	1			2	1
<i>Coccineis placentula</i>	2			3	2
<i>Cymbella minuta</i>	1				
<i>Cymbella silesiaca</i>	1			1	1
<i>Cymbella sinuata</i>	1			1	
<i>Cymbella turgidula</i>	1			1	1
<i>Cymbella spp.</i>	1				
<i>Diploneis boldtiana</i>					1
<i>Diploneis elliptica</i>	1				
<i>Diploneis pseudovalvis</i>					1
<i>Diploneis spp.</i>	1				
<i>Epithemia adnata</i>				1	
<i>Eunotia minor</i>					1
<i>Eunotia paedosa-rhomboidea</i>				2	
<i>Fragilaria construens</i>	1			2	
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>venter</i>				1	1
<i>Fragilaria exigua</i>	1			2	4
<i>Fragilaria pinnata</i>			2	1	1
<i>Fragilaria</i> sp.					71
<i>Gomphonema clevii</i>					1
<i>Gomphonema parvulum</i>	2				
<i>Gomphonema</i> spp.	1				
<i>Hantzschia amphioxys</i>	8	26	71	6	18
<i>Navicula confervacea</i>					1
<i>Navicula contenta</i>			1	8	4
<i>Navicula cohni</i>					1
<i>Navicula cryptocephala</i>	1				1
<i>Navicula cryptoteneolla</i>	11				
<i>Navicula elginiensis</i>	1			1	
<i>Navicula gallica</i>				2	
<i>Navicula kotschyi</i>	1			3	
<i>Navicula laevissima</i>	1				
<i>Navicula mutica</i>	29	41	49	26	35
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>	1	6	8	1	3
<i>Navicula pseudoacceptata</i>	9	9	17	47	5
<i>Navicula pusio</i>	1				
<i>Navicula veneta</i>	3	1			1
<i>Navicula</i> spp.	3	3	3	1	4
<i>Nitzschia debilis</i>	1	1			
<i>Nitzschia frustulum-liebetrichii</i>	65	171	132	108	18
<i>Nitzschia palea</i>	3	30	17	9	3
<i>Nitzschia umbonata</i>					1

第15表(2) 珪藻分析結果

分類群	I区SE190	I区西壁		II区SK038	II区SK040
	最下層	サンプル1	サンプル2	下層	下層
<b>貧塩性種(淡水生種)</b>					
<i>Pinnularia borealis</i>	1		1	1	1
<i>Pinnularia microstauron</i>					1
<i>Pinnularia obscura</i>				1	6
<i>Pinnularia schoenfelderi</i>				1	7
<i>Pinnularia subcapitata</i>					2
<i>Pinnularia viridis</i>				1	
<i>Pinnularia spp.</i>					3
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>				1	
<i>Surirella angusta</i>	1			1	
<i>Surirella ovata</i>				1	1
<b>中-貧塩性種(汽-淡水生種)</b>					
<i>Diploneis interrupta</i>	1				
<i>Navicula pygmaea</i>	1				1
<i>Rhopalodia gibberula</i>	7	1	1	1	1
<b>中塩性種(汽水生種)</b>					
<i>Achnanthes brevipes</i>	1				
<i>Amphora holsatica</i>	2				
<i>Melosira sp. n.</i>					1
<i>Navicula perminuta</i>	51	21	15	143	166
<i>Nitzschia compressa</i>	1			1	
<i>Rhopalodia musculus</i>	1				1
<b>真-中塩性種(海-汽水生種)</b>					
<i>Achnanthes delicatula</i>	4	1			1
<i>Amphora coffeaeformis</i>	1				
<i>Amphora ostraria v. belgica</i>	1				
<i>Cocconeis scutellum</i>	3	1	1	1	4
<i>Cyclotella striata-stylorum</i>	2				
<i>Hedidiscus sp.</i>	1				
<i>Mastogloia sp.</i>	1				
<i>Navicula duerenbergiana</i>	5				
<i>Navicula marina</i>	1				
<i>Nitzschia cocconeiformis</i>	2		1		
<i>Nitzschia granulata</i>	1			2	1
<i>Nitzschia punctata</i>	1				
<b>真塩性種(海水生種)</b>					
<i>Amphora marina</i>	1				
<i>Cocconeis pseudomarginata</i>	1				
<i>Grammatophora oceanica</i>	2				1
<i>Grammatophora sp.</i>				1	
<i>Nitzschia lanceola</i>	1				
<i>Odontella sp.</i>					1
<i>Thalassionema nitzschioides</i>	2				
<i>Triceratium scitulum</i>		1			
合計	97	25	19	156	199
未同定	13	4	4	8	7
破片	104	55	81	140	108
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	6.2 × 10 <sup>4</sup>	2.4 × 10 <sup>6</sup>	1.3 × 10 <sup>6</sup>	1.8 × 10 <sup>6</sup>	2.0 × 10 <sup>6</sup>
完形殻保存率 (%)	51.4	34.5	22.1	53.9	65.6

### (3) 考察

#### 1) 第Ⅰ区 SE190最下層

好止水性種で河口浮遊生種の *Nitzschia frustulum-liebetrichii* や中塩性種（汽水生種）の *Navicula permunita* の産出率が高く、陸生珪藻も認められる。これらの特徴から、河口の汽水から淡水の浅くやや広い安定した水域が想定される。分析対象となった井戸内に、河口の水域から地下水が浸透してきたと推定される。陸生珪藻は湿った壁面に生育していたと推定される。

#### 2) 第Ⅰ区 西壁土層

サンプル1、サンプル2とともに *Amphora montana* を主とする陸生珪藻と好止水性種で河口浮遊生種の *Nitzschia frustulum-liebetrichii* の産出率が高い。こうした特徴から、いずれも調査地は河口の淡水域と湿った陸域が接する沿岸に立地していたと推定される。安定した水域で、停滯しない緩やかに流れる環境が示唆される。

#### 3) 第Ⅱ区 SK038下層

中塩性種（汽水生種）の *Navicula permunita* の産出率が高く、好止水性種で河口浮遊生種の *Nitzschia frustulum-liebetrichii*、*Amphora montana*などの陸生珪藻も多い。こうした特徴から、河口の汽水から淡水の浅く広い安定した水域の環境が示唆され、周囲には湿った陸域が分布していたと推定される。

#### 4) 第Ⅱ区 SK040下層

中塩性種（汽水生種）の *Navicula permunita* の産出率が高く、好止水性種で小型の *Fragilaria* sp.1 と *Amphora montana*などの陸生珪藻が伴われる。これらの特徴から、汽水域でやや不安定な水域が示唆される。周囲には湿った陸域が分布していたと推定される。

### ○土壤分析のまとめ

箱崎遺跡92次発掘調査で花粉分析、植物珪酸体、珪藻分析を行った。各遺構および堆積層とも花粉化石が極めて少なく、堆積速度が速いか、淘汰を受け堆積したと推定された。各遺構および層準も周辺に河口の汽水から淡水の水域が分布しており、周囲には沿岸の湿った陸域の環境が分布していた。なお、時代によって水環境は変化しており、12世紀？のⅠ調査区西壁土層の時期は淡水域であり、調査地あるいは近傍に水田が分布していたと判断された。13・14世紀のⅠ調査区SE190最下層とⅡ調査区SK038下層の時期は、汽水も混在する環境へと移り変わり、同じく13・14世紀のⅡ調査区SK040下層では、ほぼ汽水の環境であったと推定された。Ⅱ調査区SK038下層とSK040下層は水田土壤の混入もしくは投棄が想定された。SK038の周囲には陽当たりの良い開けた比較的乾燥した環境が分布しており、回虫卵の少量の産出から、周囲に居住城ないし生活城があったとみなされた。

### 【参考文献】

#### (花粉分析)

土質工学会編（1979）土質試験法、p.2-5-1～2-5-23、4-2-1～4-3-11。

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、木下正史編「新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法」、角川書店、p.248-262。

金原正明（1999）寄生虫、西田豊弘・松井 章編「考古学と動物学」、同成社、p.151-158。

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物、医動物学「医動物学 付 実験用動物学 新版

- 臨床検査講座、8』、医歯薬出版、p.9-134.
- 中村 純（1967）「花粉分析」。古今書院、232p.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究、13、p.187-193.
- 中村 純（1977）稲作とイネ花粉。考古学と自然科学、no.10、p.21-30.
- 中村 純（1980）日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録、5、60p.
- Warnock, P. J. and Reinhard, K. J. (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- (植物珪酸体分析)
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学、9、p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学、17、p.73-85.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）。考古学と植物学。同成社、p.189-213.
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－。考古学と自然科学、19、p.69-84.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追及のための基礎資料として－。考古学と自然科学、20、p.81-92.
- (珪藻分析)
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理、42、p.73-88.
- Asai,K.& Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.
- Hustedt,F. (1937 - 1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol.Supp.15, p.131 - 506.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌、6、p.23-45.
- K. Krammer · H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－。植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44.
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27、p. 1 -20.
- Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh - water diatoms. 333p, National Environmental Research Center.
- 渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指數DAIp<sub>o</sub>, pH耐性能。内田老鶴園、666p.

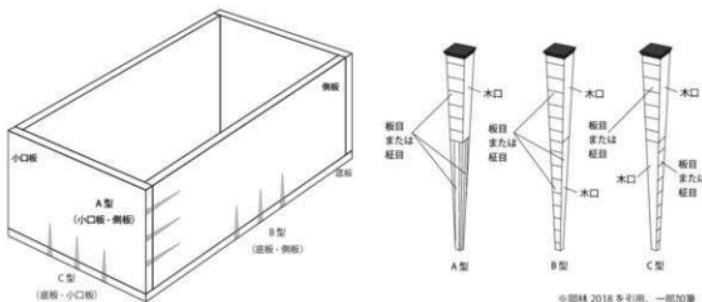
## 1.はじめに

箱崎遺跡第92次調査のSR152からは木棺に使用した鉄釘が10数点出土している。木棺自体は木材のため埋蔵中に腐朽して既に失われているが、鉄釘には木棺の存在を示す木材の痕跡が錯化した状態で残存している。鉄釘にわずかに残る木材の痕跡を各種顕微鏡で観察し、木材の組織・構造など解剖学的形質を根拠に分類することで木棺構造の推定が可能である。本稿では鉄釘に残存する木材を観察・分類し、木棺構造について推定した結果について報告する。

## 2. 器物の基礎構造

木棺をはじめとする箱型の器物の基本的な構造と使用する釘の部位については概ね以下の様に定義されている。

- ・器物の身は底板1枚・側板2枚・小口板2枚の5枚で構成する
- ・底板・側板の木取りは材の繊維方向が板の長軸報告に一致する
- ・小口板の木取りは材の繊維方向が水平になる
- ・側板と小口板は底板の上に乗る
- ・釘付される板材の組合せは、小口板と側板、底板と側板、底板と小口板の3通り



第56図 器物の基礎構造（左）と釘の木質パターン（右）

上記定義により釘に反映される木材断面のパターン（以下、木材パターン）は第56図の様になる。SR152から出土した13点の鉄釘に対し、鉄釘の頭部側と先端部側の木材パターンを顕微鏡観察により特定し、出土状況等と比較・検討することで木棺構造を推定する。

## 3. 鉄釘の観察結果

鉄釘13点の顕微鏡観察の結果を第16表に示す。内訳はA型7点、B型2点、C型2点、不明1点である。A型の198・201・202・203・204は頭部側の木材パターンを確認することができなかつたが、先端部側の木材の繊維方向が釘の長軸と平行となるためA型と判断できる。各釘の出土状況は、A型は木棺推定範囲の四隅、B型・C型は北側の木棺推定線の北側短軸にそれぞれ集中している。

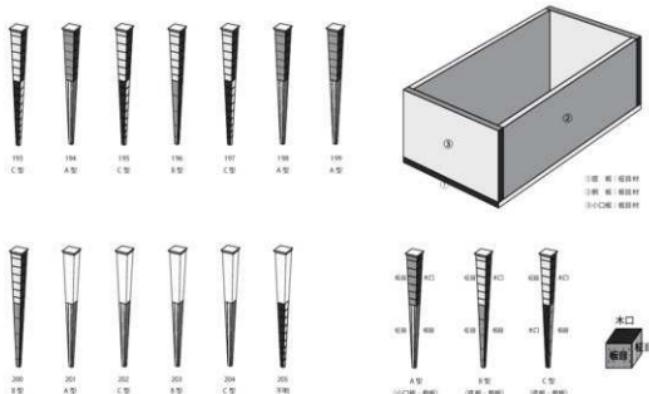
第16表 鉄釘の観察結果

図番号	観察結果			図番号	観察結果		
	木材パターン	頭部	先端部		木材パターン	頭部	先端部
第34図193	C型	柾目・木口	木口・柾目	第34図200	B型	柾目・木口	板目・木口
第34図194	A型	板目・木口	柾目・板目	第34図201	A型	-	柾目・板目
第34図195	C型	柾目・木口	木口・柾目	第34図202	A型	-	柾目・板目
第34図196	B型	柾目・木口	板目・木口	第34図203	A型	-	柾目・板目
第34図197	C型	柾目・木口	木口・柾目	第34図204	A型	-	柾目・板目
第34図198	A型	板目・木口	柾目・板目	第34図205	不明	-	木口・柾目
第34図199	A型	板目・木口	柾目・板目				

#### 4. 若干の考察-木棺の構造の推定-

鉄釘の木材パターンからSR152に納められた木棺の構造について推定する。木棺を構成する小口板・側板・底板が第56図の定義により全て板目材と仮定した場合、鉄釘の木材パターンは、A型は頭部が柾目・木口・先端部が柾目・板目、B型は頭部が柾目・木口・先端部が柾目・板目、C型は頭部が柾目・木口・先端部が木口・板目となる。観察結果と比較すると、B型は一致するが、A型の頭部とC型の先端部がこれと一致せず、仮定した木棺の構造に矛盾が生じることになる。

A型は小口板と側板、C型は底板と小口板の連結に用いるものであり、矛盾の生じたA型の頭部とC型の先端部はいずれも小口板の木取りを示すものである。そこで小口板を板目材ではなく柾目材とすると、A・B・C型全ての木材パターンが矛盾なく一致する。鉄釘の木材パターンにより、SR152の木棺は小口板が柾目材、側板と底板が板目材で構成されていた可能性が推定できる。



第57図 鉄釘の木材パターン（左）と木棺の想定図（右）

#### 【参考文献】

岡林孝作2018『古墳出土の釘に付着した材組織の観察からみた木棺の用材利用法と棺構造の復元的研究』平成27年度～平成29年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所

## 第6節 総括

箱崎遺跡第92次調査では、鎌倉、室町、戦国、江戸時代、近代にかけての遺構・遺物を確認した。以下では、調査成果を箱崎遺跡の他地点の調査成果と比較しつつ報告の補足を行い、総括に代えたい。文中の「〇次」は箱崎遺跡内の調査次数を指し、「〇集」は福岡市埋蔵文化財調査報告書の集数を指す。

第I区で弥生時代中期土器片（第15図47）と黒曜石片（第2表5098、第5表5125）が、第II区で弥生時代後期末土器片（第44図254）が確認され、この時期の活動痕跡がわずかながらうかがわれる。箱崎遺跡では、20次I区（767集）で夜臼式甕片が、6次（459集）・26次（853集）で磨製石斧が出土している。

第I区では、下層の第2面で、本格的な居住城（第1面）形成前の地割りや整地・埋め立てに關係しそうな溝を数条確認した。第2面上・第1面下の堆積層は、遺物や炭を含む汚れた暗色粘質砂やブロック土堆積である。明確な整地層や埋め立ての単位が把握できたわけではないが、客土的な様相も示している。

第I区第2面の木棺墓SR152は、鉄釘の位置から木棺サイズを幅58×長さ168cmと推定した。箱崎遺跡の他の木棺墓の推定サイズを見ると、21次（705集）・SX153（65×170cm。12世紀中頃）、SX456（50×180cm。12世紀中頃）、22次（811集）・SX0023（60×135cm。12世紀前半～中頃）、SX0024（50×160cm。12世紀後半）、SX0033（60×180cm。12世紀後半）、SX0040（55×170cm。12世紀後半）、SX050（70×200cm。12世紀後半）、27次C区（812集）・SK2028（55×180cm。13世紀前後）、37次（951集）・SK290（50×150cm。12世紀中頃～後半）、41次（854集）・SK63（50×150cm。12世紀中頃～後半）、46次20-c区（948集）・SX25（40×180cm。13世紀後半～14世紀）などを確認できる。副葬品の量や質には違いがあるが、12～13世紀という時期や、木棺の大きさ（50～70×160～180cm）は概ね同じである。墓壙上に礫を配置する事例は、24次（768集）・SX07（12世紀中頃）がある。24次SX07の上部石組は2.5×1.5mの範囲で、墓壙内に木棺や鉄釘は確認されていないが、墓壙底面に礫を配置する点が、本調査SR152と共通する。

第II区の土師器埋納土坑SX044については、1. 小皿は上向きに正置する、2. 坯は伏せる、3. 大半がヘラ切り底の坯・小皿の中に、糸切り底の小皿（231）と坯（236）が1点ずつ含まれる、4. 他よりも細かく割られる小皿・坯があり（231・232・236）、うち231・236は糸切り底である、5. 下層の土師器と上層の土師器の埋没に時間差がある、などの特徴を指摘できる。土師器の埋納行為における何らかの所作を反映している可能性がある。

第II区では、石組・結桶を井筒とする井戸SE063（16世紀後半埋没）を確認した。石組・結桶井戸は、3次（262集）・SE09（15～16世紀）、23次（551集）・SE01（17世紀後半）、27次A区（812集）・SE049（14世紀代か）、40次（948集）・SE01（15世紀後半代か）、41次（854集）・SE33（時期不明）、46次20-b区（948集）・SE220（時期不明）、64次（1128集）・SE1147（14世紀頃）、67次（1165集）・SE307（最下部の井筒は曲物と推定。14世紀以降）、73次（1316集）・SE044（17世紀頃）などを確認できる。23次・SE01は石組に6点の板碑を転用しており、本調査のSE063と共に点がある。SE063出土の石造品については、井戸石組には板碑（352・353・354）が転用され、井筒内には石塔（350・351）が投棄される、という区別がある。いずれの石造品も長さ20～30cm程度に割られている。

以上、発掘作業・整理報告作業とともに十分なものではなかったが、箱崎遺跡第92次調査によって、箱崎遺跡北東端の資料が新たに取得された。今後の箱崎遺跡研究への寄与が期待される。



1. 第Ⅰ区第1面全景（北から）



2. 第Ⅰ区作業風景（南から）

図版2



1. 第I区第1面全景（南東から）



2. 第I区SE096ほか（南西から）



1. 第Ⅰ区第2面南側（南東から）



2. 第Ⅰ区第2面北側（南東から）



1. 調査区南壁土層（東側）



2. 調査区南壁土層（西側）

3. 調査区西壁土層（南側）

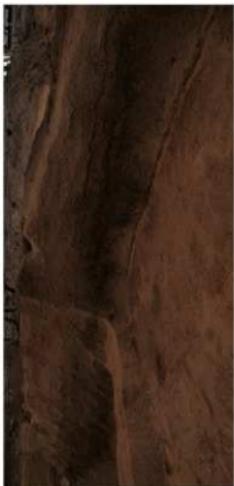


4. 調査区西壁土層（中央）

5. 調査区西壁土層（北側）



6. 中央ベルト土層（西側）



7. 中央ベルト土層（東側）



1. SL051 (西から)



2. SL147 (南から)



3. SK008 (北東から)



4. SK023 (南東から)



5. SK025 (北西から)



6. SK063 (東から)



7. SK014 (南東から)



8. SK153 (北東から)

図版 6



1. SK027 (南東から)



2. SK006 (東から)



3. SK131 (北から)



4. SK005 (東から)



5. SK073 (北から)



6. SK019 (東から)



7. SK026 (南西から)



8. SK018 (南から)



1. SK138 (南東から)



2. SK022 (東から)



3. SK022 (北東から)



4. SE035 (東から)



5. SE155 (東から)



6. SE056 (南東から)



7. SE047 (北西から)



8. SR152 (北東から)

図版 8



1. SR152 (北東から)



2. SR152 (北から)



3. SR152 (東から)



4. SR152 (南から)



5. SR152 (北から)



6. SX168 (南西から)



7. SE196 (南西から)



8. SE195 (南西から)



1. SE193 (南西から)



2. SE193 (南西から)



3. SE192 (南西から)



4. SE191 (南西から)



5. SE190 (北から)



6. SE190 (南西から)



7. SE158 (南東から)



8. SE158 (南西から)

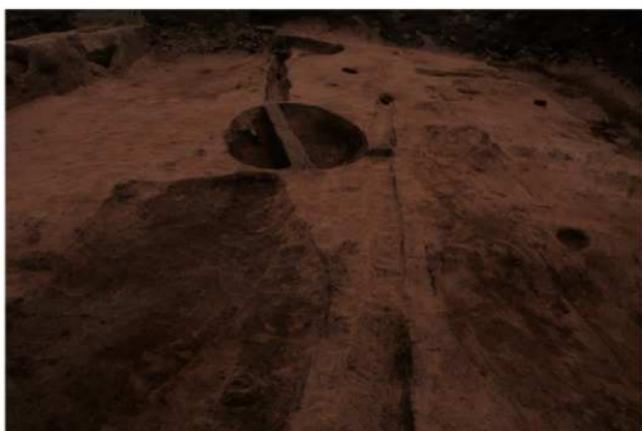
図版 10



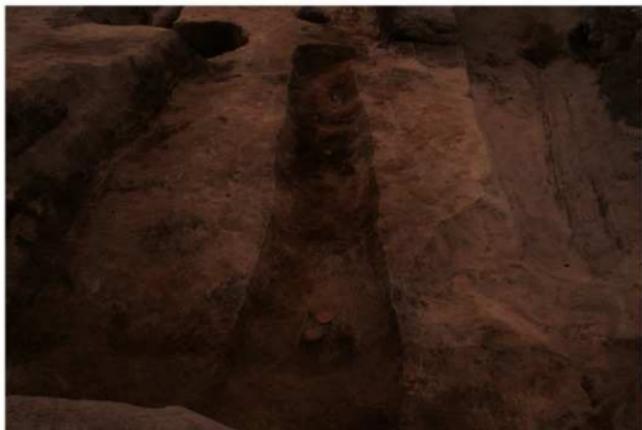
1. SK160 (南から)



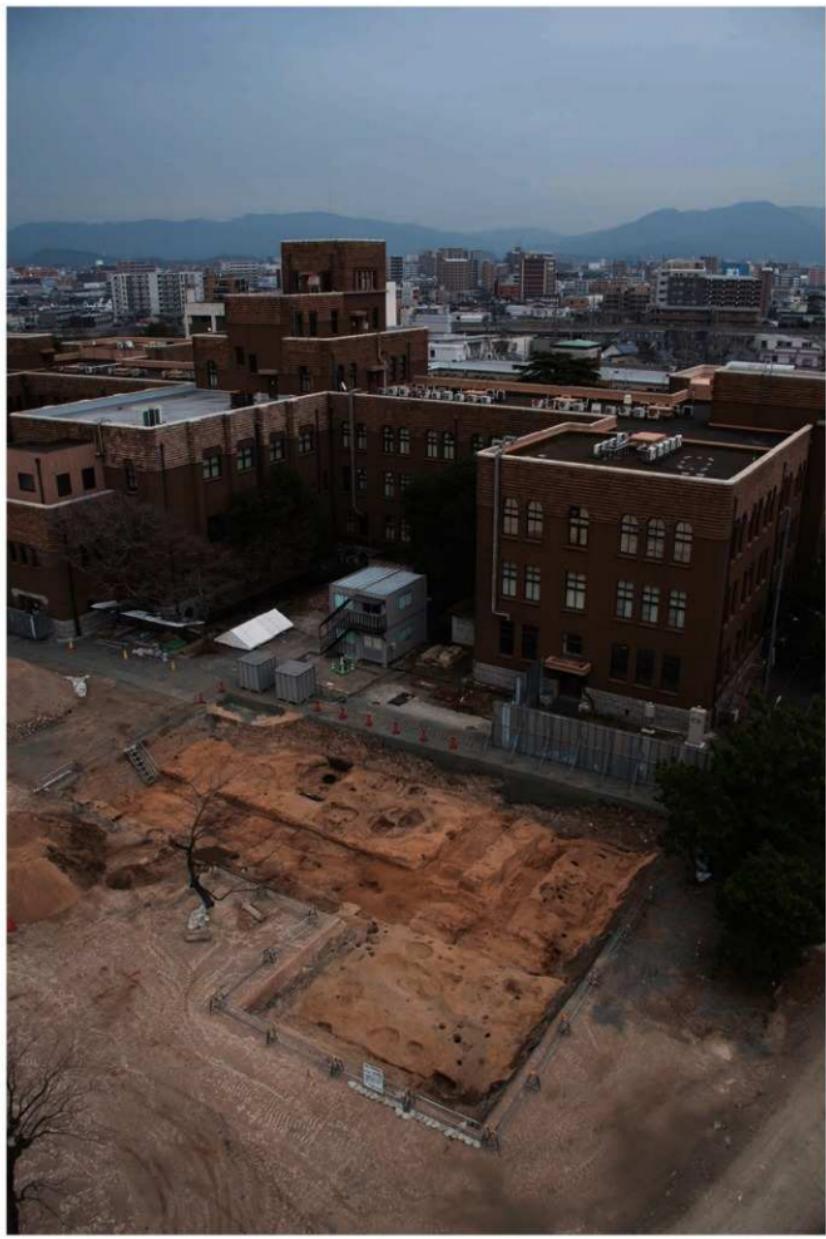
2. SD164・165 (南東から)



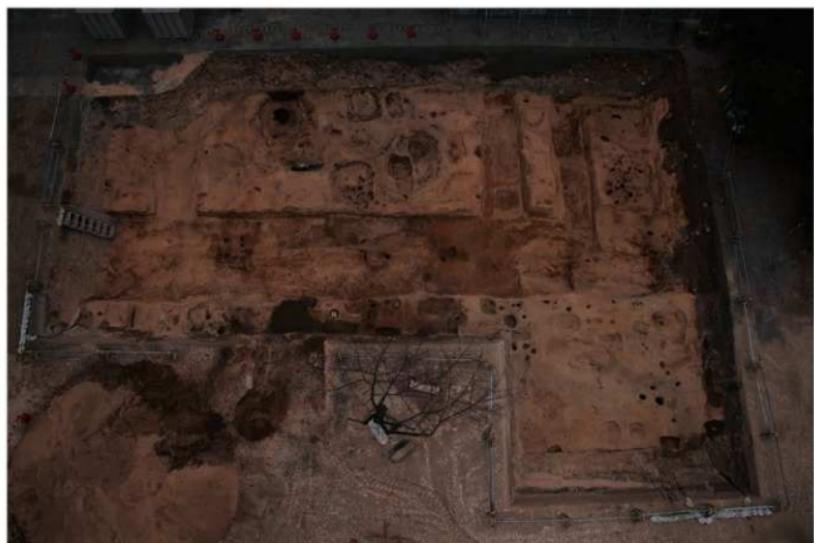
3. SD161・162 (南東から)



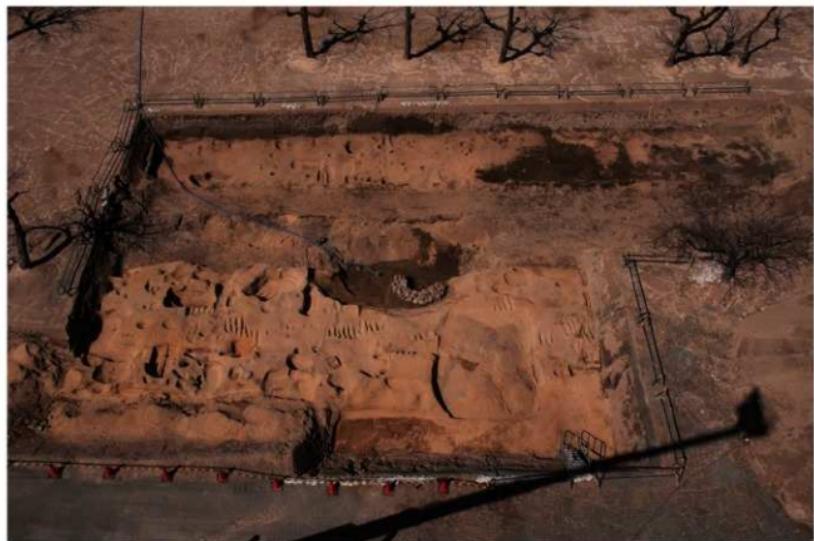
4. SD163 (南西から)



1. 第 II 区全景（西から）



1. 第II区全景（北西から）



2. 第II区全景（南東から）



1. 調査区南壁土層東側（東から）



2. 調査区南壁土層西側（北から）



3. 調査区西壁土層南側（東から）

図版 14



1. SX044 上部（南西から）



2. SX044 下部（南西から）



3. SK034 (北西から)



4. SK033 (南西から)



5. SK030 (南西から)



6. SK042 (西から)



7. SK042 (南から)



8. SK042 (東から)



1. SK037 (南西から)



2. SK035 (南西から)



3. SK032 (西から)



4. SK038 (東から)



5. SK036 (南から)



6. SK040 (南東から)



7. SK022 (東から)

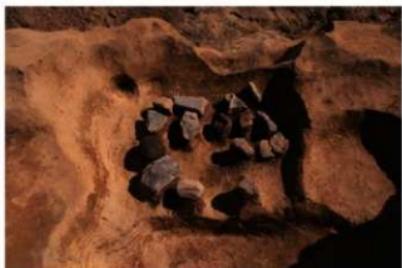


8. SK054 (南から)

図版 16



1. SK056 (北東から)



2. SK057 (北西から)



3. SK020 (北西から)



4. SK019 (南西から)



5. SK002 (北西から)



6. SE039 井筒 (南西から)



7. SE063 井筒 (北西から)



8. SE064 井筒 (北西から)



1. SE039 (北東から)



2. SE063 (北西から)

図版 18



1. 6 図 3

2. 12 図 17

3. 13 図 25

4. 15 図 35



5. 13 図 32

6. 15 図 42

7. 15 図 48



8. 16 図 59

9. 16 図 60

10. 16 図 61

11. 26 図 137

12. 32 図 166



13. 24 図 128 ~ 134

1. 第 I 区出土遺物（縮尺不同）



1. 38 図 209 ~ 236



2. 第II区出土遺物（縮尺不同）

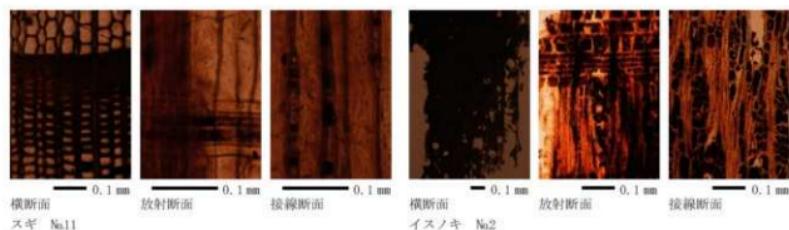


- 1 フネガイ科?  
 2 イボタガキ科?  
 3 サメ類椎骨  
 4 ハタケ科鰓蓋骨 左  
 5 ハタケ科前鰓蓋骨 左  
 6 アジ科棗鱈  
 7 クロダイ属頭骨 左  
 8 マダイ上後頭骨  
 9 マダイ上後頭骨  
 10 フグ科背骨 左  
 11 ヒラメ椎骨  
 12 カレイ科椎骨  
 13 ガエル類撓尺骨 左  
 14 スッポン中腹骨板  
 15 ヘビ類椎骨  
 16 ヒト頭頂骨  
 17 ヒト下頸骨  
 18 ヒト歯(第一大臼歯)  
 19 ヒト胫骨 右  
 20 ネズミ科下頸骨 左  
 21 ネズミ科上脛骨 左

1-5, 7-11, 13, 14, 16-19 ─ 5.0mm  
 6, 12, 15, 20, 21 ─ 1.0mm  
 括弧内は、検出箇所



- |               |                         |                       |
|---------------|-------------------------|-----------------------|
| 22 イヌ下顎骨 左    | (No.28 I区 SD163)        | 22-24, 26, 28 - 5.0mm |
| 23 イヌ大腿骨      | (No.2 I区 SP074)         | 25, 27, 29-32 - 5.0mm |
| 24 ウマ歯 右      | (No.13 I区 SE193塊方)      | ※(内は、検出箇所             |
| 25 ウマ上腕骨 右    | (No.24 I区 1面下4区 R1)     |                       |
| 26 ウマ基節骨(後肢)  | (No.36 I区 黒褐色(II下層)T6南) |                       |
| 27 クジラ目椎骨     | (No.12 I区 SE193 )       |                       |
| 28 イルカ類歯      | (No.10 I区 SE190 )       |                       |
| 29 イルカ類椎骨     | (No.18 I区 SX036 )       |                       |
| 30 ニホンジカ?鹿角   | (No.46 II区 SK020 )      |                       |
| 31 ニホンジカ肩甲骨 左 | (No.30 I区 SX180 )       |                       |
| 32 ニホンジカ下顎骨 左 | (No.14 I区 SE195塊方)      |                       |



1. 木材

• SK042

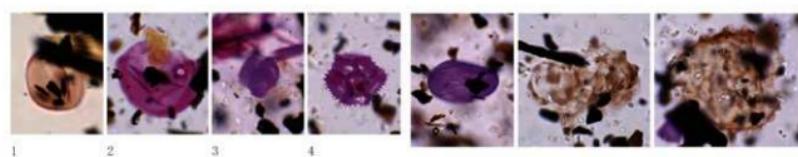


1~3 : 1.0mm

4~11 : 1.0mm

2. 炭化種実

※○内は、検出箇所



1. スギ (I区SK038最下層)  
2. イネ科 (II区SK038下層)  
3. アブラナ科 (II区SK038下層)  
4. タンボボ亞科 (II区SK038下層)  
5. シダ植物单条溝胞子 (I区SK038最下層)

— 10 μm

3. 花粉



1. 植物珪酸体

— 50  $\mu$ m —

※( )内は、検出箇所



— 10 μm —

## 第3章 第102次調査の記録（1）

### 第1節 調査の概要

第102次調査地点は、旧九州大学箱崎キャンパス内の工学部本館及び心理学教室の西側に位置し、九州大学埋蔵文化財調査室が設定する箱崎キャンパス発掘調査グリッドでは、M・N-34～39内に該当する。総調査面積は3,411.3m<sup>2</sup>、調査期間は令和元年9月3日～令和2年2月28日である。

道路建設に伴う発掘調査であるため、調査区は狹長なものとなっており、また排土処理の都合もあって、調査は対象地を1～6の複数区に分けて実施した。そして調査着手ごとに番号を付したため、区番の配置は不規則となっている。また、遺構番号の割り振りは調査区ごとで行なっており、それぞれ4桁の番号を付し、4桁目を調査区番号としている。今回は、第102次調査5区内、南西側に位置する2・4・6の各区（第58図）について報告を行ない、残りの北東側1・3・5区、及び調査成果の総括は令和4年度に行なう予定である。

### 第2節 2区の調査

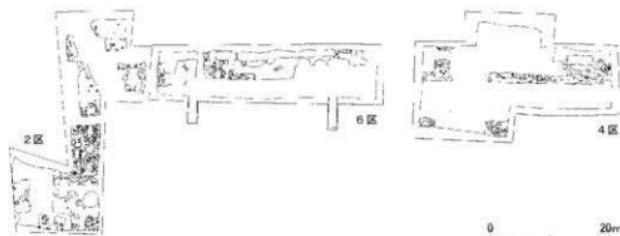
#### 1. 調査の概要

2区は第102次調査区南西端に位置する調査区であり、その西側は第92次調査第II地点となる。調査面積は457.3m<sup>2</sup>。調査はまず重機による表土の剥ぎ取りを行ない、表土下0.7～1.2m、標高2.3～2.6mの明黄褐色（2.5Y6/6）～黄褐色（2.5Y5/4）砂層（砂丘面）上に調査面を設定し、発掘を開始した（第59図）。大半の調査面は1面のみの調査であるが、調査区東端の一部では、表土下0.9m、標高2.8mの黄褐色（2.5Y5/4）砂層上で遺構を検出し、その下のオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土を挟んだ黄褐色（2.5Y5/3）砂層上においても、遺構の存在を確認したため（第59図土層4）、このごく狭い部分のみ2面の調査を実施している。

#### 2. 遺構と遺物

##### （1）土坑（SK）

多数の柱穴と共に、2区中央付近で多數確認できた（第60図）。様々な形態のものが存在するが、平面形から軸線を窺うことのできるものは、九州大学構内建物も含む地域の地割りに沿う場合が多い。また、内部に多量の礫を充填するものが存在するが、これらは別項にて触れる。



第58図 第102次調査2・4・6区（1/80）

### SK2001 (第61図)

SK2020の南東側、SK2002の北西側に位置し、SK2013の一部を切り込んでいる。平面は北側の2辺がやや直線的な不整形を呈しており、長さ1.3m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。壁面の立ち上がりは急で垂直に近く、底面は平坦である。

出土遺物（第63図1・2）

1・2は竜泉窯系青磁で、1は碗、2は盤の口縁部片。2は口縁部に輪花を有する。

### SK2002 (第61図)

SK2001の南東側に位置し、南東側をSK2005に切り込まれ、SK2003の南西側の一部を切り込んでいる。平面は整った長方形を呈し、長さ2.3m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。壁面の立ち上がりは急で、垂直に近く、底面は平坦に仕上げられている。埋土は暗褐色砂質土（7.5YR3/3）を主とし、また出土遺物は土器のみで、釘等の鉄製品は出土していない。主軸はN-65°-Wである。

出土遺物（第63図3～6）

3は竜泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文を施す。4はC群の青花皿口縁部片。5はC群の青花碗。6は土師質の鍋で、外面に煤が付着している。

### SK2003 (第61図)

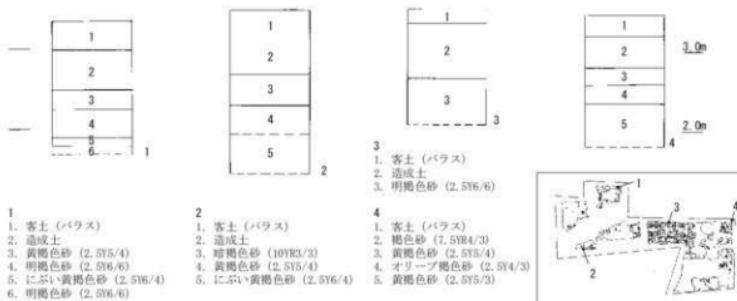
SK2002の北東隣に位置し、南側をSK2003・2005に切り込まれ、北側はSK2017に切り込まれる。平面は長さ1.8m、幅1.0mの楕円形を呈するが、南北の各辺はやや直線的である。壁面の立ち上がりは急で、底面は南東端において深くなり、穴状を呈する。深さは最深部（穴底部）で0.7m、その他は深さ0.5～0.6mで、比較的平坦である。埋土は褐色砂質土（7.5YR3/4）を主とする。

出土遺物（第63図34・35）

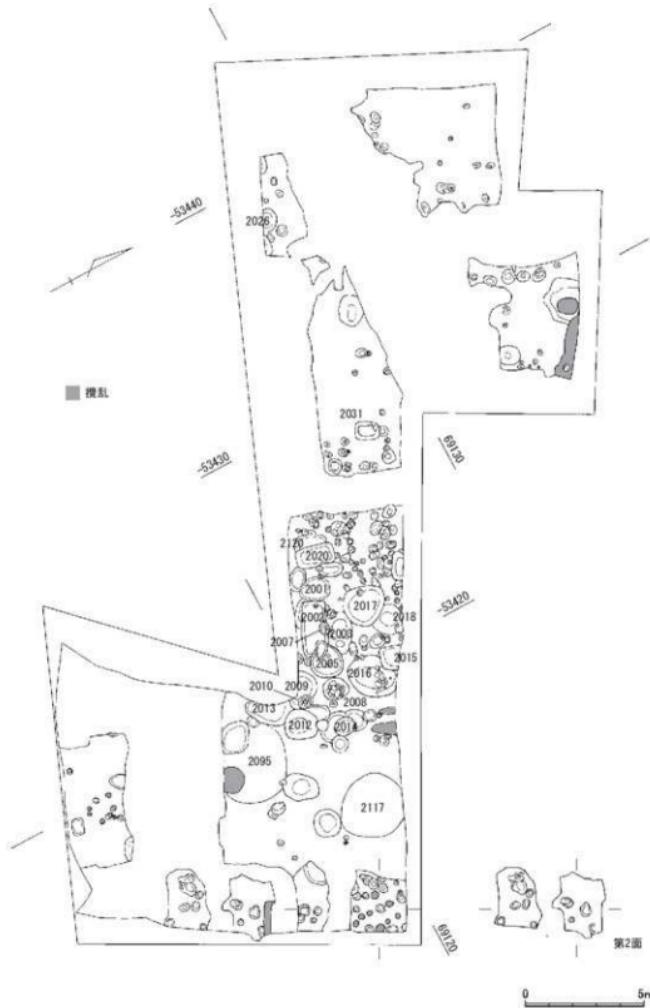
34は土師質の釜で、口径（復元）16.8cm。35は土師質の茶釜で、外器面に煤が付着している。

### SK2005 (第61図)

SK2002・2003の南東側に位置し、SK2002・2003の一部を切り込んでいる。平面は径1.3～1.4mの円形を呈し、深さは0.3mを測る。立ち上がりは急で、平面は平坦である。内部にいくつか礫が散乱していたが、上層部からの出土であり、記録は残していない。SK2008等の東側に位置する礫を内包する土坑からの混入も想定可能である。



第59図 2区土層 (1/1,000, 1/60)



第60図 2区遺構配置 (1/200)

#### 出土遺物（第63図7～10）

7は土師皿、8・9は土師壺である。いずれも底部は糸切りで、7は口径（復元）7.2cm、8は口径（復元）10.0cm、9は口径（復元）12.4cmをそれぞれ測る。10は陶器の鉢で、口縁部内面に2条の突起を有する。

#### SK2009（第61図）

SK2005の南側に位置し、SK2010に切り込まれている。一部は調査範囲内にあり、全形を窺うことはできないが、長さ1.5m、幅0.8～1.0mの楕円～不整円形を呈するものといえようか。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。深さは0.3mを測る。

#### 出土遺物（第63図-15・16）

15は口禿の白磁碗の口縁部片。16は白磁の小椀であり、内面見込みに目跡が残る。

#### SK2012（第61図）

SK2009の南東側に位置し、SK2013の一部を切り込んでいる。平面は径1.3～1.4mの円形を呈しているが、南側の2辺がやや直線的であること、底面の底面形が隅丸方形を呈していることを考えれば、この土坑は本来方形を呈していた可能性を考えることができる。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面も傾きを有しており、その中心も土坑の南西側へと偏している。埋土はにぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）で、底面近くはやや黒みを帯び（10YR3/2）、粒子も細かい。

#### 出土遺物（第63図17）

17は陶器で、瀬戸焼のおろし皿である。

#### SK2013（第61図）

SK2009・2012の南西側に位置し、これらに北東側の一部を切り込まれている。平面は長さ2.0m、最大幅1.1m程の不整形を呈し、南西側の壁面は明確な立ち上がりをみせるが、北東側へ向かうにつれて緩やかとなる。底面は凹面をなしており、深さは最大で0.5m程。

#### 出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

#### SK2014（第62図）

SK2012の北東側に存在する。3基の土坑が切り合ったものであるが、造構のあらかたを掘り上げるまでその判断ができず、3基を一括して番号を付しており、したがってここでは切り合い順に、2014-1（中央）、2014-2（南側）、2014-3（北側）とし、以下に所見を述べる。

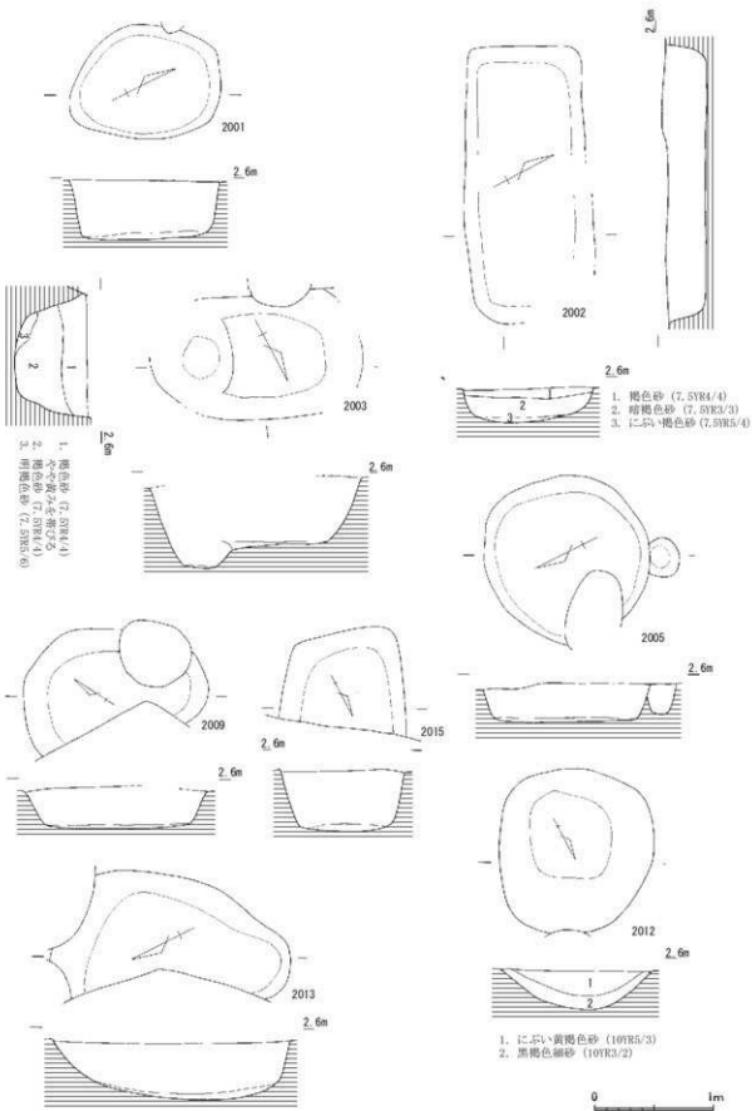
1は平面1.9×1.7m程の円形を呈し、深さは0.3m程である。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面もやや凹面をなしている。2は平面が長さ1.4m、幅1.4m程の楕円形を呈し、深さは0.2mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面もやや凹面をなしている。3は平面が径0.9m程不整円形を呈し、深さは0.1mである。立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へとつながっている。

#### 出土遺物（第63図23・24）

23は竈泉窯系青磁碗で、外面に蓮弁文を施す。24は朝鮮陶器であり、内面見込み及び高台壘付に目跡が残る。

#### SK2015（第61図）

SK2005の北東側に位置し、SK2016の一部を切り込んでいる。調査区内には一部のみが存在し、平面全形を窺うことはできないが、3辺が直線的な「コ」字を描く状況をみても、平面長方形に類する形態を想像することもできようか。壁面の立ち上がりは急で、底面も平坦である。長さ0.9m以上、幅1.0m、深さは0.5mを測る。



第61図 2 [SK(1)] (1/40)

#### 出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

#### SK2016（第62図）

SK2015の南側に位置し、その一部を切り込まれている。平面は長さ2.2m、幅1.8m程の楕円形を呈し、深さは0.4~0.5mを測る。立ち上がりは緩やかで、底面は凹面をなしている。図では、土坑の北半のみに礫が散布する状況を示しているが、これは半裁して南半の調査を先に行なった際、出土したいくつかを図化せず取り上げてしまったため、本来の礫散布範囲はもう少し広いものとなる。礫はまとまらず、個々が分散し南西側へ傾斜して出土しており、土坑廃棄の際、出土した土器と共に北東側の他所、おそらく調査区外から流入したものであることが分かる。

#### 出土遺物（第63図18~22・37~42）

18は白磁皿の口縁部片。19は朝鮮陶器の椀底部片で、高台疊付の4カ所を搔き取っている。内面見込みには目跡が残る。20~22は土師皿。いずれも底部は糸切り。37~39は土師質の捏鉢。40は土師質の釜で、外面に煤が付着する。41・42はすり鉢で、共に土師質である。

#### SK2017（第62図）

SK2003の北側に位置し、その一部を切り込んでいる。平面は1.8×1.6mの不整円形を呈し、深さは0.8mを測る。壁面の立ち上がりは急で、底面もほぼ平坦である。

#### 出土遺物（第63図11~14・35・36）

11・12は土師皿、13は土師壺である。いずれも底面は糸切りによる。14は台付の土師皿で、台部には煤が付着している。35・36はいずれも須恵質で、35は鉢の口縁部片、36は底部片である。

#### SK2018（第62図）

SK2017の東側に位置し、西側の一部を切り込まれている。平面は径1.3m程の円形を呈し、深さは0.4m程である。底面も0.7×0.5m程の円形をなしている。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は狭い。

#### 出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

#### SK2020（第62図）

SK2001の北西側に位置し、SK2120東側を切り込んでいる。平面は長さ1.6m、幅0.8m程の長方形を呈し、深さは0.2m程である。壁面の立ち上がりは明確で、底面も平坦である。出土遺物は土器等のみで、釘等の鉄製品は出土していない。土坑の主軸はN-10°-Eである。

#### 出土遺物（第63図25~29）

25はC群の青花碗。26・27は土師皿で、底面はいずれも糸切り。28・29は土錘。

#### SK2026（第62図）

調査区北西側に位置するもので、北西側の一部は調査区外にあり、全形を知ることはできないが、平面は長さ1.0m、幅0.8m程の楕円形を想定することができようか。深さは0.2~0.3mである。壁面の立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へと続いている。

#### 出土遺物（第63図30~32）

30は青磁碗の口縁部片。31は土錘、32は石錘である。

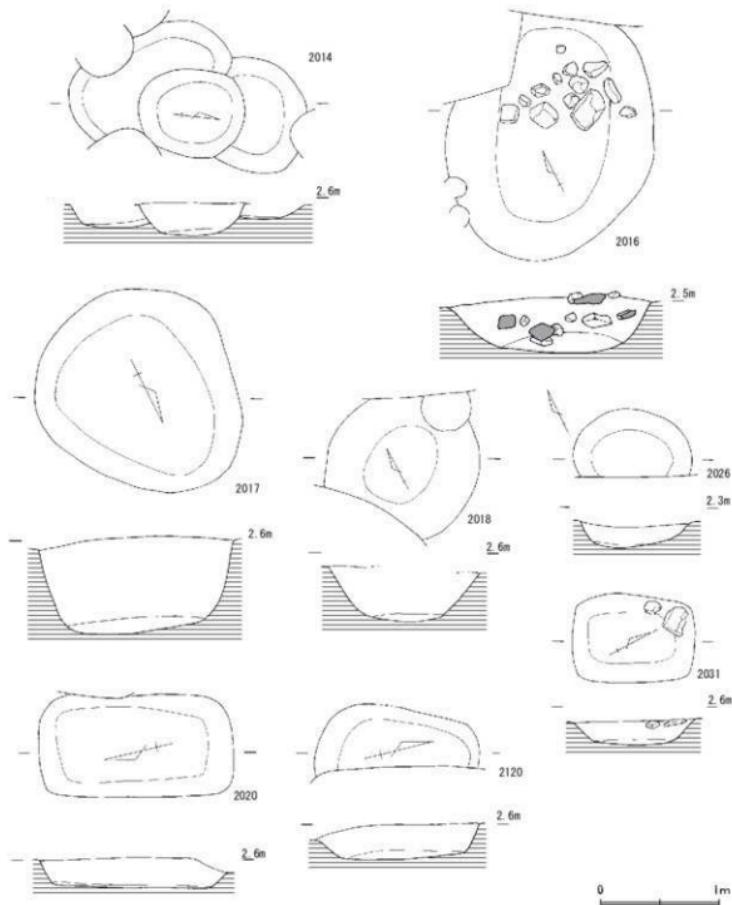
#### SK2031（第62図）

調査区中央北西寄りに位置する。平面は長方形を呈し、長さ1.0m、幅0.6~0.7mを測る。壁面の

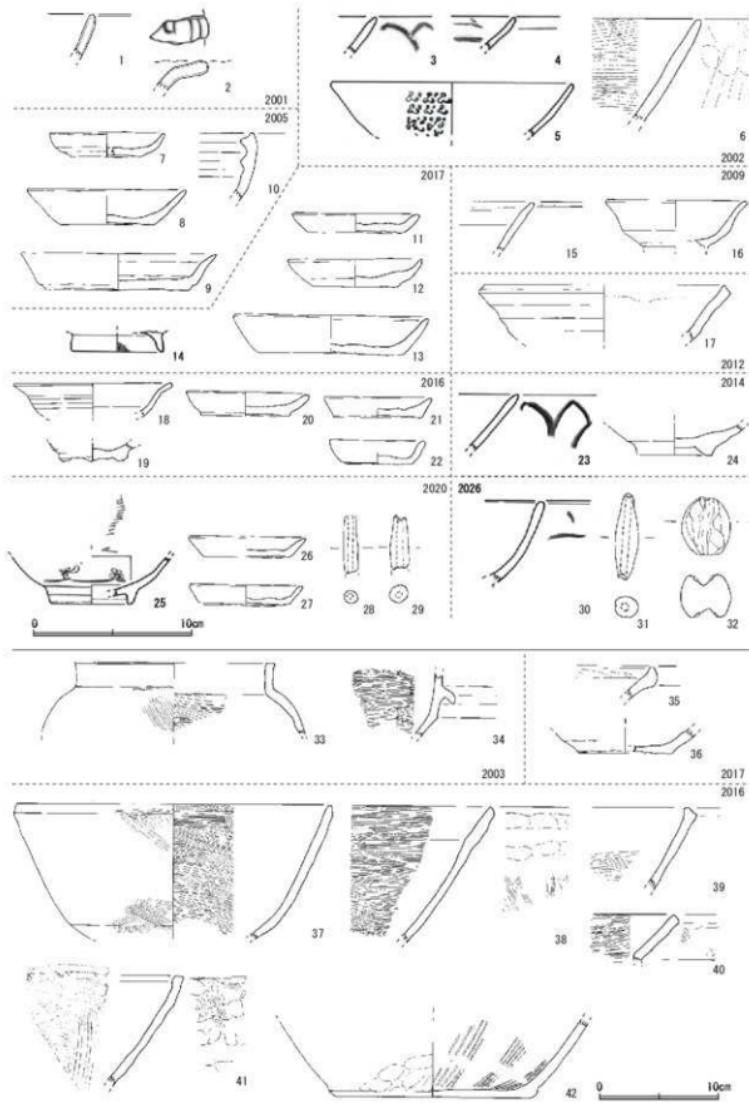
立ち上がりは緩やかだが、底面は平坦である。深さは0.2m程。土坑内北側隅に礫が検出されているが、埋土上部のものであり、この土坑に本来伴うものであるかは不明。

#### 出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。



第62図 2区SK(2) (1/40)



第63図 2区SK出土遺物 (1/4、1/3)

## SK2120 (第62図)

SK2020の西側に位置し、東側の半ば近くを切り込まれている。全形を正確に窺うことはできないが、長さ1.3m、幅0.8m程の隅丸長方形、もしくは梢円形を呈するものといえようか。深さは0.3m。壁面の立ち上がりは、北側が急で、南側は緩やかである。SK2020との関連は不明。出土遺物は無い。

## (2) 井戸 (SE)

2区の調査では、2基の井戸 (SE2095・2117) を確認した。SE2117は井筒が瓦組の近世段階の井戸であり、ここでは調査対象としていない。以下ではSE2095についてのみ所見を述べる。

## SE2095 (第60・64図)

調査区中央南寄りに位置し、北西側の一部をSK2013に切り込まれている。また、井戸の南西側も擾乱で失われている。井戸掘方は、北西側が判然としないが、検出部分をみると、 $3.5 \times 3.0$ m程の梢円形に復元できるだろうか。土層をみれば、南東側の掘方は垂直に近く、北西側はなだらかとなっていることが分かる。井戸側は残っていなかったが、1～5層がかつて井戸側の存在した部分の埋土であり、それをみれば径0.5m程の、おそらく桶組の井筒が存在した可能性が高い。

調査時は標高1.2m前後で湧水したため、部分的に深掘りし井戸底の確認を試みた。標高0.8m前後で砂丘粗砂の存在を確認した。おそらくこの前後で、井戸底が存在するのだろう。

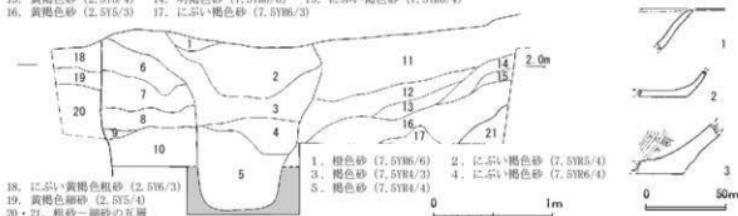
## 出土遺物 (第64図)

遺物出土量は少ない。1は口禿の白磁皿。2は底面糸切りの土師皿、3はすり鉢である。

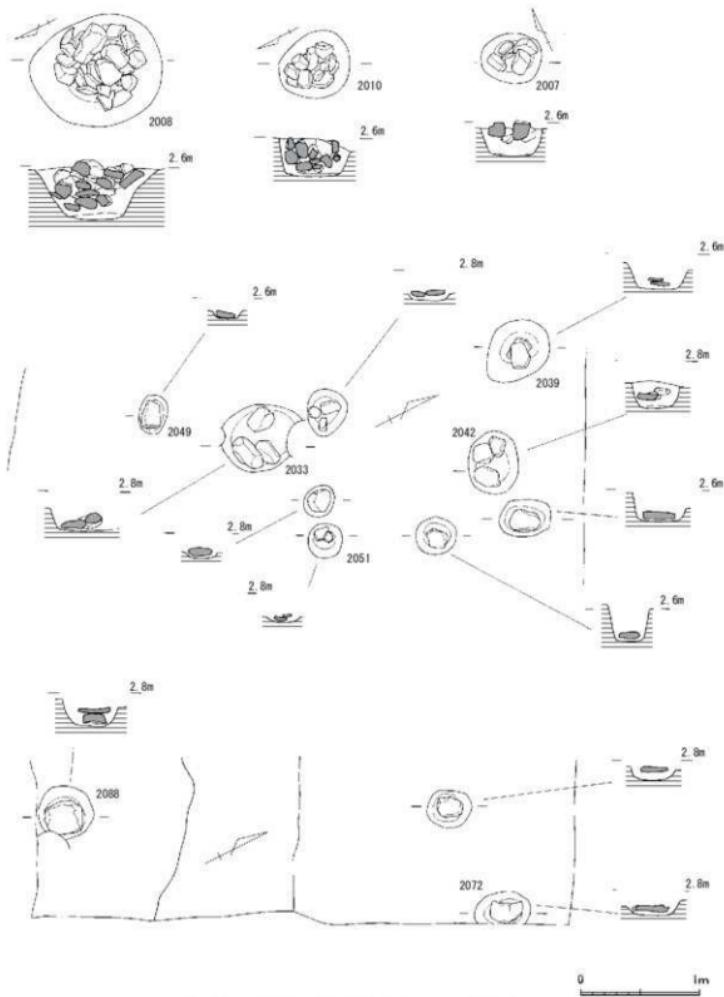
## (3) 磁等を有する土坑 (SK)・柱穴 (SP)

この調査区では、土坑や柱穴に、廃棄後の流れ込み等ではなく、遺構内に磁等の石材を意図的に配置した例を多数確認できた。それには、①：角磁等を充填したもの（第65図上）と、②：扁平石材を遺構底や下面に敷いたもの（第65図中・下：以下では柱穴群とする）の2者がある。まず②については、その形態より柱穴内における柱の沈下を防ぐ礎石としての機能を想定することができるだろう。①にはSP2007やSK2008・2010があり、2007は埋土上面に磁を敷き詰めたもの、2008・2010は、内部に重層的に配置したもの、という違いがある。後者は後に述べるように、土坑の形状に合わせ意図的に磁を配置していることから、ここでは地上構造物の基礎としての機能を想定しておくことにしたい。以下では、それぞれについて、所見を述べる。

6. 棕色砂 (7.5YR4/4) 7. 明褐色砂 (7.5YR5/6) 8. 棕色砂 (7.5YR4/4) 9. 黄褐色砂 (2.5Y6/2)  
10. にぶい褐色砂 (7.5YR5/3) 11. オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4) 12. オリーブ褐色砂 (2.5Y4/3)  
13. 黄褐色砂 (2.5Y5/4) 14. 明褐色砂 (7.5YR6/6) 15. にぶい褐色砂 (7.5YR6/4)  
16. 黄褐色砂 (2.5Y5/3) 17. にぶい褐色砂 (7.5YR6/3)



第64図 2区SE2095 (1/40, 1/3)



第65図 2区塊・根石を有するSK・SP (1/40)

#### SP2007 (第65図上右)

調査区中央に位置し、SK2002・2003を切り込んでいる。平面は径0.4~0.5mの円形を呈し、しっかりとした掘方を有している。深さは0.2m。埋土の上面に角礫4を環状に配置しており、柱穴中央部には凹みを持つ。先にも触れたように、SP2007の礫は厚みをもって充填されておらず、これが削平によるものではなく本来の姿であったならば、これら礫は①の他と異なり、②と同様の柱の沈下を防ぐ根石である可能性もある。

#### 出土遺物 (第66図7)

7はC群の青花皿である。口径11.0cmを測る。

#### SK2008 (第65図上左)

調査区中央に位置し、SK2005の東側、SK2016の南側に位置する。平面は径0.9~1.1mの不整円形を呈し、深さは0.5m程である。壁面の立ち上がりは比較的なだらかである。角礫は遺構の中央にまとまり厚さ0.4mに渡って敷き詰められている。このような礫の配置はこれが意図的に行なわれたことを良く示しているといえる。

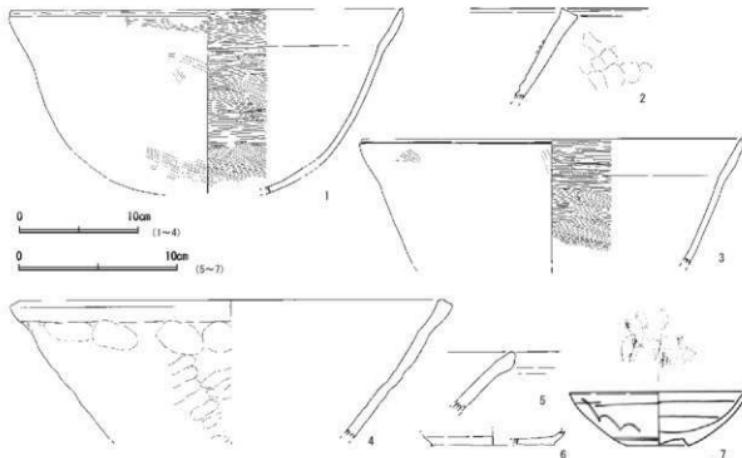
#### 出土遺物 (第66図1~4)

1・3は鍋である。いずれも土師質で、頸部はわずかな屈曲をみせる。外面には煤が付着している。

2・4は捏鉢である。共に土師質で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁端部がわずかに肥厚する。

#### SK2010 (第65図上中)

SK2008の南側に位置し、SK2009を切り込んでいる。平面は径0.6m程の不整円形を呈し、壁面の立ち上がりは急で、深さは0.3mを測る。礫は土坑の中心に厚さ0.3mに渡って充填されており、SK2008の場合と同じく、これが意図的に行なわれたことが分かる。



第66図 磚・根石を有するSK・SP出土遺物 (1/4, 1/3)

### 出土遺物

図示に耐えない、陶器や土師器等の小片が少量出土している。

### 柱穴群（第65図中・下）

これら柱穴は調査区中央部（第65図中）及び南東部（第65図下）にまとまって存在している。

礎石の配置には大きく、i：1石を配するもの、ii：複数石を敷き詰めるもの、iii：複数石を重ねるもの、の3種を見出すことができる。礎石上面の標高は、中央部で2.4～2.7m、南東部ではやや高く2.7m前後を測る。これら配置や標高の違いをみても、当調査区内における柱穴の配置に、建築物の構造や配置を示すような有意性を見出すことはできなかった。しかし、何らかの建築物がこの場所に存在したことは確実だろう。

### 出土遺物（第66図5・6）

5・6はいずれもSP2033出土である。5は玉縁の白磁口縁部片。5は土師壺の底部片である。底面は糸切り。

## 第3節 4区の調査

### 1. 調査の概要

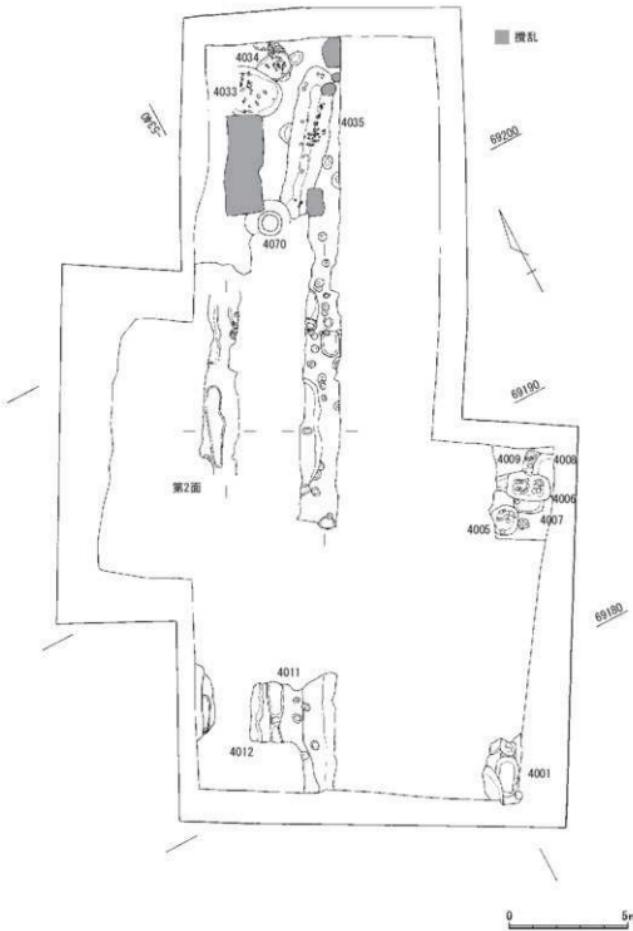
4区は後述する6区の北東側に位置する調査区であり、旧工学部本館西側に位置する。調査面積は591.1m<sup>2</sup>。4区と6区の間には間隔があるが、これはこの部分に構内の解体工事に伴う既設の場内排水用パイプが存在しており、4区と6区における遺構の分布状況からみて、この部分は搅乱が激しく遺構の分布密度も薄いことが想定できることから、調査不要との判断を行なったためである。

調査は排土処理の都合から、調査区を二分して行なった。まず南側から調査に着手し、重機により現地表下1.1～1.2mまでの表土剥ぎを行なって、搅乱土を除去し、標高2m前後の砂丘上面（7.5YR5/6）より調査を開始した。そして終了後に土砂を反転し、残り北側の調査を行なっている。なお、反転後調査区中央の一部分には、その上層の褐色砂層（7.5YR4/3）が残存しており、その部分では2面の調査を行なっている。

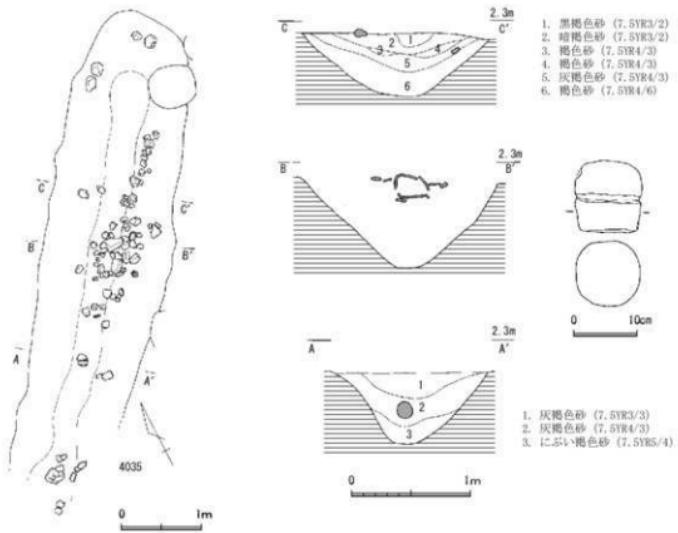
4区は激しく搅乱を受けており、一部にしか遺構は残存していない。その中で、溝（SD）、土坑（SK）、井戸（SE）、墓（ST）といった遺構を確認することができた。以下にその所見を述べる。



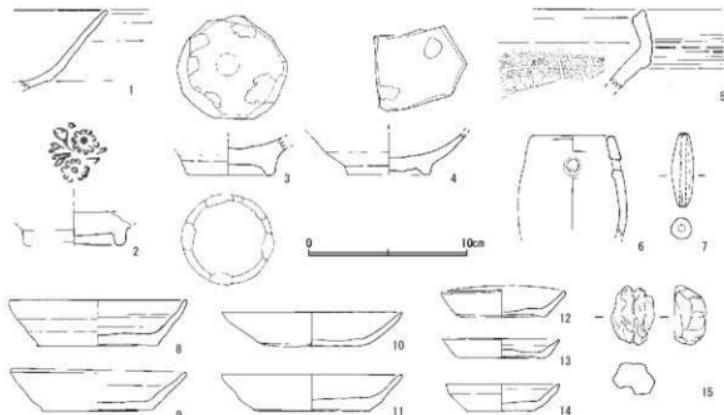
第67図 4区土層（1/1,000, 1/60）



第68図 4区遺構配置 (1/100)



第69図 4区SD4035 (1/60, 1/40, 1/8)



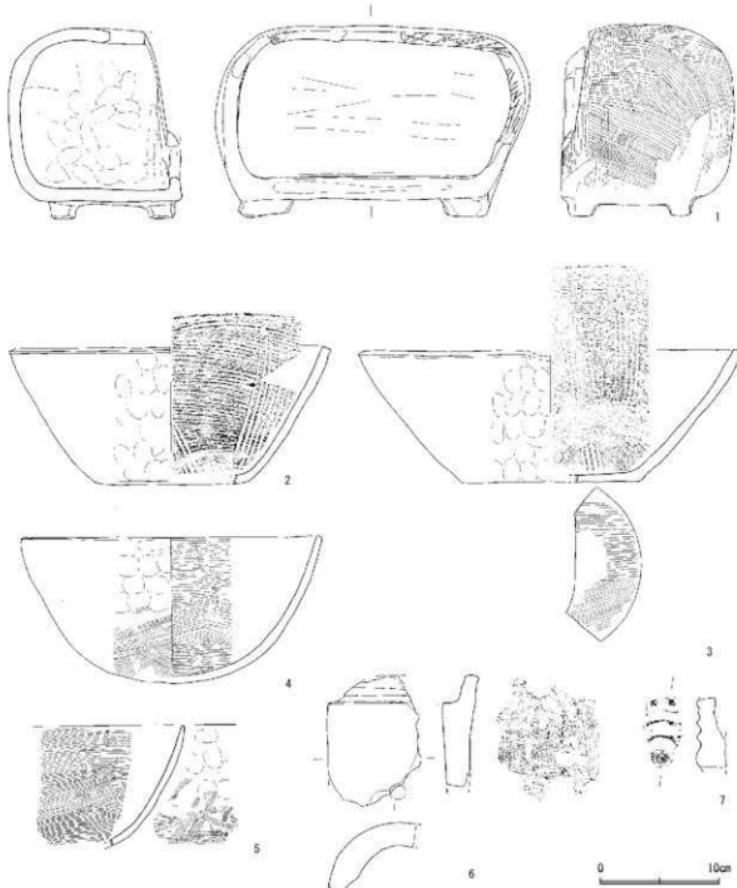
第70図 4区SD4035出土遺物(1) (1/3)

## 2. 遺構と遺物

### (1) 溝 (SD)

#### SD4011 (第72図)

調査区南西側に位置し、北東–南西方向 ( $N-25^{\circ}-E$ ) へ直線的に延びている。両端を搅乱に切られており、長さ 2.5m 分のみが残存する。幅 0.5~0.6m、深さ 0.3m 程で、中央部において浅くなり幅を減じている。埋土は褐色砂質土 (7.7YR4/4)。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、幅に比して掘り込みも深く壁面の立ち上がりも急角度であることから、時期的に新しい可能性もある。



第71図 4区SD4035出土遺物(2) (1/4)

#### **SD4012** (第72図)

調査区の南西側に位置する。SD4011の西側に平行する溝である。溝の西側を搅乱によって切られしており、幅や深さ等、詳細は不明である。埋土や形態等、SD4011と類似しており、こちらもSD4011と同じく時期的に新しいものである可能性がある。

#### **SD4035** (第69図)

調査区の北側に位置し、北東-南西方向 (N-38° - E) へ直線的に延びている。南東側を搅乱によって切られており、区内では長さ 6 m 分のみが確認できる。幅 1.3 ~ 1.5m、深さ 0.6 ~ 0.7m を計り、溝の先端、つまり北東側では次第に浅くなる。溝の断面はやや傾斜の緩やかな「V」字形を呈する。壁面は直線的に延びており、底面は狭い。

埋土の上半部分には、溝中央部を中心に多くの遺物や礫が含まれている。土師質・瓦質土器も大半であり、あまり摩滅をしておらず、第71図1に示す、土師質の行火は、つぶれた状態で出土していた。  
出土遺物 (第70・71図)

(第70図) 1は陶器椀の口縁部片。2はI類の竜泉窯系青磁椀の底部片。3・4は朝鮮陶器の底部片。見込と疊付に目跡が残る。5は備前焼のすり鉢。6は蛸壺、7は管状土錘。8~11は土師椀、12~14は土師皿で、いずれも底面は糸切りによる。15は滑石製の石錘。

(第71図) 1は土師質の行火。底面の四隅に足部を有する。2・3は土師質のすり鉢。4・5は土師質の鍋。いずれも底面に煤が付着している。6は丸瓦。目穴を有し、凹面には布目痕が残る。7は軒丸瓦の瓦当片である。

その他、溝の中位（2層）から、五輪塔の一部が出土している（第69図下）。

#### (2) 井戸 (SE)

#### **SE4070** (第72図)

4区で確認できた井戸は1基のみである。調査区北側に位置し、SD4035を切り込んでおり、南側の掘方の一部を搅乱により失っている。残存部分から類推すれば、井戸の掘方は平面径 2 m 程の円形を呈し、標高 1.7m 以下では瓦組による井側も残存している。井側は4段分があり、底面には4段目と重なって木桶を設置している。標高 0.6m 付近で湧水が激しくなり、掘削を断念した。

出土遺物 (第73図 6 ~ 8)

1は土師壺、2は土師皿で、共に底面は糸切りによる。8はⅢ類の白磁椀で、見込みの釉を輪状に掻き取っている。いずれも掘方の出土。

#### (3) 土坑 (SK)

#### **SK4001** (第72図)

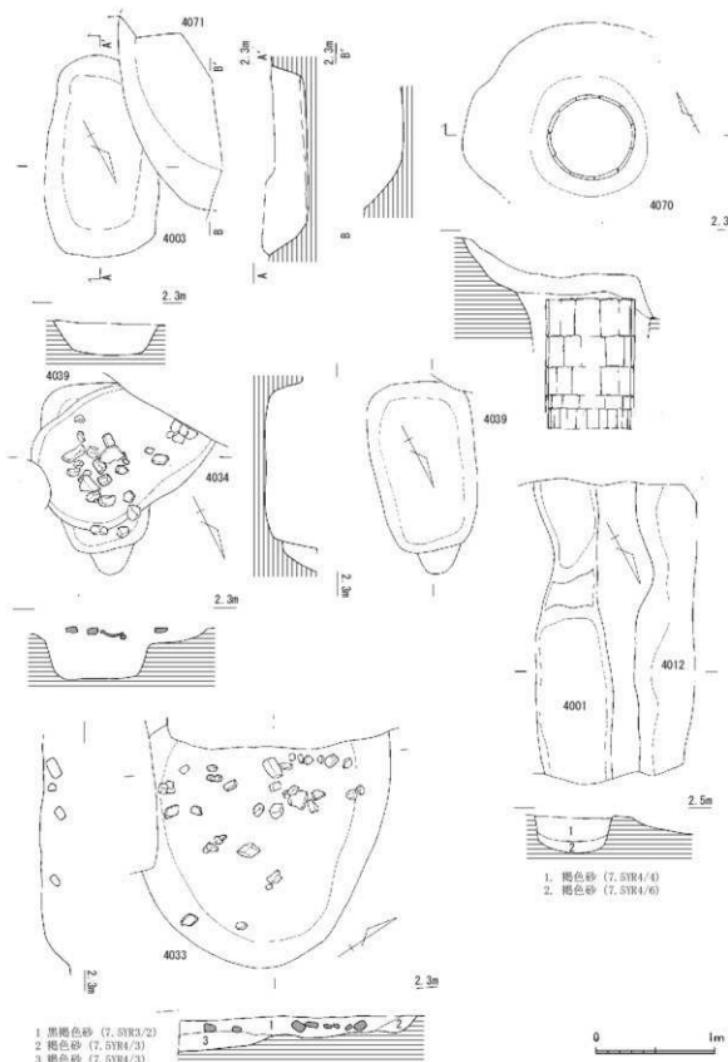
調査区の南端に位置し、その一部をSK4071に切り込まれている。平面は長さ 2.2m、幅 1.8m 程の隅丸長方形を呈し、深さは 0.4 ~ 0.5m を測る。立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

#### **SK4033** (第72図)

調査区の北側に位置し、SK4034を切り込んでおり、北西側の一部は搅乱により失われている。だが、平面形は  $2.3 \times 2.1\text{m}$  の不整円形を呈するといえようか。深さは 0.1 ~ 0.2m を測る。壁面の立ち上がりはゆるやかで、底面も凹凸が激しい。埋土は黒褐色（7.5YR3/2）を主とし、遺構内部には大小の礫が散乱している。大半が底面から遊離しており、流れ込みによる混入である。



第72図 4区SD(2)・SK・SE (1/40)

### 出土遺物

図示に耐えない小片が出土している。

### SK4034 (第72図)

SK4033の東側に位置し、西側の一部を切り込まっている。そして、後述するSK4039のほとんどを真上から切り込んでいる。平面は $1.6 \times 1.1\text{m}$ 程の楕円形を呈するものといえようか。深さは0.1m程と浅い。壁面の立ち上がりはなだらかで、そのまま底面へと続く。SK4034・4039には礫等が散乱していたが、出土位置はいずれも浅く、SK4034に伴うものであることが分かる。礫に混じり、鍋、壺といった大型品の破片が出土している。

### 出土遺物 (第73図1~3)

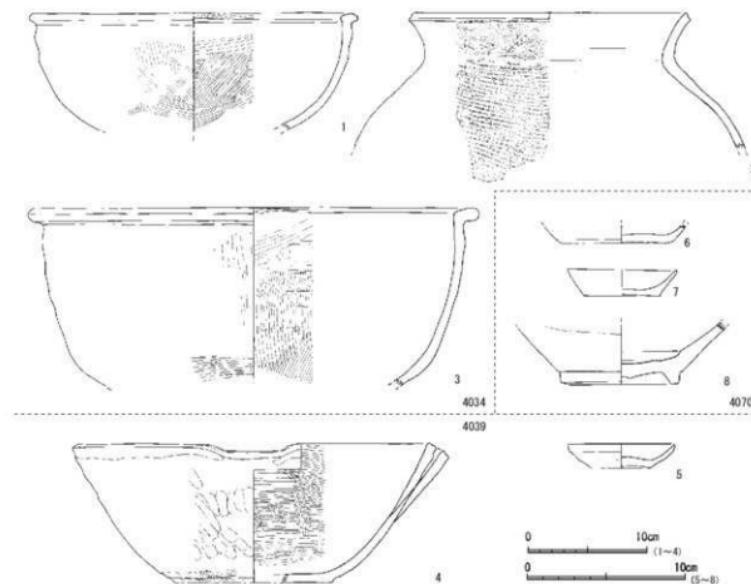
1・3は土師質の鍋で、共に口縁端部を水平方向へ折り曲げている。外面には煤が付着する。2は須恵質の甕で、胴部外器に格子目タタキを施す。

### SK4039 (第72図)

SK4034の直下に位置し、遺構の大半が切り込まれているが、SK4034は浅い土坑であり、その調査終了後に全形を窺うことができた。平面は長さ1.4m、幅0.7~0.9m程の隅丸長方形を呈し、北側の幅が若干狭い。深さは0.3~0.4mである。壁面の立ち上がりは明確で、底面も平坦である。

### 出土遺物 (第73図4~5)

4は土師質のすり鉢。5は土師皿で、底面は糸切り。



第73図 4区SK・SE出土遺物 (1/4、1/3)

#### **SK4071** (第72図)

SK4001の西側に位置し、その一部を切り込む。深さは0.3m程で、壁面の立ち上がりはなだらかである。遺物は出土していない。

#### (4) 木棺墓 (ST)

調査区の東側で、特徴的な土坑の一群、5基（4005～4009）を検出した。1カ所に集中して存在しており、その内の4基（4006～4009）は重層的な切り合い関係にある。加えて、それぞれの軸線が平行もしくは直交しており、互いに密接な関連がある土坑であると考えて良いだろう。平面形は円形（4005）、長方形（4006）、隅丸略方形（4007・4008）と多様であり、土坑の深さも、浅いものから（4004）から、約1mの深いもの（4006）まで存在する。5基の内4基（4005～4007・4009）土坑底面に平石が並べられており、後述するように4005・4006の底面から釘が出土したことから、底面の平石を棺台と判断し、これら5基の土坑を内部に木棺等を収める木棺墓（ST）と考え、以下に記述する。

#### **ST4005** (第74図)

木棺墓群の北西側に位置し、ST4004の一部をわずかに切り込んでいる。東側の一部を搅乱により失っているが、平面は径1.2m程の円形を呈するものと考えて良いだろう。深さは0.3～0.4mを測る。壁面の立ち上がりは緩やかであるが、底面は平坦である。墓坑底面では礫8を検出した。内、大きめの礫5は四隅とその中心、つまり賽の目「五」と同様の配置を取っている。南西半部分に敷き並べており、北東半部分には存在しない。礫は平石を主とし、表面は平坦になるよう設置されている。遺物は、図示した土器片等の他、底面から釘の破片が1点出土している。

#### 出土遺物 (第75図22～24)

22は須恵質の鉢、口縁部片。23・24は土師皿である。

#### **ST4006** (第74図)

木棺墓群の中央に位置する。遺構掘削時、ST4008との切り合いは判然としなかったが、断面図（第74図上）をみれば、ST4008に先行することが分かる。平面は長さ1.8m、幅0.7～1.1mの長方形を呈し、深さは1.0～1.1mである。墓坑の底面は長さ1.3m、幅1.2～1.1mの長方形を呈し、北東側がやや幅広となる。底面からは、底面長辺側にそれぞれ5、北東端と中央に1ずつの礫計12の礫が確認できた。墓坑の軸線から左右対称となる礫の配置からは、設置者の明確な意図を見て取ることができる。礫は平坦面を上にし、高さをそろえている。墓坑の軸線はN-120°～Wである。なお、ST4006南東側短辺からは、南東方向へ延びる溝が付設している。これはST4006に関連する遺構と考えているが、後述するSX4071に伴う可能性も否定できない。

墓坑の底面近くからは、釘2が出土した。原位置を記録することはできなかったが、この遺構に伴うことは確實である。遺構の形状や底面の礫の有り様をみれば、釘は木棺の存在を示し、底面の礫は棺台として機能していたと考えができるだろう。したがってこの遺構は墓（木棺墓）であると判断した。

ところで、遺構検出中、ST4006の東隅部から完形の丸瓦（第75図16）が凹面を上向きに出土し、その下から石錐11（第75図1～11）が出土した。不注意により、記録を取らず取り上げてしまったが、これらはST4006に対する供獻等の目的により置かれたと判断している。その内の3点は墓坑内に流れ込む形で検出された。その他、埋土内からも4点の石・土器片錐（第75図12～15）が出土している。

また、ST4006の南東下半部は上面から他遺構（SX4071）によって切り込まれている（第74図破線部分）。それは径1.2m程の平面円形を想定でき、ST4006の掘り込み部分の直上に存在する。深さは0.5m程。土層図では、1～10層までがこの埋土に相当し、11層はSX4071掘削時のST4006壁面の崩落土である。埋土には、炭・焼土・粘土塊・被熱痕跡のある石材が混じり、土層図からは小さな埋没単位を指摘することができる。担当者は、この近隣に何かの焼成遺構があり、SX4071はその残滓の廃棄土坑である可能性を考えている。

#### 出土遺物（第75図1～21）

16は土師質の丸瓦、1～11は16の下から出土した滑石製の石錘である。1・11のみ縦横十字方向に切目を施す。12～15は墓坑内出土の鉢で、13は土師質、他は滑石製。14は未成品か。17・20は染付で、17はC群の皿、20はC群の碗である。19はI類の竜泉窯系青磁碗。18は土師皿、21は備前焼のすり鉢。

#### ST4007（第74図）

ST4006の北東側に並列して存在し、南西側をST4006、東隅の一部をST4005に切り込まれている。平面は長さ1.25m程の幅広な隅丸長方形を呈するといえようか。深さは0.2～0.3mである。壁面は垂直近くに立ち上っており、底面は平坦。底面の平面形も墓坑平面と同じく幅広な隅丸長方形である。墓坑内の南東側隅部に礫1を検出した。この礫は扁平で、墓坑底面では無くわずかに浮いた位置に存在している。SX4071掘削時の影響を受けたのだろうか。なお、遺物は確認できなかった。

#### ST4008（第74図）

ST4006の西側に位置し、ST4006・4009を切り込んでいる。木棺墓群中、最も新しい遺構である。北西側は調査区外にあり、その全形を窺うことはできないが、残存部で長さ1.8m、幅0.9+a mを計り、平面は隅丸の略方形、もしくは幅広の隅丸長方形を呈するものだろう。壁面は垂直近くに立ち上がり、底面は平坦である。深さは0.7m程。今報告では木棺墓としているが、これのみ底面に礫（棺台）を確認しておらず、その認定には問題を残している。

#### 出土遺物（第75図25～28）

25は白磁皿口縁部片。26は瓦質の捏鉢。27は石鍋。28は土師壺である。

#### ST4009（第74図）

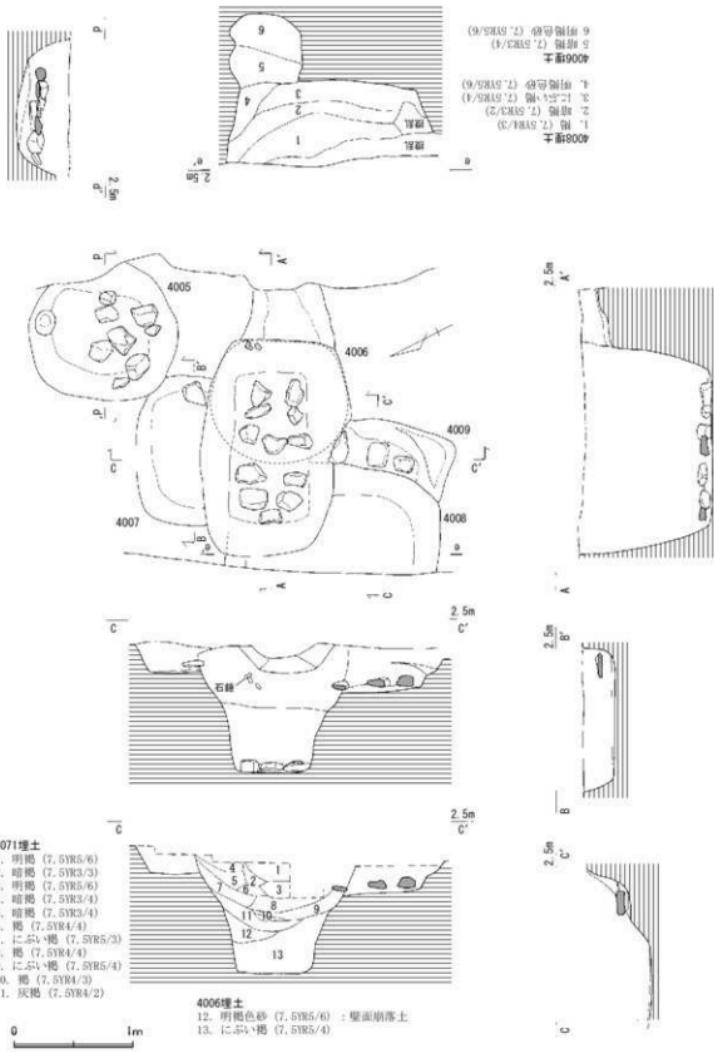
ST4006の南東側、北西側にST4008に存在する。遺構の多くをこの両者に切り込まれており、長さ0.9m、幅0.5m分のみが残存する。遺構の軸線はST4008に平行し、ST4006に直交するものだろう。壁面の立ち上がりは急角度であるが、墓坑南側隅部は2段の掘り込みとなっており、立ち上がり途中に平坦面がある。深さは0.3～0.4mを測る。底面には1列3石の礫が検出された。いずれも平坦面を上にし、直線的に配列されていることから、ST4006例と同じく木棺等の棺台として機能したものだろう。SX4071の影響により、北側の礫は原位置を保っていない。なお、遺物は確認できなかった。  
(5) その他の遺物

#### 攪乱出土の遺物（第76図1・4・5）

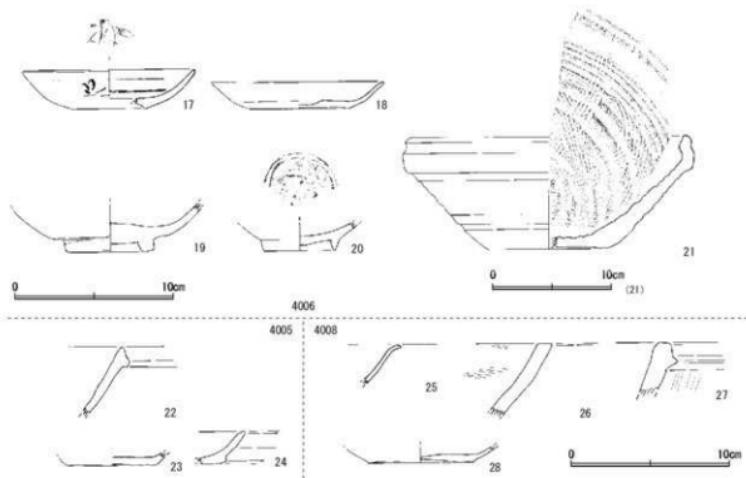
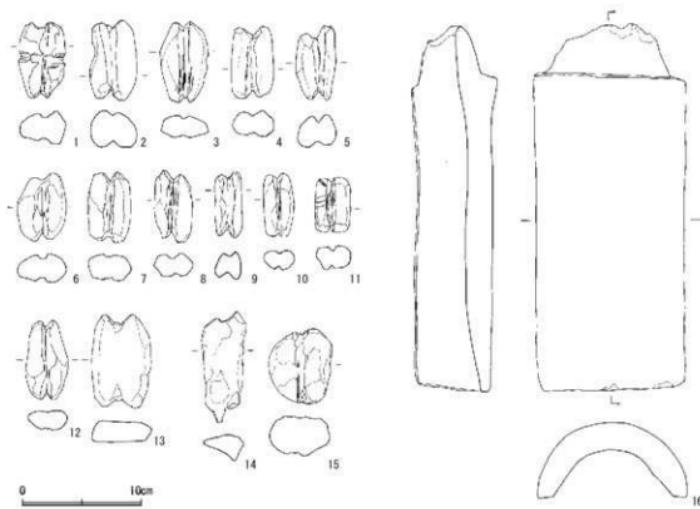
1・4は朝鮮陶器の碗。5は土師皿で、底面は糸切りによる。

#### 遺構面掘下中出土の遺物（第76図2・3）

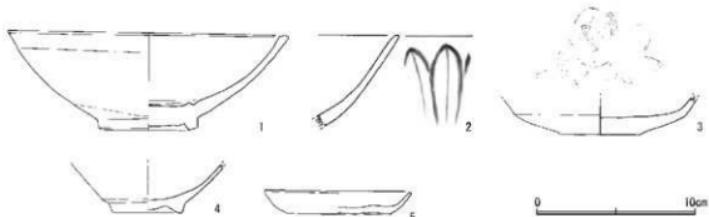
2・3は竜泉窯系青磁。2は碗で、外面に籠蓮弁文を施す。3は皿で、内面見込に花文を施す。



第74図 4区ST4005～4009 (1/40)



第75図 4区ST4005・4006・4008出土遺物 (1/4、1/3)



第76図 4区その他の遺物 (1/3)

## 第4節 6区の調査

### 1. 調査の概要

6区は2区の北東側へ続く調査区であり、かつての保存図書館前（北西側）に位置する。調査面積は400.9m<sup>2</sup>である。調査は排土処理の都合から、調査区を二分して行なった。まず北東側から調査に着手し、重機により標高3.2m程の現地表から0.6~0.7mまでの表土剥ぎを行なって、大学造成時の客土（厚さ0.2~0.3m）や搅乱土（厚さ0.4m程：褐色砂質土：7.5YR4/3）を除去し、標高2.6m前後の砂丘面である橙色砂層（7.5YR6/6）上面より調査を開始した（1区）。そして終了後に土砂を反転し、残り南西側の調査を行なっている（2区）。

砂丘面である橙色砂層は厚さ0.1~0.2m程で、その下には厚さ0.1m前後の明褐色細砂層（7.5YR5/6）、そして以下が橙色粗砂層（7.5YR6/6）となる。

6区もまた激しく搅乱を受けており、2区を中心とした時期の不明な柱穴や土坑、溝といった遺構が存在するのみである。その中で、調査区中央において確認した井戸（SE6010）について、以下にその所見を述べる。

### 2. 遺構と遺物

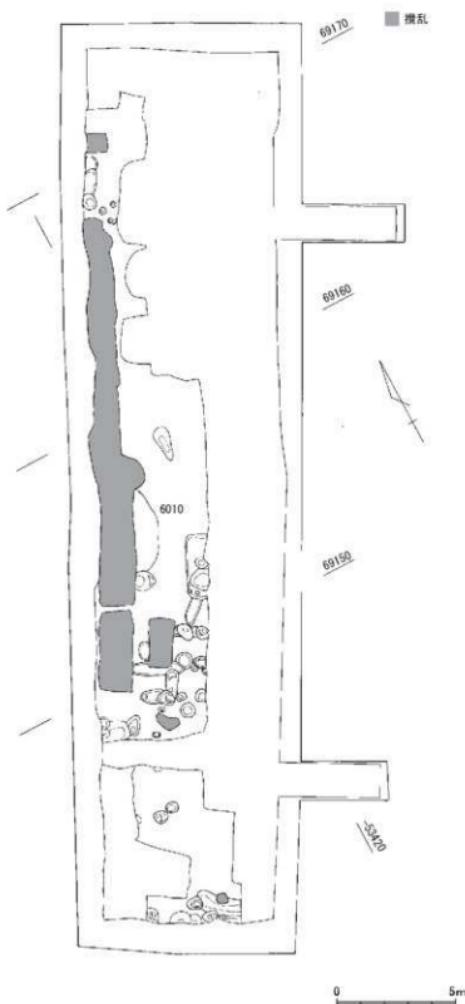
#### (1) 井戸 (SE)

#### SE6010 (第78図)

調査区の中央に位置し、遺構の北西側は調査区外に存在するが、平面は4.3×3.5m程の梢円形を呈するものだろう。ただ、井戸の北側は2段の掘方となっており、断面をみれば、ごく浅い1段目の後、広い平坦面が存在していることが分かる。したがって、今回検出した石組みを内部に収める掘方は井戸を中心とした2.8mの円形を呈している。井戸側は石組みによるもので、内径は0.8~0.9mを測る。主に石材を横位に据えて、4~6段積み重ねており、内面は平滑に整えている。石組みは深さ1m程が残存しており、石組底面に当たる標高1.0m以下からは径0.6m程の木桶が据えられている。湧水のため、木桶内の掘削は行なっていない。調査時、井戸石組みの中には多量の礫が投棄されており、底面中央には宝篋印塔の基礎が投棄されていた。また、この調査では石組みの検出までに止め、石組みを除去した掘方全体の完掘は行なっていない。

#### 出土遺物（第79図）

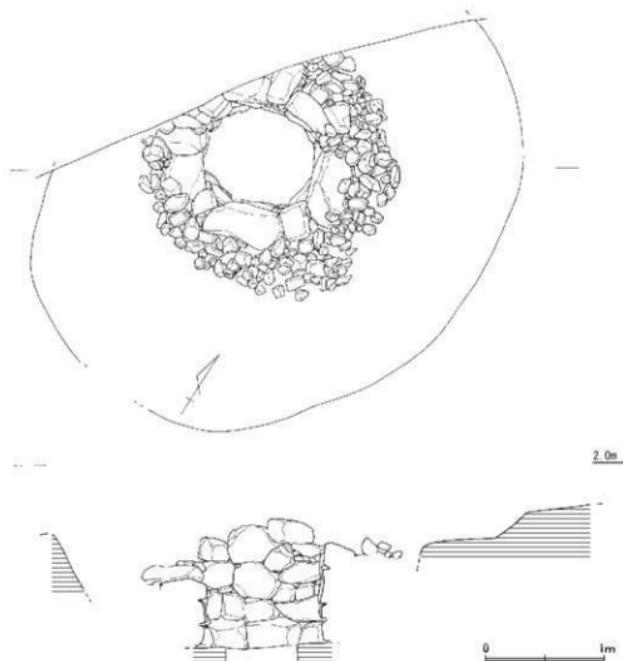
2・3・5~8・11が井戸検出中の出土遺物、1・4・9・10は掘方内出土の遺物である。1は陶器の瓶、2は瓦質の釜である。3は瓦質の火鉢。6~11は土錘である。



第77図 6区遺構配置 (1/100)

(2) その他の遺物

2・4・5・9・12・14は搅乱中の出土、その他は遣構検出中の出土である。1は口禿の白磁椀。2～4・9・10はI類の竜泉窯系青磁椀で、2・3・9は外面に蓮弁文、4は片彫りによる花文を施す。5はⅥ類の白磁椀。見込み部分の釉を輪状に搔き取っている。6はIV類の白磁椀底部片。7は朝鮮陶器の椀底部片で、内面見込と疊付に目跡を残す。8は瓦器椀の底部片。11・12は同安窯系青磁。11は椀で、外面に櫛目文を施す。12・15は皿で、内面見込に櫛状施文具による文様を施す。13・14は青磁皿の底部片。16は青磁の合子蓋。17は陶器の鉢で、釉はにぶい赤褐色を呈する。胴部は上半部で内湾し、口縁端部は肥厚させ、外側へ丸め込んでいる。

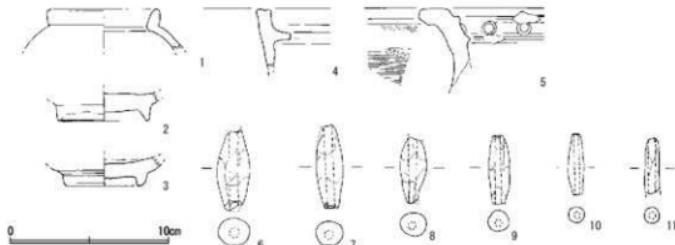


第78図 6区SE6010 (1/40)

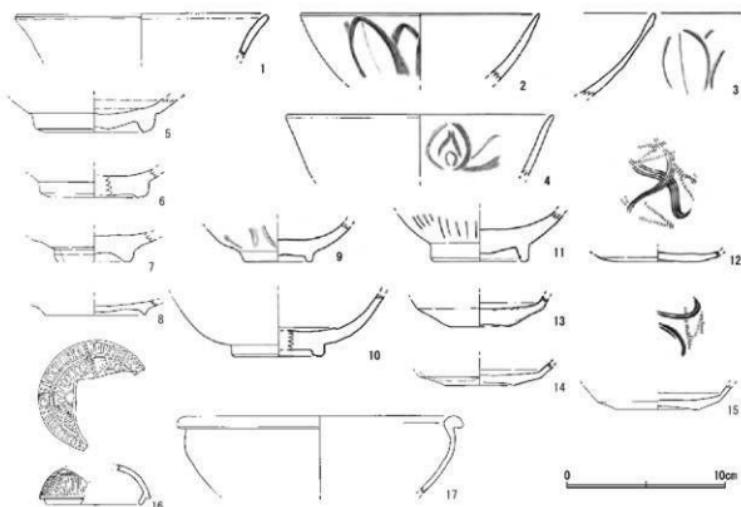
【参考文献】

小野正敏1982「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその時代」『貿易陶磁研究 N0.2』日本貿易陶磁研究会

宮崎亮一編2000『太宰府条坊跡 X V—陶磁器分類編—』太宰府の文化財第49集 太宰府市教育委員会



第79図 6区SE6010出土遺物 (1/3)



第80図 6区その他の遺物 (1/3)



図版 2



① 2区調査区中央部(東から)



② 2区調査区中央部南東側  
(北東から)



③ 2区調査区中央部北西側  
(南東から)



①4区南西側全景(北東から)



②4区北東側全景(南西から)



③4区北東側完掘状況  
(北東から)

図版 4



① 4 区 SD4035、SK4034・4039  
(北東から)



② 4 区 SD4045・SE4070  
(南西から)



③ ST4005 ~ 4009 (南東から)

## 第4章 第108次調査の記録

### 第1節 調査の概要

第108次調査地は九州大学旧箱崎キャンパス内、心理学教室と工学部本館の西側に位置する。

遺構面は現地表面下-1.6~1.3m、標高1.4~2.0mの明褐色~灰白色砂土である。遺構面は極細砂~粗砂の互層でラミナ状を呈し、大学校舎等の建設・解体による削平・攪乱が顕著である。よって大半の部分で遺構面の直上まで現代の盛り土が堆積していた。

本調査は使用中の排水管や電路、立木・車両用通路・工作物等により多くの部分で調査を断念せざるを得なかった。今回は2か所に分けて調査を実施し、それぞれ第108次調査1区・2区と呼称する。

今回の調査で検出した遺構は、井戸2基・土壙2基・柱穴・ピットである。井戸はすべて1区で検出され、1基が近世以降、それ以外は13~15世紀代と考えられる。土壙のうち1基は完形の龍泉窯系青磁碗や鉄釘が出土していることから木棺墓と考えられる。ピットには根石を有するものがあり柱穴と考えられる。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1. 井戸 (SE)

##### ①SE01 (第84図)

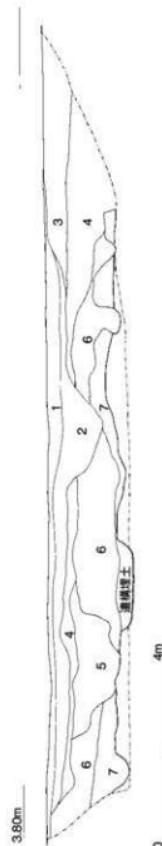
1区南東縁辺部で検出した。SE02を切り、SE05・06と切り合う。平面形は不整円形と推測され、最大径2.7mを測る。断面は井筒残存部上端から20cmまで緩やかに下るが、それ以下は急に深くなる。標高2.45mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらず標高2.0m以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から1.2~1.4mで底部に達すると推測される。埋土は褐色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高2.05m付近で上端を検出した。内径80cmを測る木桶を利用している。側板は幅10cm前後を測り、残存長45cm前後である。側板の多くは腐朽が進み、取り上げることはできなかった。なお、側板を緊結する籠は検出できなかった。

##### 出土遺物 (第85図)

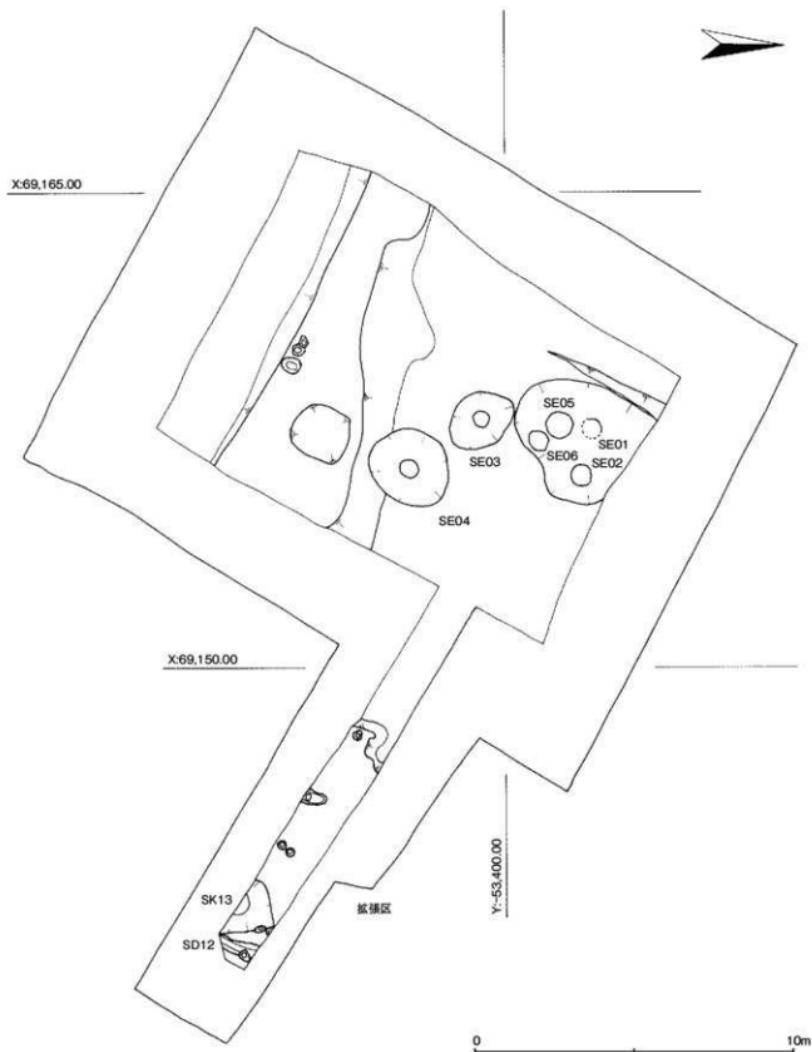
遺物は主に井筒の外から出土した。6の龍泉窯系青磁碗からSE01は15世紀前半頃に構築されたものと推測される。

1~4は土器器坏である。1のみ完形で出土。いずれも底面糸切りで1は板状圧痕を有し、底面が厚い。2は内底面から打撃によって径4mm前後の穿孔がなされる。5は白磁碗の小片である。内面には、褐色の釉で文様が描かれる。6は龍泉窯系青磁小碗である。底部の破片

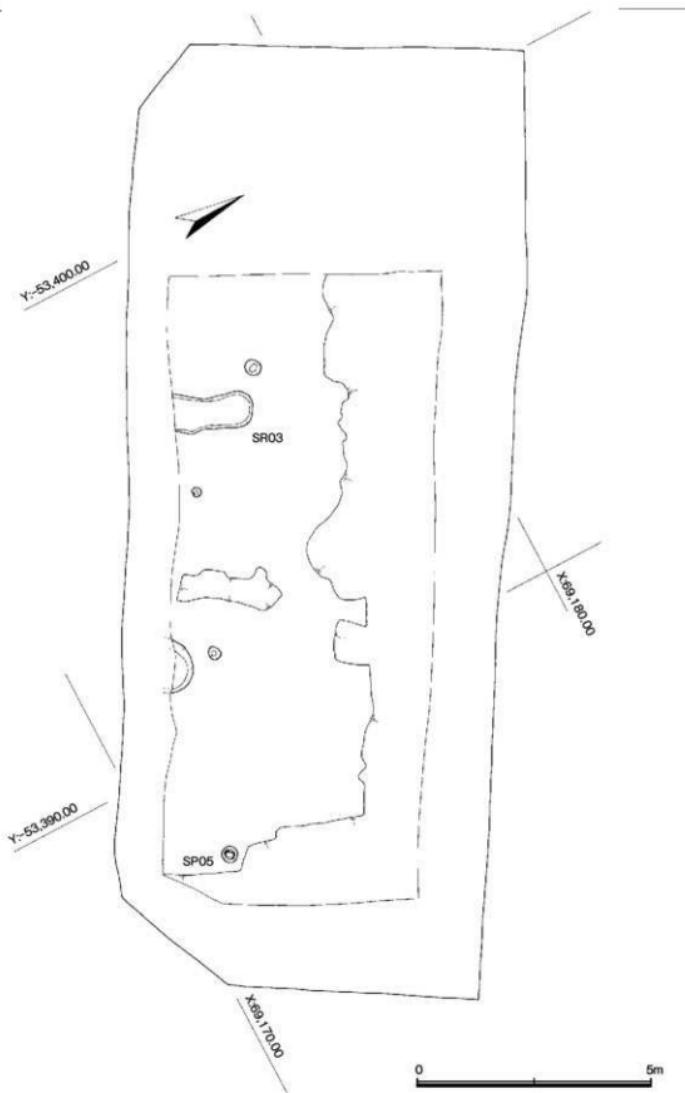
1. 黄褐色~褐色砂 現代の堅地上
2. 剥離色砂 現代の堅地上
3. 明黄色砂 マサ上、堅けの堅地上
4. 剥離色土 レンガ片を含む 穴を掘り瓦礫を埋めたものか
5. 剥離色土 レンガ片を含む
6. 剥離色土 剥離色砂 レンガ片を含む 近代以降の堅地上
7. 剥離~褐色砂 滅構面の黄褐色砂層との境界は無秩序的 近世切の田地表



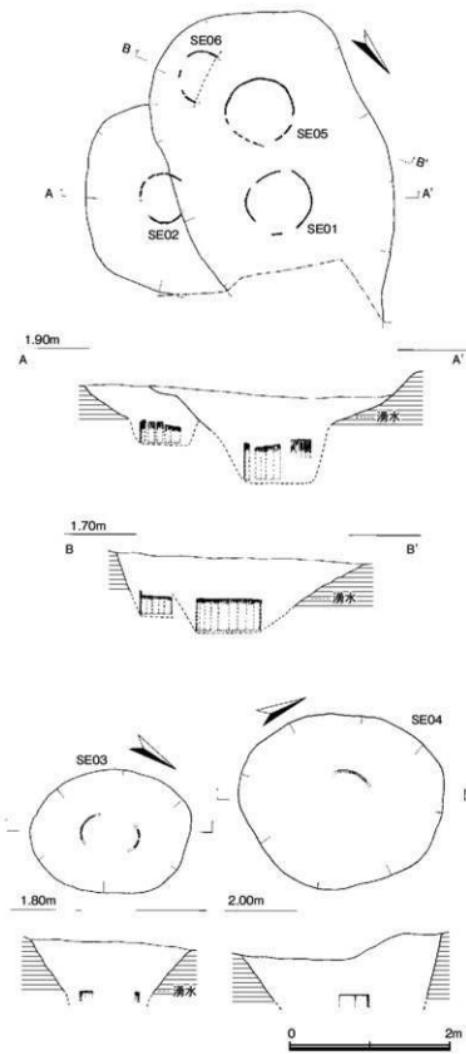
第81図 第108次調査2区南壁土層断面実測図 (1/100)



第82図 第108次調査1区全体図（1/150）



第83図 第108次調査2区全体図 (1/100)

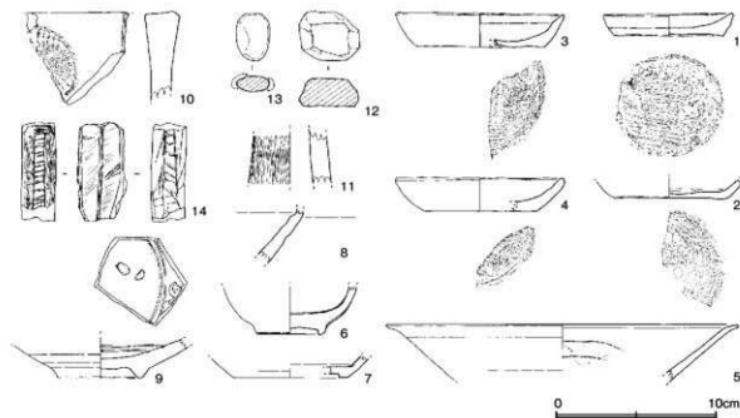


第84図 第108次調査検出井戸実測図（1/60）

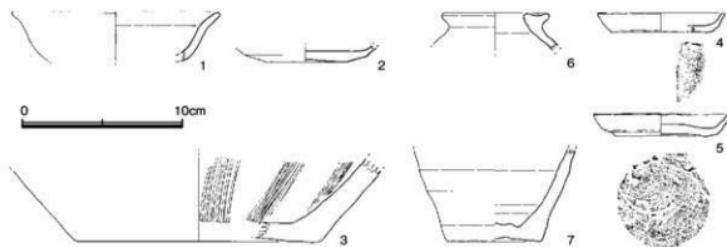
で器壁は厚い。灰緑色の釉が厚く掛かり全体に氷裂がある。7は越州窯系青磁皿である。底部の小片で淡緑色の釉がうすく掛かる。焼成は良好で胎土は乳白色を呈する。8は天目碗である。体部の小片で内面と外面の上部は黒褐色の釉がうすく掛かる。内面には砂目痕があり、外面にはヘラ削りの痕が残る。9は高麗青磁碗の小片である。全体に灰緑色の釉がうすく掛かり疊付と見込みに砂目痕が残る。内面には白土による象嵌が施される。10は瓦質土器である。所謂奈良火鉢で口縁部の小片、外面に花文のスタンプと輪花の境界が残る。11は土師器高坏である。脚部の小片で外面はヘラミガキで仕上げられる。12は瓦玉で磨滅が顕著である。重量20.1gを測る。13は扁平な楕円形の円碟で擦過による磨滅が観察できる。重量9.9gを測る。14は滑石製石鍋の加工品である。外周に鋭利な工具による溝が施され、直方体状の素材を複数折り取るためのもの。重量76.4gを測る。

## ② SE02 (第84図)

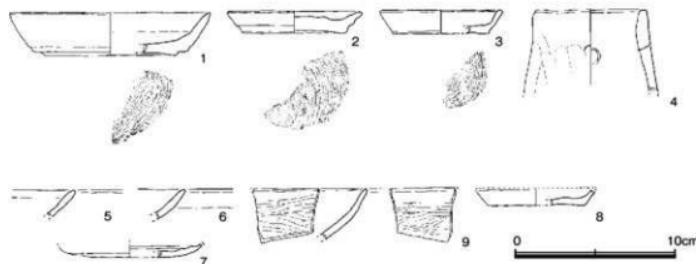
1区南東縁辺部で検出した。SE01・05・06に切られる。平面形は不整円形と推測され、最大径2.35mを測る。断面は井側残存部上端まで緩やかに下るが、それ以下は急に深くなる。標高2.45mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらず標高2.25m以下の掘削は断念せざるを得なかつたが、井側の残存状況から検出上面端から0.7mで底部に達すると推測される。埋土は暗黄褐色砂で井側の内



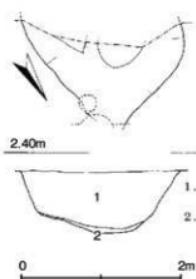
第85図 第108次調査SE01出土遺物実測図 (1/3)



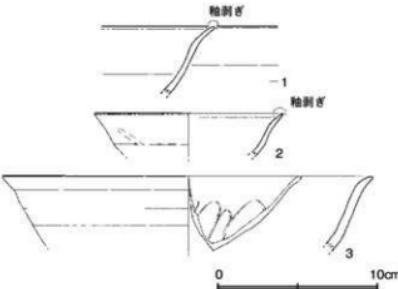
第86図 第108次調査SE02・03出土遺物実測図 (1/3)



第87図 第108次調査SE01・02、05・06出土遺物実測図 (1/3)



第88図 第108次調査  
SK13実測図(1/60)



第89図 第108次調査SK13出土遺物実測図(1/3)

外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高2.4m付近で上端を検出した。内径60cmを測る木桶を利用している。側板は幅8cm前後を測り、残存長20~35cm前後である。側板を緊結する継は検出できなかった。

#### 出土遺物(第86図・第87図)

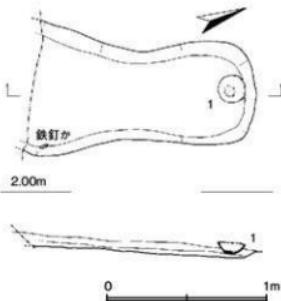
遺物は少なく時期を決め難いが、SE01に切られることから14世紀末~15世紀初頭頃の構築になろうか。

1は碗の小片である。口縁部は外反し内外面無文で福建産白磁か。2は白磁皿の底部である。体部はすべて失われ人為的に割り取られた可能性がある。3は擂鉢である。焼成が不良で胎土は土師質だが、外面に灰色を呈する層があり暫定的に瓦質土器とする。底部の小片で5条1単位の擂目が残る。

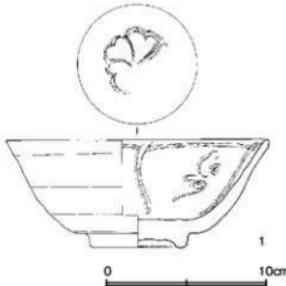
その他、SE01に帰属する可能性がある遺物を第87図に示す。1~4は土師器で、1は壺、2・3は小皿である。いずれも系切り底で板状圧痕はない。4は蜻蛉の小片である。

#### ③SE03(第84図)

1区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.5mを測る。断面は逆台形を呈するが、標高0.8mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかった。埋土は掘方が黄褐色砂、井側の内側は灰色砂で人為的に埋められている。井側は掘方の



第90図 第108次調査SR03実測図(1/60)



第91図 第108次調査SR03実測図(1/60)

中央部、標高0.8m付近で上端を検出した。内径70cmを測る木桶を利用している。側板は幅12cm前後を測る。側板を緊結する継は検出できなかった。

#### 出土遺物（第86図）

遺物は少なく時期を決め難いが、6の褐釉陶器から13世紀後半～14世紀前半頃の構築になろうか。4・5は土師器皿である。いずれも底部は糸切りで板状圧痕はない。6・7は褐釉陶器壺である。6は口縁部の小片で口縁の断面は三角形状を呈する。7は底部の小片で上げ底状となる。

#### ④SE04（第84図）

1区中央部で検出した。平面形は不整円形を呈し、長径2.4m、短径2.2mを測る。埋土は掘方が黄白色砂、井側の内側は暗灰色～黒褐色砂で小円礫を含む。井側は掘方の中央部、標高0.95m付近で上端を検出した。瓦組みの井戸で近世以降の構築と考えられる。

#### ⑤SE05（第84図）

1区南東縁辺部で検出した。SE01に切られ、SE06を切る。平面形は不整円形と推測され、断面は井側残存部上端から緩やかに下る。標高0.9mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出面上端から0.9mで底部に達すると推測される。埋土は褐灰色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は掘方の中央部、標高0.8m付近で上端を検出した。内径80cmを測る木桶を利用している。側板は幅10～12cm前後を測り、残存長40cm前後である。側板を緊結する継は検出できなかった。

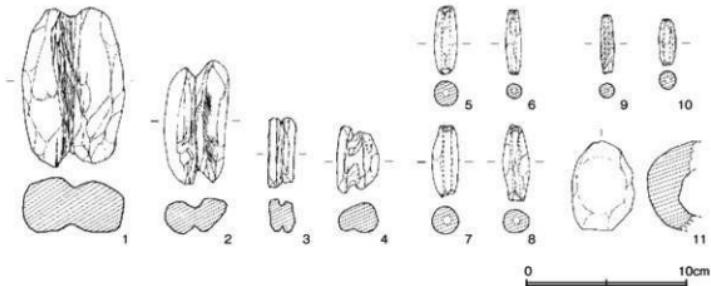
#### 出土遺物（第87図）

遺物が少なく時期を決め難いが、SE01に切られることから室町期の構築となろうか。

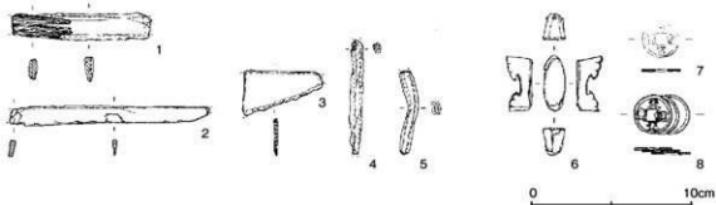
5～7は土師器壺の小片である。いずれも磨滅が顕著である。

#### ⑥SE06（第84図）

1区南東縁辺部で検出した。SE05に切られる。平面形は不整円形と推測され、断面は他の井戸に比し急角度に下る。標高1.0mで澄んだ地下水が湧水し、壁面の崩壊が止まらずそれ以下の掘削は断念せざるを得なかったが、井側の残存状況から検出上面から0.75mで底部に達すると推測される。埋土は褐灰色砂で鉄分が沈着する。井側の内外で土質に顕著な差はない。井側は標高1.0m付近で上端を検出した。内径70cmを測る木桶を利用している。側板は幅10cm前後を測り、残存長20～30cm前後である。側板を緊結する継は検出できなかった。



第92図 第108次調査出土石錐・土錐・土製品実測図（1/3）



第93図 第108次調査出土金属器実測図（1/3）

#### 出土遺物（第87図）

遺物が少なく時期を決め難いが、SE05に切られることから室町期の構築となろうか。

6は黒色土器A類椀の小片で九州系IV類にあたるか。7は土師器小皿である。板状圧痕はない。

#### 2. 土壌（SK）

##### ① SK13（第88図）

1区南部、トレンチ状に拡張した範囲で検出した。東半が調査区外となるが不整円形の土壌と推測される。埋土は大半が暗灰黄色砂で人為的に埋められるが、底部に有機物を含む暗灰色の自然堆積層が観察でき、埋められるまで一定期間放置されていた様子が窺える。

#### 出土遺物（第89図）

1・2は口禿げの白磁碗。3は龍泉窯系青磁碗である。13世紀後半～14世紀前半頃の土壌と考えられる。

#### 3. 木棺墓（SR）

##### ① SR03（第90図）

2区西部で検出した。東壁南端部で鉄釘が1本出土しており、木棺墓と考えられる。平面形は隅丸長方形と推測され、深さ8～10cmと大きく削られる。底面は凹凸がなく平坦である。埋土は炭化物を含む黄白色砂である。木棺の痕跡は検出できなかった。

#### 出土遺物（第91図）

1は龍泉窯系青磁碗である。ほぼ完形で内面は磨滅が進む。底面近くに正置した状態で出土しており棺外に置かれていたものか。釉は淡い青緑色で12世紀後半頃の木棺墓と考えられる。

#### 4. その他の遺物

##### ① 石錘・土錘・土製品（第92図）

1～4は滑石製石錘である。長辺方向に溝をつくり1は大型で重量360gを測る。1は1区壁面、その他は1区SE01出土。5～10は土錘である。いずれも1区SE01・02出土。径2～5mmの丸棒に粘土を巻き付けてつくる。9は器壁をヘラミガキで仕上げる。孔の両端は使用によって欠損し網状の漁具の縁辺に通して使用したものと考えられる。11は球形の土製品と推測され、内部を中空につくる。

##### ② 金属器・銭貨（第93図）

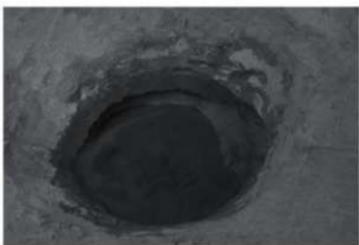
1～5は鉄製品。いずれも1区SE01出土。1・2は刀子で1は柄の木質が残る。2は研ぎ減りが顕著である。3は鋸の先端部で刃部にアサリは確認できない。4・5は鎌か。6は銅製刀装具で暫定的に鞘尻金具とする。1枚の銅板を曲げてつくり上部に釘孔を1カ所有する。鍍金の痕跡は観察できない。7・8は銅錢である。7は皇宋通宝。錢文は明瞭である。8は3枚重なった状態で出土し、上から天聖元宝、淳熙元宝、元祐通宝または元符通宝である。錢面の磨滅が顕著で緞銭の一部か。



第108次1区 全景（北より）



第108次1区  
SE01・02・05・06（北より）



第108次1区 SE03（北より）



第108次1区 SE03（南より）



第108次1区拡張区 全景（南より）



第108次1区拡張区 SK13（東より）



第108次1区拡張区 SD12 (南より)



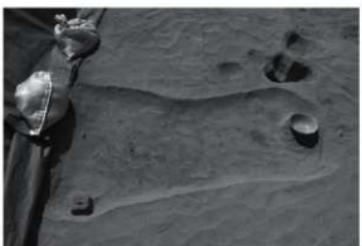
第108次1区拡張区 SD12 土層 (西より)



第108次2区 全景 (西より)



第108次2区 調査区南壁土層 (北より)



第108次2区 SR03 (東より)



第108次2区 SP05 (西より)

## 報告書抄録

## 箱崎 64

—第 92 次・第 102 次・第 108 次発掘調査報告—  
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第 1457 集

令和 4 年 3 月 24 日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目 1 番 8 号

印 刷 協文社印刷株式会社  
福岡市西区小戸 4 丁目 24 番 5 号



